



Title	『五国対照兵語字書』の研究
Author(s)	胡, 琪
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11592号
Issue Date	2014-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k11592
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57731
Type	doctoral thesis
File Information	Qi_Hu.pdf



博士学位論文

『五国対照兵語字書』の研究

平成 26 年度

北海道大学大学院文学研究科

言語文学専攻

胡 琪

目 次

凡 例	1
はじめに	2
1. 『五国』の構成	5
1.1 扉	5
1.2 序文	6
1.3 凡例	8
1.4 中扉と略語表	10
1.5 本文	12
1.6 正誤と毛色解及毛色類別	17
2. 『五国』の編者	18
2.1 『五国』の編者に関する先行研究	18
2.2 西周	20
2.3 室岡峻徳	21
2.4 菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎	23
3. 『五国』の成立過程	25
3.1 『五国』の編纂に関する先行研究	25
3.2 「陸軍省大日記」の史料	26
3.3 まとめ	32
4. 『五国』の翻訳底本	34
4.1 『五国』の翻訳底本に関する先行研究	34

4.2	蘭達拉多(LANDOLT)の経歴と著作	37
4.3	LANDOLT(本編)と LANDOLT(補遺)	38
4.3.1	Landolt(本編)	38
4.3.2	Landolt(補遺)	39
4.3.3	日本における Landolt(本編)と Landolt(補遺)の所蔵	40
4.4	『五国』の翻訳底本	42
4.4.1	検証方法	42
4.4.2	検証結果	43
4.5	まとめ	48
5.	『五国』の準備期の稿本	50
5.1	先行研究とその問題点	50
5.2	池田手稿	53
5.3	池田手稿と『五国』	57
5.3.1	検証方法	57
5.3.2	池田手稿と Landolt (本編)・Landolt (補遺)との関係	58
5.3.3	池田手稿と『五国』との関係	60
5.4	まとめ	67
6.	『五国』の収録項目	68
6.1	『五国』の収録項目に関する先行研究	68
6.2	『五国』の収録項目	69
6.3	アルファベット配列からわかる『五国』の特徴	69
6.4	術語注記を通して見た『五国』	79
6.5	まとめ	82
7.	『五国』の翻訳特徴	84
7.1	『五国』の翻訳特徴に関する資料と先行研究	84
7.2	見出し項目と日本語訳の対応関係	86
7.2.1	見出し項目と日本語訳の対応関係の全体図	86

7.2.2	一つの収録項目に付き、一つの日本語訳を附する	87
7.2.3	一つの収録項目に付き、複数の日本語訳を附する	89
7.3	日本語訳の表記	92
7.3.1	分類	92
7.3.2	漢字表記語	92
7.3.3	漢字・仮名まじり表記語	96
7.4	見出しのドイツ語・英語・オランダ語と日本語訳の関係	100
7.5	まとめ	104
8.	『五国』の日本語訳「服務」	105
8.1	問題提起	105
8.2	「服務」についての先行研究	106
8.3	日本語における「服務」の誕生	108
8.3.1	日本の対訳辞書における「服務」	108
8.3.2	軍事関連書における「服務」	111
8.4	日本語における「服務」の変遷	114
8.4.1	軍事関連書における「服務」の使用	114
8.4.2	軍事用語から一般化された「服務」	116
8.4.3	明治以降の国語辞書における「服務」	118
8.5	中国語における「服務」の流入	119
8.5.1	『漢語大詞典』における「服務」の記述	119
8.5.2	軍事関連書の訳本と「服務」の流入	121
8.6	中国語における「服務」の受容	122
8.6.1	民国時期における「服務」の使用	122
8.6.2	1949年以降における「服務」の使用	124
8.7	まとめ	129
9.	『五国』の2字漢語	131
9.1	調査方法	132
9.2	調査結果	135

9.3 『日国』における初出例より『五国』のほうが早いもの	139
9.4 『日国』において初出例が挙げられていないもの	149
9.5 まとめ	153
おわりに	154
資料編	158
資料 1 『五国』のデータベース	159
資料 2 日本国内にある『五国』(2冊)とその蔵書印	161
・日本国内にある『五国』とその蔵書印	162
・日本国内にある『附図』とその蔵書印	164
資料 3 日本国内にある LANDOLT (本編) と LANDOLT (補遺)	166
参考文献	170
調査資料	173
使用コーパス・データベース	178

凡 例

一、本論に現れた主な書物の略称について、次のように統一する。

1. 本編の『五国対照兵語字書』と別巻の『五国対照兵語字書附図』を総称する時には、「『五国』(2冊)」と略す。
2. 本編の『五国対照兵語字書』を「『五国』」と略す。
3. 別巻の『五国対照兵語字書附図』を「『附図』」と略す。
4. オランダの陸軍大尉蘭達拉多(Heinrich Mathias Friedrich Landolt)を‘Landolt’と略す。
5. Landoltの著書 *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* (1866-1868) を「Landolt(本編)」と略す。
6. Landoltの著書 *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine Supplément* (1871) を「Landolt(補遺)」と略す。
7. 池田良輔の手稿『兵学辞書 Aノ部：仏独英蘭日五ヶ国対訳』を「池田手稿」と略す。
8. 『日本国語大辞典』(第二版)を『日国』と略す。

二、本論で『五国』の収録項目を引用する時に、縦書きで書いた日本語訳を横書きにする。
また、改行を原文のままに引用する。

三、本論で『五国』およびほかの書物の内容を引用する時に、可能な限り原文通りの字体で記す。

四、紀年法は西暦表記を基本とする。日本で成立した資料には、「1881年(明治14年)」のように、年号を併記する。

はじめに

明治期は封建的な幕藩体制から近代国家への転換期である。政府は富国強兵・文明開化などを提唱し、経済・政治・文化などさまざまな面で、積極的に西洋のものを学び、近代化を図ろうとしていた。近代化の発展とともに、訳語を中心とする新漢語も大量に創出された¹。これらの新漢語は、日本の近代化だけではなく、日本語にも大きな影響をもたらしている。従って、日本語の中の漢語を研究する時には、明治期に創出された新漢語を重要視しなければならない。

明治期に創出された新漢語について、これまでの研究をみると、語誌についての研究(沈国威 1999・2008、八耳 1992)、語構造についての研究(高野 1985・2004、陳力衛 2001)、特定の人物によって創出された新漢語についての研究(鈴木 1983、李運博 2006)、特定の本に収録されている新漢語についての研究(沈国威 1996a、湯浅 1982)など、様々な角度から検討されてきた。さらに、近年になると、分野別に明治期の新漢語についての研究が盛んに行われているようになった。たとえば、哲学用語(朱京偉 2003)、医学用語(沈国威 1996b)、地理用語(荒川 1997)、植物用語(沈国威 2000、朱京偉 2003)、化学用語(蘇小楠 2006)などの分野における新漢語を体系的に扱う研究が大きな成果を挙げている。

しかし、明治期に創出された新漢語は数が膨大であり、関係する分野も幅広いため、その全容を解明するには、数多くの課題が残っている。このような状況の中、筆者は先行研究の少ない軍事分野から着手し、なかでも「日本の最初の「兵語」統一事業の責任を担っている」²とされる『五国対照兵語字書』(以下『五国』)を取り上げ、調査と検討を行いたいと思う。

『五国』は 1881 年(明治 14 年)参謀本部によって刊行された日本最初の軍事用語対訳辞書である。その書名の通り、『五国』はフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語・日本語の五ヶ国語を収録している。『五国』に収録されている語はフランス語の ABC 順に並んでいる。フランス語の原題は、*Dictionnaire Polyglotte Militaire et Naval* である。これを直訳すれば、「多言語陸海軍用語辞書」となる。『五国』の翻訳は数多くの翻訳書を出した

¹ 古く中国から伝来した漢語と区別する為に、従来の研究では、これらの漢語を「和製漢語」・「日本製漢語」・「新漢語」などと呼ぶことが多い。本論文では、「新漢語」と呼ぶことにする。

² 『戦略・戦術用語事典』(片岡徹也・福川秀樹, 2003), p. 3

明治の啓蒙家西周をはじめとする翻訳チームによって行われた。この辞書には、軍隊で使う兵器・号令が収録されている上に、軍隊生活を送るための必要な言葉も収録されている。このように『五国』は、明治期の軍事分野の語彙を考察する上で貴重な資料と言える。

従来の研究において、『五国』は、「明治時代の最大規模の辞典」³、「日本の軍隊用語の決定にあずかって力があつたもの」⁴などと評価されている。しかし、これらの研究は殆ど『五国』を解題するもので、辞書の具体的な構成、編纂の事情及び収録語彙についての詳しい研究は、管見の限りではまだ存しない。従って、本論文では、『五国』が如何なる辞書であるか、如何なる編纂過程を経て出版されたか、如何なる役割を持っているか、収録されている語彙は現代の日本語に如何なる影響をもたらしたかなどの基礎的な問題を中心に、考察を行いたいと思う。また、『五国』の考察によって、明治期における辞書編纂の事情についても、その一部を解明することができると考える。

本論文は「はじめに」と「おわりに」を入れて、11の部分から構成される。第1章から第5章までの5章は、書誌学的・文献学的な面から『五国』の構成・編者・成立過程・翻訳底本・準備期の稿本の五つの問題について検討する。第6章から第9章までの4章は、語彙論の観点から『五国』の収録項目の概要・翻訳特徴・2字漢語を中心とする初出語彙の問題を検討する。以下、順を追って各章で検討する内容について紹介する。

「はじめに」の部分では、本研究の目的を明らかにし、論文構成及び各章の内容について紹介する。

第1章では、『五国』の構成について紹介する。『五国』は扉・序文・凡例・中扉・略語表・本文・正誤・毛色解及毛色類別の八つの部分からなっている。本章では各部分の内容について詳しく紹介する。

第2章では、辞書編纂に携わった編者の略歴について紹介する。『五国』の序文によると、当初、辞書編纂に携わったメンバーは8、9人居たが、編纂が進行する間に、編者の出入りや、死没があり、最後には、西周・室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎の5人が残った。本章では、これら5人の略歴及び著書・翻訳書について紹介する。

第3章では、明治初期の史料「陸軍省大日記」に基づき、『五国』の編纂事情を調査する。防衛研究所史料研究センターに所蔵されている「陸軍省大日記」に『五国』の編纂に関する史料が三つある。本章では、まず、史料の原文画像を提示し、その内容を翻字する。次に、史料の内容をそれぞれ整理する。最後に、史料の内容を、『五国』の序文・凡例、先行研究の内容と合わせて、時間軸に沿って辞書の編纂事情をまとめる。

³ 西堀(1973)

⁴ 豊田(1963)

第4章では、『五国』の翻訳底本について考察する。『五国』の序文によると、『五国』は1867年に出版されたオランダの陸軍歩兵大尉蘭達拉多(ラッダラド)の著書『海陸軍術語薈譯辭書』に日本語訳を附したものである。しかし、『五国』の序文や従来の研究に、『五国』の翻訳底本についての具体的な情報は記されていない。そこで、本章では、オランダの陸軍歩兵大尉蘭達拉多(ラッダラド)は如何なる人物であるか、『海陸軍術語薈譯辭書』は如何なる辞書であるか、欧文書名は何であるかなど、『五国』の翻訳底本をめぐる多数の問題を解明する。

第5章は、『五国』の準備期の稿本について考察する。現段階では、『五国』の準備期の稿本である可能性の高いものは、和歌山の洋学者池田良輔の手稿『兵学辞書 Aノ部：仏独英蘭日五ヶ国対訳』である。本章では、『兵学辞書 Aノ部：仏独英蘭日五ヶ国対訳』と『五国』のA部とを対照し、両者の関係を解明する。また、両者の訳を比べ合わせながら、『五国』に収録されている日本語訳の特徴について分析する。

第6章では、『五国』の収録項目について紹介する。『五国』の収録項目はフランス語のABC順に並んでいるため、まず、アルファベットの順番で『五国』の収録項目を分類する。次に、『五国』とほぼ同じ時期に出版された仏和辞書『仏語明要』(村上英俊, 1864)と比べ、両者の相違を検討する。さらに、『五国』では、収録項目が専門術語である場合には、‘art.’(砲兵科語)、『mar.’(海軍語)、『min.’(造兵語)などのような術語注記が付いているので、術語注記で『五国』の収録項目を分類し、その特徴を解明する。

第7章では、『五国』の翻訳特徴について考察する。見出し項目と日本語訳の対応関係、日本語訳の表記、見出しのドイツ語・英語・オランダ語と日本語訳の関係の三つの方面から検討する。

第8節では、『五国』の日本語訳「服務」という言葉を例に、日中語彙交流の視点から、日本語における「服務」の誕生と発展や、中国語における流入と受容などについて考察する。この考察によって、現代日本語、ひいては現代中国語における『五国』の日本語訳の影響を一部解明する。

第8章における「服務」の考察では、『日本国語大辞典』(第二版)における「服務」の初出例は『五国』より15年遅いことが判明したため、第9章では、「服務」のような、『五国』における記述が『日本国語大辞典』(第二版)における初出例より早い『五国』の2字漢語を調査し、『五国』の役割を解明する。また、今後『日本国語大辞典』(第二版)における用例の追加・修正に関する情報を提供する。

「おわりに」の部分では、全体をまとめ、本論文の意義と今後の課題について述べる。

1. 『五国』の構成

1881年(明治14年)2月、参謀本部により、『五国対照兵語字書』(2冊)が出版された。

『五国』(2冊)は本編の『五国』と、別巻の『附图』からなる。本研究の研究対象とする『五国』は基本的に本編を指している。本研究に使う『五国』は北海道大学文学研究科言語情報学講座に所蔵するものである。

『五国』の大きさは縦23cm、横16.5cm、厚さ5.8cmである。表紙は黒い堅紙で、背に「五國兵語字書 参謀本部編」と箔押される。全1,014ページで、扉・序文・凡例・中扉・略語表・本文・正誤・毛色解及毛色類別の八つの部分からなる。

本章では各部分について詳しく説明する。

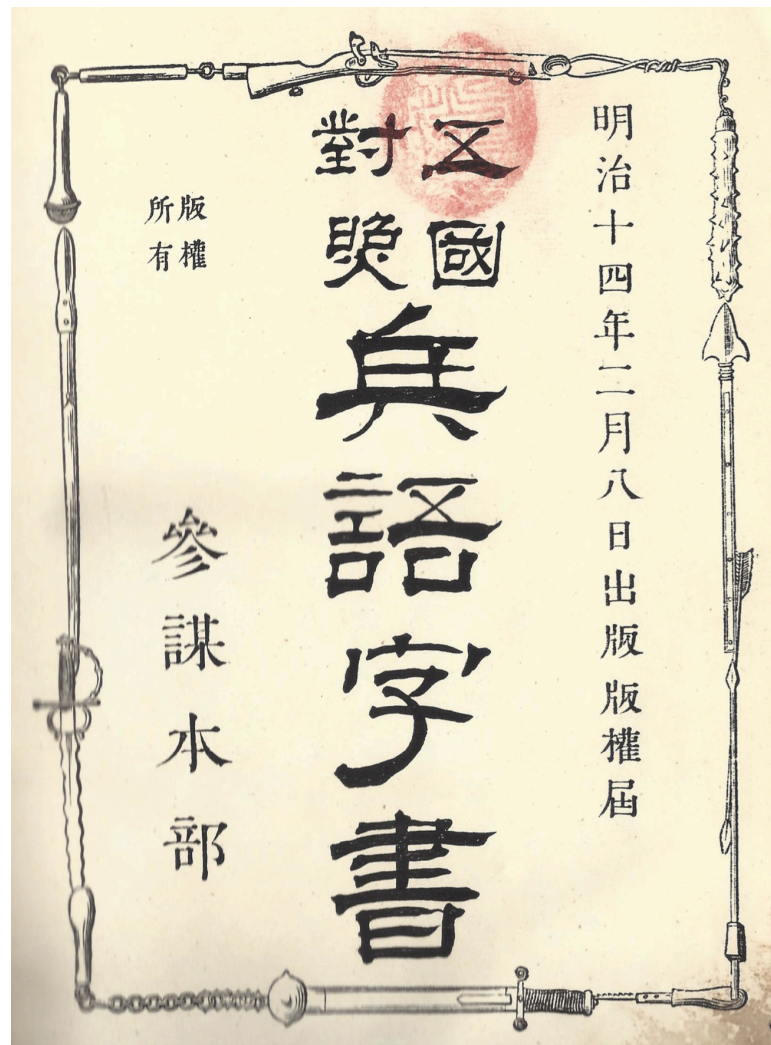


図1 『五国』の扉

1.1 扉

図1は『五国』の扉である。扉は左開きになっており、四方には、銃、金棒、矢、サ

ーベルなどの兵器が描かれている。

扉には右から左へ、「明治十四年二月八日出版版權屆／五國
對戰兵語字書／版權
所有參謀本部」（引用部分の字体は原文の通り、「／」は改行を示す。以下同）と縦書きで印字される。扉の中央部にある「五國
對戰兵語字書」の右側に、直径 3cm、丸型の「参謀」の朱印が押されている。

1.2 序文

扉をめくると、本文と逆向きに綴じられている 4 ページの序文が続く。この序文は漢文で書かれている。信岡(2003)では、漢文で書かれた序文と凡例を日本語に読み下しており、参考になる。本節では、その内容を次にまとめておく。

『五国』の序文は 1880 年（明治 13 年）12 月付で、西周によるものである。西周は序文の最初に、「翻譯之業難矣。而以葱嶺以東之語。譯葱嶺以西之語。尤難。」⁵のように、西洋の言葉を日本語に翻訳することの難しさを説く。

そして、『五国』の翻訳底本について、

此書所據。係和蘭陸軍歩兵大尉蘭達拉多氏所輯。號海陸軍術語舊譯辭書者。彼千八百六十七年所印行。而纂集佛朗西獨逸英吉利和蘭四國語之對譯辭書也。而今譯者。加參以各種辭書。及各科兵書。比審讐覈。討究幾盡。欲其精確也。⁶

と書かれている。

すなわち、『五国』は 1867 年に出版されたオランダの陸軍歩兵大尉蘭達拉多の手記を四ヶ国語対訳辞書『海陸軍術語舊訳辞書』に基づいて翻訳されたものである。また、『五国』を編纂する時に、各種の辞書や兵書を参考にしたこともわかる。

続いて、『五国』の編纂背景について、

若夫人各取諸胸臆。而創立譯字。則同語異譯。異語同譯。新舊雜出。讀者不知所適從。或施諸行事。致有差謬。則毫釐千里。可不儆乎。凡此等諸病。非有對譯辭書。以律之。則別莫有良法必矣。及我陸軍省置參謀局也。夙有觀於此。欲撰定一書。以斷其紛錯。

⁵ 「葱嶺」とは、パミール高原のことである。ここの「葱嶺以東」はアジアのことを指し、「葱嶺以西」は西欧のことを指している。

⁶ 下線部は原本のままである。

と書かれている。

読み下すと、「若シ夫レ各人諸ヲ胸臆ヲ取りテ、譯字ヲ創立スレバ、則チ同語異譯、異語同譯、新舊雜出シテ、讀者ハ適從スル所ヲ知ラズ。或イハ諸ヲ行事ニ施シテ、差謬有リヲ致サバ、則チ毫釐千里。倣メザル可ケンヤ。凡ソ此等諸病、對譯辭書有リ以テ之ヲ律スルニ非ザレバ、則チ別ニ良法有ルコト莫キハ必セリ。我陸軍省參謀局ヲ置クニ及ブヤ、夙ニ此ヲ觀ル有リ。一書ヲ選定シ以テ其ノ紛錯ヲ斷タント欲シ」⁷である。つまり、陸軍省は兵語の紛錯⁸を断つために、『五国』の編纂を発足したということである。

さらに、『五国』の編纂に関わる事情や編者について、

明治七年五月。下令於翻譯課。然時會有他繙譯之事。遷延不果。至八年三月。更下命。於是集譯者八九輩而專從事於此。爾後經五星霜。至十二年十月。始脱稿而上之。中間譯者之出入死沒。亦不少。及成功而遺者。僅五人。八等出仕室岡峻徳。十等出仕菊野七郎。十等出仕若藤宗則。十四等出仕矢島玄四郎。與周耳。

と書かれている。

この部分で述べられているのは「明治7年5月、翻訳課に下命するが、他の翻訳業務のため、のびのびとなって果たせなかった。明治8年3月に至って、再び下命した。訳者8、9人を集め、もっぱらこの仕事に従事させた。5年後の明治12年10月に脱稿して、これを上申した。編纂の間に、編者の出入りや、死没が少なくない。完成の時に、残ったのは室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・西周の5人のみである。」ということである。

つまり、はじめて編纂の命令を下したのは1874年(明治7年)で、編纂をはじめたのは1875年(明治8年)で、完成したのは1879年(明治12年)であるということである。編纂当初は、編者は8、9人居たが、完成した時には、室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・西周の5人のみが残ったということが分かる。

この部分の後ろに、「周奉職陸軍省也。率司翻譯之事。而此書之成。周終始任總裁之事。」という内容が続く。ここで、西周は最後まで、『五国』の編纂の総裁を務めていたことが分かる。

⁷ 読み下し文は信岡(2003)による。

⁸ 「紛錯」とは「入り乱れること。まじり乱れること。紛雜」の意味である。

以上に示した西周の序文の内容によると、『五国』は兵語の紛錯を断つために、編纂されたものである。編纂には 1874 年から 1879 年までの 5 年を要した。『五国』の翻訳底本は 1867 年に出版されたオランダの陸軍歩兵大尉蘭達拉多ランタラダの四ヶ国語対訳辞書『海陸軍術語薈訳辞書』である。辞書を編纂する際には、各種の辞書・兵書を参考にした。辞書の編纂はチームによる編纂であり、参加した人物は室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・西周などである。その中で、西周は『五国』の編纂の総裁を務めていた。

1.3 凡例

序文が終わると、2 ページの凡例が続く。凡例は序文と同じように、漢文で書かれている。凡例は 1881 年(明治 14 年)1 月付で室岡峻徳によるものである。10 箇条からなる。

一つ目は、『五国』の翻訳底本を選定する理由についての説明である。

原書印行在西曆一八六七年、至今殆經十五星霜、其間技藝日進、工業月精、新器奇具之出世者不少、此類之係印行後者、原書固不載其名稱、人或以爲憾焉、然古本也、今末也、不稽古往之出處來歷、則不能審今來之是非得失、……(中略)……況於今世、備四國對譯之體裁、舍是書而他無可取者乎、(後略)

大体の意味は、凡例の書かれた時からみると、15 年前の 1867 年出版の翻訳底本の『海陸軍術語薈訳辞書』には時代遅れの部分があるが、古い出所や来歴を考証しなければ、今の是非と得失を詳らかにすることができない。それに、今(凡例を書く時)世の中に、四ヶ国語対訳の体裁を備えたものは、この翻訳底本以外にはない。

確かに、当時の社会背景をみると、江戸時期に、各藩の兵式はフランス式・イギリス式・ドイツ式など、バラバラであった。明治初期になると、兵式が統一されたことと共に、兵語の統一も急がれた。四ヶ国対訳の体裁を備えた『五国』は兵語の統一に相応しい資料であろう。

要するに、1867 年に出版されたオランダの陸軍歩兵大尉蘭達拉多ランタラダの四ヶ国語対訳辞書『海陸軍術語薈訳辞書』を翻訳底本にするのは、慎重に考えた結果だったと思われる。

二つ目は、翻訳底本の『海陸軍術語薈訳辞書』の構成などについての説明である。

是書原本五卷、本編四卷、每編別佛獨英蘭之語、而互相足爲主客、續編一卷、更輯佛

獨蘭三國之語、以補本編遺漏、今所纂譯、本編及續編、共以佛語爲主、故下譯字、亦專據佛國之定例、較獨英蘭之慣用、則或不允當、覽者諒焉、

ここでわかるのは、翻訳底本の『海陸軍術語薈訳辞書』はフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語の対訳辞書であること、本編 4 巻と補遺 1 巻からなっていること、『五国』はフランス語編の辞書を底本にして編纂されたこと、翻訳は専らにフランスの常例によることである。

三つ目は、編纂の時に利用した参考書についての説明である。

原書之體裁大抵以語譯語、不下注解、是以繙譯之際、所參照比較書、殆五百餘部、今不一々揭其書名、厭繁冗也、

その意味は、「翻訳底本は注を施さず、語を語で訳すことが多い。翻訳の際に、書物を 500 部余り参考にした。一々挙げるのが冗長であるため、ここ（凡例）に一々挙げることをしない。」となろう。室岡峻徳は西周と同じように、『五国』を編纂する時に、参考書を多く使ったことを述べたが、具体的に如何なる書物を参考にしたかについては、言及していない。

それに続いて、『五国』を編纂する時に従う方針が 4 箇条に分けて記されている。たとえば、西洋樹木の名称を翻訳する時に、本草家の書物などで和名と漢名を明らかにしてから、日本語訳を決めること、馬毛を翻訳する時に、ヨーロッパの名称を、和名と漢名とに対照しながら、新たに訳語を定めること、軍馬の毛色病名の翻訳に、適当な訳語が決められない時に、訳語が欠如すること、原語の意味が不詳である場合には、音訳で訳すことなどである。

最後 3 箇条は、正誤表、辞書の符号、『附図』についての説明である。たとえば、『五国』における人名、地名の表し方は、常例に従い、右に二重線を施すことである。また、『附図』について「原書五卷不載圖、當譯是書、搜羅群書、會有圖者、則摹寫焉、終輯一卷題曰兵語字書附圖異日當博採而補之、」と述べているから、『附図』が翻訳底本によるものではなく、翻訳の時に集めた図のまとめであることが分かる。

1.4 中扉と略語表

序文と凡例の後に、中扉が続く(図 2)。中扉に、『五国』のフランス語の標題が書かれている。従来の研究では、この標題を『五国』の翻訳底本の欧文書名と間違っただことが多い(豊田 1963・惣郷・朝倉 1977・早川 2006)。中扉に次の内容が記されている。

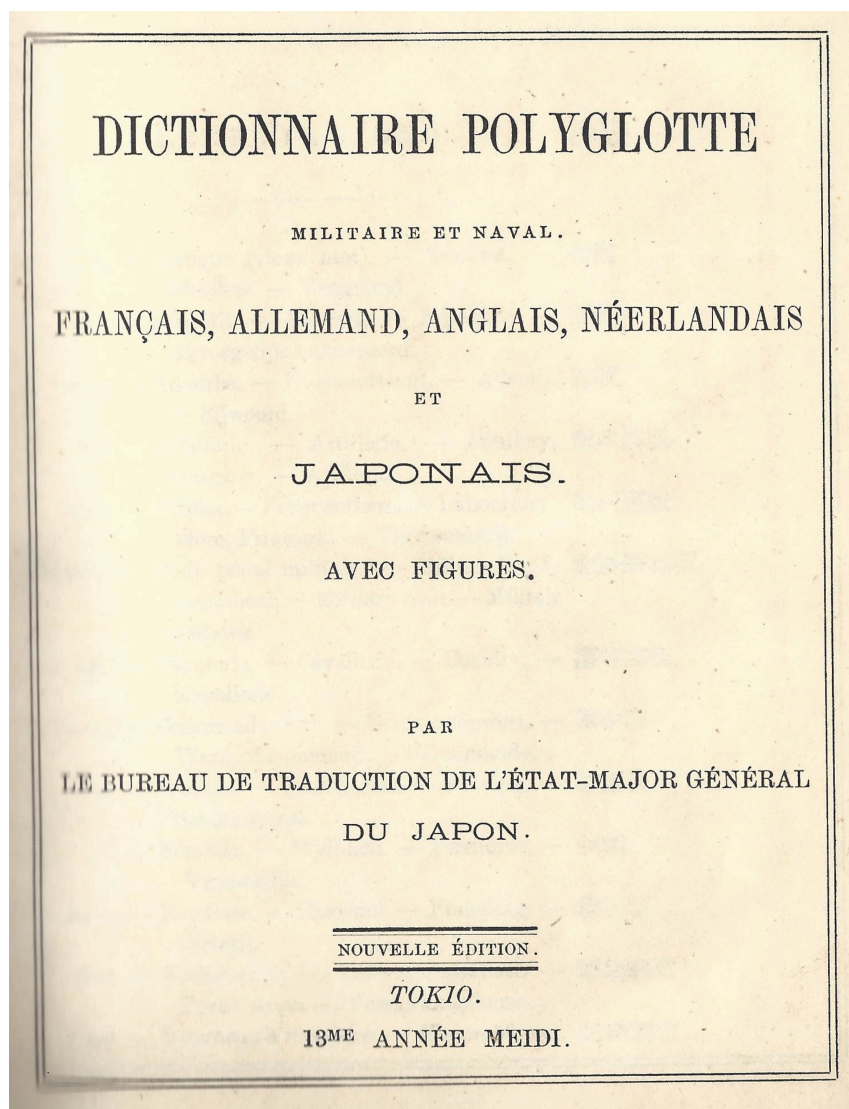


図 2 『五国』の中扉

DICTIONNAIRE POLYGLOTTE / MILITAIRE ET NAVAL. / FRANÇAIS,
ALLEMAND, ANGLAIS, NÉERLANDAIS / ET / JAPONAIS. / AVEC FIGURES.
/ PAR / LE BUREAU DE TRADUCTION DE L'ÉTAT-MAJOR GÉNÉRAL / DU
JAPON. / NOUVELLE ÉDITION. / TOKIO. / 13^{ME} ANNÉE MEIDI.⁹

これらを日本語に翻訳すると、「多言語陸海軍用語辞書」、「フランス語、ドイツ語、英語、オランダ語と日本語」、「図付き」、「日本参謀本部翻訳課」、「新版」、「東京」、「明治13年」となる。仏文標題に見える 13^{ME} ANNÉE MEIDI.は明治13年の意味で、『五国』の序文の書かれた年と一致する。

改めて辞書の編纂過程をまとめると、1874年(下命)→1875年(再び下命)→1879年(原稿完成)→1880年12月(序文)→1881年1月(凡例)→1881年2月(出版)となる。

中扉に続いて、3ページにわたり略語表が続く。略語を‘adj. — Adjectif. — Beiwort. — Adjective. — Bijvoegelijk naamwoord. 形詞¹⁰’のように、略語・フランス語・ドイツ語・英語・オランダ語・日本語の順番に示している。

略語表には、‘adj.’(形詞)、『v.’(動詞)、『m.’(男性形)、『f.’(女性形)のような基本的な略語のほかに、『art.’(砲兵科語)、『artif.’(火工)、『c.p.m.’(陸軍刑律語)、『cav.’(騎兵科語)、『com.’(号令語)、『esc.’(剣術語)のような術語の略語も記されている。『五国』には、見出しのフランス語が専門術語である場合、その後ろに、専門術語の略語を括弧の中に入れて示す。専門術語は計25種類ある。その内訳を下のように示す。

art.-砲兵科語	artif.-火工術語	c.p.m.-陸軍刑律語	cav.-騎兵科語
com.-號令語	esc.-剣術語	fond.-鑄工語	fort.-築城術語
f. à r.-反射爐語	h.f.-熔礦爐語	inf.-歩兵科語	m.d'a-造兵語
m.f.-蹄鐵術語	man.-調馬術語	mar.-海軍語	mét.-礦冶術語
min.-坑兵語	moul.-模型製造語	pont.-橋船兵語	poud.-火藥製造語
salp.-硝石製造語	sell.-鞍工語	tact.-戰術語	top.-地形學語
vét.-馬醫術語			

⁹ フランス語では、『13e』、『13ème』と表記するのが一般的である。『五国』が『13^{me}』とする理由は、今のところ、不明であるが、『明治13年』を示すことは問題ないであろう。

¹⁰ 『五国』では『形容詞』を『形詞』と表記する。

1.5 本文

本文は 977 ページあり、フランス語の ABC 順に並んでいる。1 ページにおける収録項目は 9～19 件である。収録項目は全部で 13,304 件である。一つの収録項目に付された日本語訳は基本的に 1 件であるが、場合によっては、日本語訳の附されていない項目や、2～4 件付された項目が見られる。『五国』によく見られる収録項目及び、基本的な構成部分を、次に示す。下線と番号は筆者によるものである。

Abattre, v. (la carène) (mar.) — Umlegen. — To 傾ル (船底ヲ) 傾ルノ

① ② ③ ④ ⑦ ⑧ ⑨

heave down, to careen. — Kielen.

⑤ ⑥

(『五国』 p. 2)

Abat-vent, m. — Wetterdach, n. — Pent-house,
shed. — Afdak, n.

(『五国』 p. 2)

① 見出しのフランス語

見出しのフランス語は ABC 順に並んでいる。語、フレーズや文で表す。

② フランス語の括弧付き附注

フランス語の括弧付き附注は見出しのフランス語の内容を補足するもので、見出しのフランス語の後ろに付く。フランス語の括弧付き附注は一部の収録項目に見られる。

③ 術語注記

見出しのフランス語が専門術語である場合に、上記の‘(mar.)’のように、括弧の中に専門術語の略語を入れて示す。‘(mar.)’は「海軍語」を指している。「海軍語」のほかに、‘(art.)’「砲兵科語」、‘(min.)’「造兵語」、‘(com.)’「号令語」などがあり、専門術語が計 25 種類ある。略語表に専門術語の略語がまとめられている。術語注記は一部の収録項目に見られる。

④ 見出しに対応するドイツ語訳

見出しのフランス語に対応するドイツ語訳である。語、フレーズや文で表す。

⑤ 見出しに対応する英語訳

見出しのフランス語に対応する英語訳である。語、フレーズや文で表す。

⑥ 見出しに対応するオランダ語訳

見出しのフランス語に対応するオランダ語訳である。語、フレーズや文で表す。

⑦ 日本語訳

日本語訳には、語訳と句訳が含まれている。1 項目に附される日本語訳は基本的に一つである。ごく一部の日本語訳にルビが付けられている。

⑧ 日本語の括弧付き附注

日本語の括弧付き附注はフランス語括弧付き附注を翻訳したものである。括弧を付けて表される。

⑨ 説明文

説明文は日本語訳を補足する為に添えたもので、小活字で書かれている。

⑩ ルビ

ルビは日本語訳の右側に振られている小活字のことである。『五国』におけるルビ付きの日本語訳の数は僅かである。

その他、同義関係の項目、参照関係の項目、部分名称の示し方は注意すべきである。
同義関係の項目とは、次のような収録項目に見えるものである。

Abattoir, m. syn. Déversoir

(『五国』 p. 2)

参照関係の項目とは、次のような収録項目に見えるものである。

Agrafes de cuirasse, f. pl. voy. Cuirasse.

(『五国』 p. 16)

辞書には、二つのフランス語を ‘syn.’、或は ‘voy.’ で繋ぎ¹¹、同義関係または、参照関係であることを表す収録項目がある。これらの収録項目では、ドイツ語・英語・オランダ語が添えられず、日本語訳も省略される。

『五国』において、一つの単語の下に、その単語の指しているものの部分名称を示す項目が挙げられることも見られる。たとえば、下記の「錨」の収録項目の下に、「錨爪」、「錨臂内角」など、「錨」の部分名称の示す項目を、3 字下げで ABC 順に挙げられている。本稿では、「錨」の収録項目を親見出しと、下にある「錨」の部分名称の示す収録項目（「錨爪」、「錨臂内角」）を子見出しと呼ぶことにする。

Ancre, f. (mar.) — Anker, m. — Anchor. — An-
ker.n.

錨

十二

Les parties en sont:

Aile, Patte, Oreille, f. — Ankerhand, f. An-
kerflügel, m. — Fluke, Palm, Kevel. —
Ankerhand, f.

錨爪

イ

¹¹ ‘syn.’は「同義」の意味で、‘voy.’は「見よ」の意味である。つまり、‘(A. syn. B.)’は「‘A’ と‘B’ は同義語である」という意味で、‘(A. voy. B.)’は「‘A’の意味は‘B’を見よ」という意味である。

Aisselle, f. — Achsel, f. — Angle at the throat. — Binnenhoek, m.	錨臂内角	ロ
Bec, m. — Ankerspitze, f. — Bill. — Ankerpunt, f.	錨嘴	ハ
Bras, m. — Arm, m. — Arm. — Ankerarm, m.	錨臂	ニ
Cercles du jas, m. pl. — Ankerstockbanden, m. pl. — Hoops, pl. — Ankerstoksbanden, m. pl.	錨杠鐵箍	ホ
Collet, Fort, m. — Ankerhals, m. — Throat. — Ankerhals, m.	錨頸 錨身ニ錨臂ノ接スル處	ヘ
Croisée, f. — Kreuz, — Cross n. — Ankerkruis, n.	十字線 錨頭ニ同シ	ト
Jas, Jouet, m. — Ankerstock, m. — Stock. — Ankerstok, m.	錨杠	チ
Organeau, Arganeau, m. Cigale, f. — AnkerRing, m. — Ring. — Ankerring, m.	錨環	リ
Tenon, Tourillon, m. — Ankernuss, f. — Nut. — Ankerneut, f.	杠牀 横杠ヲ嵌駐スル上下ノ凸處	ヌ

Tenon, Tourillon, m. — Ankernuss, n. — Eye. —
Ankerroog, n.

錨眼錨ヲ
貫ク ル

Verge, f. — Ankerschaft, m. — Shank. —
Ankersteel, f.

錨身 フ

(『五国』 pp. 34-35)

なお、「錨」の収録項目の日本語訳の一番右に、小活字の「十二」が記されている¹²。「十二」というのは、『五国対照兵語字書附圖』の十二番目の附図のことである(図3)。そして、下の「錨爪」、「錨臂内角」の収録項目の日本語訳の一番右に、小活字で記されている「イ」、「ロ」などを、十二番目の附図と対照すると、「錨爪」、「錨臂内角」などは、「錨」のどの部分に当たるかが分かる。

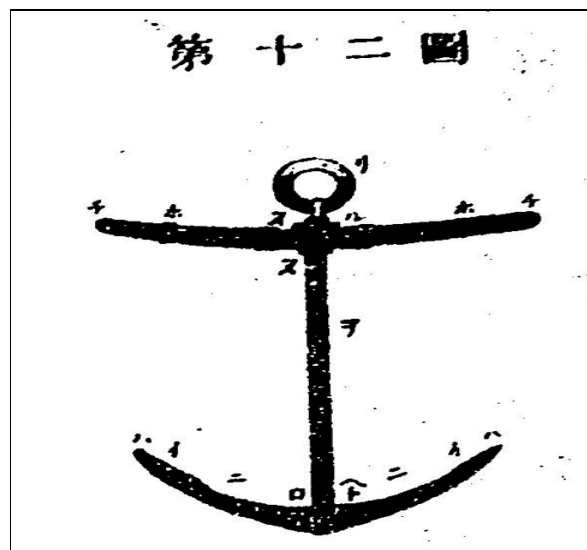


図3 「錨」に関する附図

¹² 本稿では、日本語訳を横書きにする。原本では、小活字の「十二」が日本語訳の一番下に記されている(以下同)。

1.6 正誤と毛色解及毛色類別

本文の次には 16 ページにわたる正誤がある。正誤は「一葉五行 sailei.ハ sailor. 十行 versenking.ハ versenkung.」のような形で、本文の誤植を示す。日本語の部分は縦書きで、欧文の部分は横書きである。誤植は 396 箇所にのぼる。

正誤の後ろに、12 ページにわたる毛色解及毛色類別がある。まず、馬毛を純毛と駁毛の二つに大別する。次に、純毛類に 31 種の毛色を、駁毛類に 29 種の毛色を挙げ、その特徴を解説している。

『五国』には、あとがきや、奥付はない。

2. 『五国』の編者

『五国』の序文によると、辞書編纂の完成した時に残った人物は、八等出仕室岡峻徳、十等出仕菊野七郎、十等出仕若藤宗則、十四等出仕矢島玄四郎と西周である。出仕とは、1871 年(明治 4 年)以降に、事務が繁多をきわめる場合、臨時に置かれた員外官のことである。つまり、序文に出た 5 人は辞書編纂のために、招かれた人であると考えてよいだろう。しかし、序文の情報だけでは、この 5 人は如何なる人物であるかが分からない。本章では、この 5 人の編者の経歴について述べる。特に、『五国』の編纂に関する内容をまとめておく。

2.1 『五国』の編者に関する先行研究

『五国』に関する先行研究には、編者の室岡峻徳、菊野七郎、若藤宗則、矢島玄四郎と西周について、序文のままに引用し、説明するものが多い(豊田 1963・惣郷・朝倉 1977)。これらの編者をより詳しく紹介したのが早川(2006)である。

早川(2006)では、明治・大正期の英語辞書とその編者を紹介する際に、『五国』を取り上げ、辞書とその編者について紹介した。その内容を次に引く。

陸軍省参謀本部、西周序、室岡俊徳凡例『五国対照 兵語字書 附図』(陸軍省参謀本部刊。22.6×15.6cm、977+12(正誤)頁、背革クロース装1段組)
[パリ刊行の仏独英蘭対照辞書 *Dictionnaire Polyglotte Militaire et Naval* (1867)に日本語訳を加えた。山県有朋の名で室岡俊徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・池田良輔らが担当。附図 18 頁、日本語は縦書き。〈例〉A cheval! (com.) – Aufgesessen! – Mount! – 乗レ馬 = Stijg-op!]¹³

室岡俊徳(むろおか・としのり△¹⁴)

¹³ 早川(2006), p. 99

¹⁴ 早川(2006)では人名の読み方が確定できなかったものに、△の印を付けて表す。

軍関係の人物と思われる。¹⁵

菊野七郎(きくの・しちろう△)

村上英俊の門人録に加賀人として名がある。金沢の藩校済館は英仏学を中心だったが、菊野はそこで教えた。¹⁶

若藤宗則(わかふじ・むねのり△)

ロセール『雲南紀行』(陸軍文庫、明 16)を翻訳した。¹⁷

矢島玄四郎(やじま・げんしろう)

ナポレオンに関するガブール『拿破崙全伝』(明 12)やリュストー『将略論』(明 16)などの翻訳書がある。¹⁸

池田良輔(いけだ・りょうすけ)

1816(文化 13)–1894(明 27. 5. 27)大坂天満の与力の次男として生まれる。別名は佐々木高英。大塩平八郎に漢学を、華岡青洲に外科を、緒方洪庵に蘭学および西洋医学を学んだ。長崎ではオランダ人から医学と語学を学んだ。洪庵の推薦で紀州藩に仕官する。維新後は明治政府に出仕し、陸軍省に勤務した。ドイツ語やフランス語も教授した。大村益次郎や福沢諭吉に思想的影響を及ぼしたといわれる。『英吉里私文典』(慶応 3)などの著作がある。池田の蔵書は大槻家旧蔵書、勝俣銓吉郎らの蔵書を加え「洋学文庫」と名づけられ早稲田大学附属図書館に保管されている。¹⁹

早川(2006)では、『五国』の編者として室岡俊徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・池田良輔の 5 人を挙げているが、『五国』の序文に、編纂に携わった人として挙げる 5 人

¹⁵ 早川(2006), p. 303

¹⁶ 早川(2006), p. 246

¹⁷ 早川(2006), p. 312

¹⁸ 早川(2006), p. 306

¹⁹ 早川(2006), p. 226

と少し異なっている。

早川(2006)で挙げた編者のうち、室岡俊徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎の4人は『五国』の序文に記された名前であるが、池田良輔の名前は『五国』の序文に挙げられていない。また、『五国』の序文に、西周は辞書を編纂する時の総裁であると明記しているが、早川(2006)では、西周の名前を挙げられていない。

また、早川(2006)における編者5人の経歴をみると、池田良輔に関する情報は比較的詳しいが、残りの4人に関する情報は非常に少ない。

菊野七郎については、日本のフランス学の先覚者村上英俊の門人録に名があることが示されている。西堀(1973)でも、早川(2006)と同じく、菊野七郎について「仏学始祖村上英俊の門下生の一人である」と述べる。

また、早川(2006)によると、菊野七郎は金沢藩校済館で教えたことがあるという。『蔵書展金沢大学の源流』(金沢大学創立50周年記念展示実行委員会, 1999)によると、金沢藩の藩校の中に、「済館」という名前の藩校はないが、「道済館」という名前の藩校がある。当時、英仏学、漢学、数学などが教えられているところである。しかも、同書では、菊野七郎が1868年(明治元年)から道済館で教えていたことも確認できた。結局、早川(2006)における「金沢藩校済館」は「金沢藩校道済館」の誤りである。

若藤宗則と矢島玄四郎については、翻訳書だけを挙げる。そして、室岡俊徳についても、「軍関係の人物と思われる」だけの記述に止まっている。しかも、『五国』の序や凡例にある「室岡峻徳」ではなく、「室岡俊徳」と表している。

要するに、早川(2006)によると、室岡俊徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・池田良輔の5人は『五国』の編纂に携わっている人物であることが分かる。そして、序文と先行研究の内容によると、早川(2006)で示した池田良輔を除いた4人のほか、西周も辞書編纂に携わっていたこともわかる。池田良輔と『五国』との関係については、第四章に詳しく検討するが、本節では、先行研究の延長線上にあるものとして、明治初期の新聞・雑誌・軍事関連の史料を使い、室岡俊徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・西周の5人は如何なる人物であるかについて、検討を加える。

2.2 西周

西周は1829年3月7日に生まれ、1897年1月31日に没する。明治時代の啓蒙思想家、教育家である。別名は周助。島根県の津和野藩医の子として生まれた。池田多仲にオランダ語を、中濱萬次郎に英語を学んだ。1862年に、幕命でオランダに留学し、ライデン大

学で法律・政治・経済などを勉強し、1865年に帰国した。1868年に、徳川慶喜にフランス語を教える傍ら、幕府の為に外交文書を翻訳した。また、沼津兵学校の初代校長も務めた。1871年に、徴されて兵部省に入省した。1874年に、副澤諭吉、加藤弘之らと共に明六社を結成し、『明六雑誌』という機関誌を発行した。『致知啓蒙』（1874）、『百一新論』（1874）などの著書がある。西洋の学問を当時の人々に紹介することに力を尽くした人物である。²⁰

西周の経歴をみると、オランダ語、英語、フランス語に通じていることが分かる。『五国』はフランス語、ドイツ語、英語、オランダ語と日本語の対訳辞書であるから、オランダ語、英語、フランス語に堪能な西周は辞書の編纂に相応しい人物であろう。

西周は『五国』の序文に、「以明治七年五月下命於翻譯課然時會有他繙譯之事遷延不果」と述べている。明治7年は1874年である。1874年における西周の活動をみると、明六社を結成したり、機関誌『明六雑誌』を発行したり、『致知啓蒙』、『百一新論』を出版したりして、多忙な一年であった。そのため、「然時會有他繙譯之事遷延不果」と述べるように、『五国』の編纂命令がはじめて出された時に、編纂に参加できなかったのである。

また、西周の手記・日記・紀行などを元にして、森鷗外によって著された『西周伝』に、次のような辞書編纂に関する記述がある。内容を次に示す。

是より先き明治七年五月陸軍省参謀局翻訳課省吏数人に命じて、兵語を蒐集せしめて成らず。八年三月再び命あり。集譯するもの八九人。十二年十月繕寫功を竣ふ。半載の間職員属更はりて、存する所の者は、八等出仕室岡峻徳、十等出仕菊野七郎、十等出仕若藤宗則、十四等出仕矢島玄四郎の四人なりき。而して周これが總裁たり。十三年十二月間、これに序す。今参謀本部これを即行せるなり。²¹

2.3 室岡峻徳

先行研究では、室岡峻徳を軍関係の人物とするのみである。筆者が室岡峻徳について調べたところ、1880年の陸軍総務局の進退原簿に、室岡峻徳の記録を見出した²²。その内容に基づき、室岡峻徳の経歴を次にまとめる。

²⁰ 『西周伝』（森鷗外、1898）、『西周全集』（大久保利謙、1960-1981）

²¹ 『西周伝』（森鷗外、1898） p. 131

²² JACAR Ref.C10072428200、明治13年1月 進退原簿 陸軍省総務局（防衛省防衛研究所）

室岡峻徳、生没年不詳。岩手県士族。1870年3月から1871年7月まで文部省に勤務する。1872年3月に、陸軍省九等出仕を申し付けられた。同年4月に、陸軍省徴兵掛に申し付けられた。同年10月4日に、陸軍省八等出仕を申し付けられた。1873年6月23日に、陸軍省第六局に分課された。1874年7月2日に、陸軍省参謀局兵語辞書編輯掛兼務に申し付けられた。1875年5月7日に、兵語辞書編輯掛兼務に免じられた。10日後の17日に、再び陸軍省参謀局兵語辞書編輯掛兼務に申し付けられた。

上記のほかに、1875年4月から1883年3月まで刊行していた学術結社「洋々社」の機関誌『洋々社談』に、室岡峻徳と見られる人物の書いた文章がある。『洋々社談』は明治近代化を支えた学術、知識集団を考察するには、重要な史料とされる。雑誌に掲載された論文は、人文学、自然科学などの分野に及んでいる。大槻文彦、黒川真頼、飯島半十郎など、明治初期の学界の最先端にあった人々の業績が収録されている。この『洋々社談』に、室岡峻徳と見られる人物の書いた文章が合計5本収録されている。年代順にせば次の通りである。

1876年1月 「普魯士大王弗勒徳力二世徳行」 室岡峻徳 第一〇号

4月 「^{コルツハゲン}哥子哈堅至孝ノ記」 室岡俊徳 第十四号

1878年3月 「隕石畧記」 室岡俊徳 第四十号

6月 「外教傳來畧記」 室岡俊徳 第四三号

10月 「獨逸皇太子夫妻の行状」 室岡俊徳 第四七号

1876年1月に掲載された「普魯士大王弗勒徳力二世徳行」には、「室岡峻徳」と示されているが、残りの4篇にいずれも「室岡俊徳」と示されている。

しかし、1876年4月に掲載された「^{コルツハゲン}哥子哈堅至孝ノ記」の冒頭に、「予曩ニ普魯士大王弗勒徳力第二ノ徳行ヲ抄録シテ社友ノ一閱ニ供セリ…」と記されている。1876年1月に掲載された文章「普魯士大王弗勒徳力二世徳行」について言い及んでいることから、「室岡峻徳」と「室岡俊徳」は同一人物であろうと考えられる。

『洋々社談』における室岡峻徳の文章は、1876年に2本、1878年に3本掲載されている。掲載の時期はちょうど『五国』の編纂している最中である。文章の内容をみると、西

洋の事情、特にドイツの事情に関するものが多い。その中で、西洋の書物を抄訳するものと明記されているのは、「普魯士大王弗勒徳力二世徳行」と、「外教伝来略記」である。抄訳された原本は明記されていないため、どの言語を日本語に抄訳したかは判明できない。そのため、室岡峻徳は翻訳に関係しているが、具体的にどの言語の翻訳に関係するかについては不明である。

前述したように、『洋々社談』は明治初期の学界の最先端にあった人々の業績が収録されている雑誌である。そのため、室岡峻徳の文章や翻訳作品が『洋々社談』に掲載されていることは、その学術や翻訳能力が認められていることを示すと言ってよいだろう。

2.4 菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎

『明治過去帳：物故人名辞典』（大植四郎, 1971）に、若藤宗則の経歴についての説明があった。下に示す。

若藤 宗則 陸軍属従七位勲八等 高知縣士族にして明治五年頃柳田昶、菊野七郎、宮田敬之等と陸軍兵學寮十一等出仕と為り八年十等出仕に、九年頃十一等出仕に、十三年頃十等出仕に歴遷陸軍属に任じ廿一年頃判任三等を以て参謀本部編纂課附たり後勲八等に叙し瑞寶章を賜ふ廿六年十二月十八日歿す²³

上記の経歴から、1872 年(明治五年)に、若藤宗則と一緒に十一等出仕となった人の中に、『五国』の編者である菊野七郎がいる。そして、若藤が十等出仕となった 1875 年(明治八年)は『五国』の編纂命令が再び下された年である。

『明治過去帳：物故人名辞典』のほかにも、菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎について調査したが、関連する情報は非常に少ない。そのため、3 人の編纂・翻訳した著書・翻訳書を元に、関連する情報を収集するしかない。調べた 3 人の著書・翻訳書を次に示す。

菊野七郎： 『多節六足蟲新誌』（1900） Louis Figuier(フランス)著 菊野七郎訳

若藤宗則： 『雲南紀行』（1883） Emile Rocher(フランス)著 若藤宗則訳

²³ 『明治過去帳：物故人名辞典』（大植四郎, 1971） p. 389

『改正兵語辞書 仏和対訳之部』(1890) 松見斧次郎 若藤宗則編

矢島玄四郎：『拿破崙全伝』(1879) Amedee Gabourd(フランス)著 矢島玄四郎訳

『将略論』(1883) Wilhelm Rüstow(ドイツ)著

Louis Charles Agénor Savin de Larclause(フランス)訳

矢島玄四郎・荒井宗道訳

菊野七郎の『多節六足蟲新誌』(1900)、若藤宗則の『雲南紀行』(1883)、矢島玄四郎の『拿破崙全伝』(1879)、『将略論』(1883)は翻訳書である。菊野七郎訳の『多節六足蟲新誌』はフランスの書物 *Les insects* (1867)を、若藤宗則訳の『雲南紀行』のはフランスの書物 *La province chinoise du Yün-nan* (1879)を、矢島玄四郎訳の『拿破崙全伝』はフランスの書物 *Histoire de Napoléon Bonaparte* (1845)を、矢島玄四郎・荒井宗道訳の『将略論』はフランスの書物 *L'art militaire au XIXe siècle stratégie histoire militaire* (1881)を翻訳したものである。いずれもフランス語の翻訳である。

松見斧次郎・若藤宗則の『改正兵語辞書 仏和対訳之部』(1890)は翻訳書ではなく、編集されたものである。西堀(1973)では、松見斧次郎・若藤宗則の『改正兵語辞書 仏和対訳之部』は『五国』の改訂版であると述べている。若藤宗則は旧版メンバーとして残り、この辞書の編集に携わった。

以上より、菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎の3人はいずれもフランス語の本を翻訳・出版できるほど、フランス語に通じていることが分かる。そして、著書・翻訳書はほとんど『五国』の編集後に出されたことから、3人は西周の示した「集譯者八九輩而專從事於此」のように、専ら『五国』の編集に従事していたと言えよう。『五国』の編集を終えた後に、彼らは編集で積んだ経験をほかの翻訳の仕事に生かし、訳書を出したと見られる。

本節は『五国』の各部分及び、序文に示した5人の編者について説明した。専門術語の内訳、本文の内容及び池田良輔と『五国』との関係などの詳しい内容については第5章に譲ることとする。

3. 『五国』の成立過程

本章は明治初期の史料「陸軍省大日記」に基づき、『五国』の編纂事情を調査したものである。本章に取り上げた「陸軍省大日記」の史料の画像は2013年3月に、防衛研究所史料研究センターで調査した時に得られたものである。

3.1 『五国』の編纂に関する先行研究

前章に示したように、『五国』の編者西周によって書かれた序文には、辞書の編纂について「(前略)以明治七年五月²⁴下命於翻譯課然時會有他繙譯之事遷延不果至八年三月更下命於是集譯者八九輩而專從事於此爾後經五星霜至十二年十月始脫稿而上之中間譯者之出入死沒亦不少及成功而遺者僅五人八等出仕室岡峻徳十等出仕菊野七郎十等出仕若藤宗則十四等出仕矢島玄四郎與周(後略)」とある。

つまり、『五国』の編纂命令は1874年(明治7年)に下されている。編集は1875年(明治8年)に始まり、1879年(明治12年)に終わる。『五国』はチームによる編集で、編纂当初は、編者は8、9人居たが、完成の時に、残った人物は室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・西周の5人である。

また、序文に「周奉職陸軍省也。率司翻譯之事。而此書之成。周終始任總裁之事。」と述べられているように、西周は辞書編纂の総裁を務めている。

信岡(2003)では、『五国』の編者について、下記の『近代史史料 陸軍省日誌』(朝倉治彦, 1988)の達書²⁵から、序文に示した室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・西周の5人のほかに、浅井道博・萬年千秋・木村信卿・齋藤正蓉の4人を挙げる。また、これらの4人の階級から、この4人は『五国』の編纂の管理責任者であったと推測する。

明治七年 第五十三號 七月二日

達書 兵語辞書編輯掛兼勤被 仰付 陸軍中佐 浅井道博

²⁴ 本章における下線はすべて筆者による。

²⁵ 達書とは、官庁からの通達書のことである。

明治八年 第二十號 三月七日

達書 兵語辞書編輯掛兼勤被免 陸軍少佐 萬年千秋
同 同 木村信卿

三月八日

達書 兵語辞書編輯掛兼勤被免 陸軍少佐 齋藤正蓉

明治八年 第二十三號 三月十七日

達書 兵語辞書編輯掛兼勤被免 陸軍中佐 浅井道博

三月十八日

達書 兵語辞書編輯校正掛兼勤被免

兵語辞書編輯御用掛兼勤被仰付 陸軍省四等出仕 西周

以上をまとめると、『五国』の編纂命令は1874年(明治7年)に下された。翻訳チームを発足したのは1875年(明治8年)であり、終えたのは1879年(明治12年)である。『五国』はチーム編集である。西周は辞書編纂の総裁を務めている。辞書編纂に携わった人物は室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎・浅井道博・萬年千秋・木村信卿・齋藤正蓉である。

これらの情報で、『五国』の成立過程の一部を窺えるが、すべての編纂過程を解明することは難しい。従って、筆者は陸海軍にかかわる史料を多く収録している防衛研究所史料研究センターにおいて、『五国』の編纂過程にかかわる史料を調査した。本章では、明治初期の史料「陸軍省大日記」の内容に基づき、これまで言及されていなかった『五国』の編纂過程をより明らかにする。

3.2 「陸軍省大日記」の史料

「陸軍省大日記」とは、1868年(明治元年)から1942年(昭和17年)までの公文書を、陸軍大臣官房が編冊して保存していた簿冊の総称である。現在、防衛研究所に保管されて

いる。「陸軍省大日記」の中から『五国』に関する史料が 3 件見出される²⁶。それぞれを史料一・史料二・史料三と名付けて下の図 4・図 5・図 6 に示す。

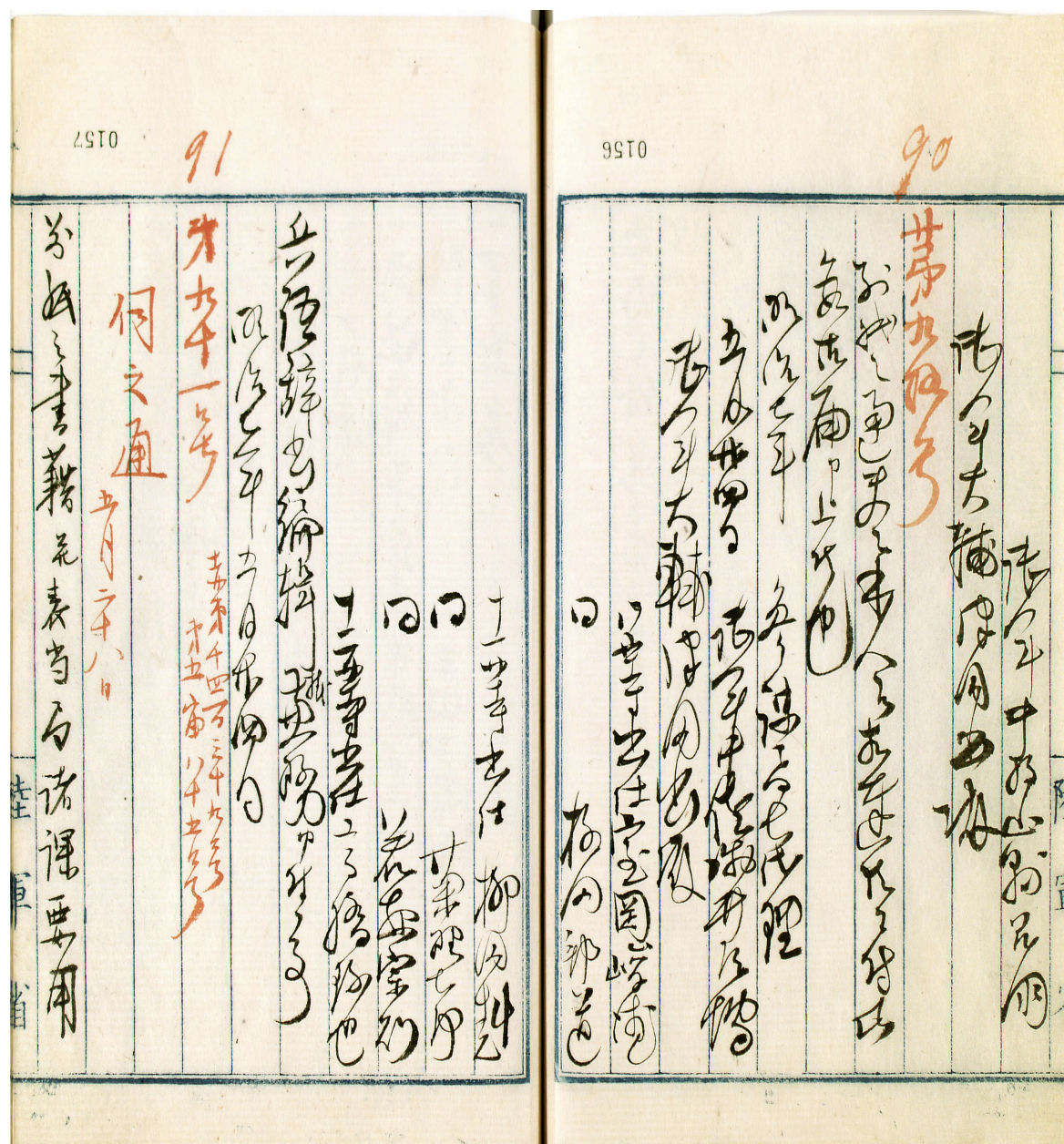


図 4 史料一

²⁶ 陸軍省大日記の資料群の内容は国立公文書館アジア歴史史料センター(略称 JACAR)を通して WEB 上で閲覧ができる。

翻字：第九拾号／別紙之通夫々本人ニ相達候ニ付此／段御届申上候也／明治七年 参
謀局長代理／五月廿四日 陸軍中佐浅井道博／陸軍大輔津田出殿／八等出仕室
岡峻徳／同 松岡邦道／十一等出仕 柳田赳／同 菊野七郎／同 若藤宗則／
十二等出仕 高橋琢也／兵語辞書編輯掛兼務申付候事／明治七年五月廿四日
(翻字筆者、以下同。)

史料一²⁷は 1874 年(明治 7 年)5 月 24 日に、参謀局長代理陸軍中佐浅井道博が陸軍大輔津田出に送った公文書の写しと見られる。内容は八等出仕室岡峻徳・松岡邦道、十一等出仕柳田赳・菊野七郎・若藤宗則、十二等出仕高橋琢也の 6 人が兵語辞書編輯掛兼務に任命されたということである。

史料一の内容を西周の序文と合わせてみると、日付「明治七年五月廿四日」は序文に示した「明治七年五月下令於翻譯課」と一致する。そして、任命された 6 人の中に、室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則の 3 人は西周の序文にも言及されている。但し、史料一における菊野七郎と若藤宗則の階級は十一等出仕であるが、『五国』の序文における記述では、二人は十等出仕と示されている。おそらく史料一が出された時点では、二人はまだ十一等出仕であったが、『五国』を編纂しているうちに、十等出仕になったと思われる。

要するに、史料一と『五国』の序文における日付と、編者が一致することから、史料一の兵語辞書は『五国』を指している可能性が高いと言える。任命された室岡峻徳、松岡邦道、柳田赳、菊野七郎、若藤宗則、高橋琢也の 6 人は『五国』の編纂に関わっていると推測される。

次に見出した史料二²⁸は 1875 年(明治 8 年)2 月 8 日に、参謀局長代桂太郎が陸軍卿山県有朋に送った公文書である。『五国』を編纂するための人員募集に関する内容である。

²⁷ JACAR Ref.C04026068200、明治 7 年 「大日記 参謀局 3 月利 参謀局」(防衛省防衛研究所)

²⁸ JACAR Ref.C04026352400、明治 8 年 「大日記 諸局伺届並諸達書 2 月水 陸軍第 1 局」(防衛省防衛研究所)

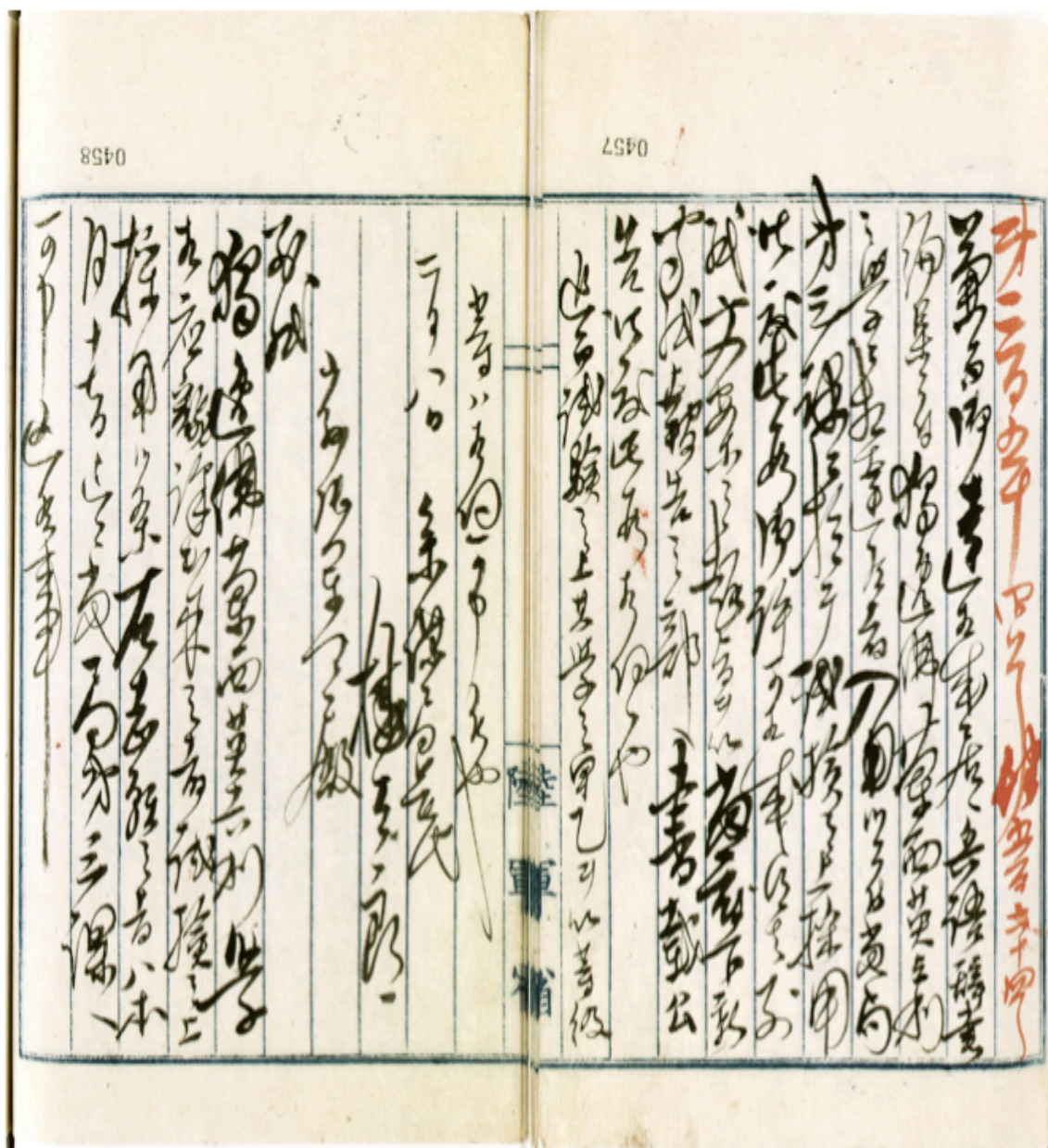


図 5 史料二

翻字：第二百五十四号伴五百六十四号／兼而御達相成居候兵語辞書／編集ニ付獨逸佛
 蘭西英吉利／之学ニ相達候者入用候ニ付当局／第三課ニ於テ試験之上採用／仕
 度此段御許可相成候其別／紙文案之趣旨ヲ以当府下新／聞紙報告之部へ書載公
 ／告仕度此段相候也／追而試験之上其学之甲乙ヲ以等級／等ハ相伺可申候也／

二月八日 参謀局長代／桂太郎／山県陸軍卿殿／別紙／獨逸佛蘭西英吉利学／
相応翻訳出来之者試験之上／採用候条右志願之旨ハ本／月十七日迄ニ当局第三
課へ／可申進候事

史料二は兵語辞書を翻訳するために、ドイツ語・フランス語・英語の翻訳ができる者を募集するという内容である。史料二に出た「第三課」は参謀局第三課を指している。当時、第三課の役割は各国兵書の翻訳である²⁹。また、翻訳者の募集方法は参謀局第三課に於いて試験で選抜することであり、人員募集の情報を当時の新聞を通して周知させることがわかる。

西周の序文に示されている 2 回目の翻訳命令が下されたのは 1875 年(明治 8 年)3 月である。史料二の日付はその 1 ヶ月前であることや、内容も兵語辞書の編集に関するものであることから考えると、『五国』との関わりが深い。

また、史料二が出された 1 ヶ月後に、兵語辞書編集掛

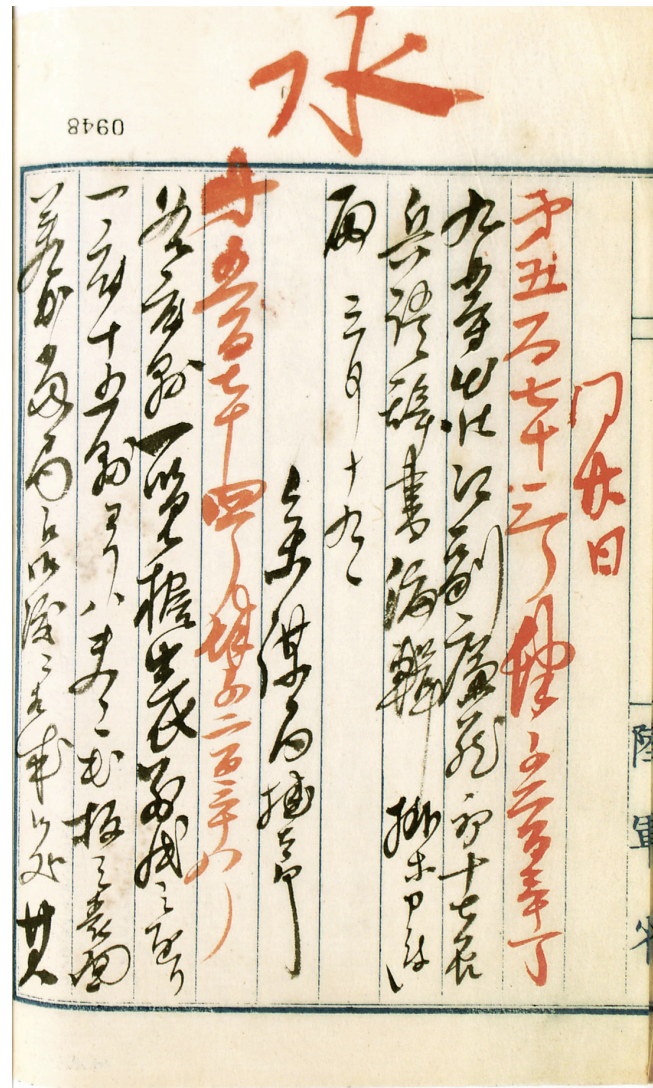


図 6 史料三

²⁹ 箱岩(2008)では、参謀局各課の役割について、「参謀局各課の役割は、第1課 総務、第2課 各国の政誌、第3課 各国兵書の翻訳、第4課 各国の兵誌、第5課 地図、第6課 測量、第7課 文庫でした」と述べられている。

を 17 名採用したという内容の達書、史料三³⁰が見られる。

翻字：第五百七十三号伴千二百三十号／九等出仕江副広蔵初十七名／兵語辞書編輯掛
等申付候／届三月十九日／参謀局掛御中

史料三は明治 8 年 3 月 19 日に出了たもので、九等出仕江副広蔵をはじめとする 17 人が兵語辞書編集掛に任命されたという内容である。史料三には、この 17 人に関する詳しい情報は示されていないが、史料二と合わせてみると、試験で選抜されたドイツ語・フランス語・英語の翻訳に優れている人物であろう。そして、信岡(2003)によると、史料三の出了た前日の 3 月 18 日に、西周は兵語辞書編集校正掛兼勤を免じられ、兵語辞書編集御用掛兼勤を仰せ付かっているということがわかるので、史料三に出た 17 人は『五国』の編集に採用された可能性が高い。

なお、当時の新聞³¹で新聞を兵語辞書の編纂のために、人員を募集することについて調べたが、関連の記事は見当たらなかった。しかし、1876 年(明治 9 年)2 月 12 日の読売新聞の稟告の欄に、参謀局第五課の人員募集の記事が見られた。次に示す。

陸軍参謀局第五課に於て製圖人数名試験之上雇入候／條望之者ハ来る十七日より
四日間午前第十時より午後／第二時迄に全課へ自製の圖持参可致候事／明治九年二
月十二日

この記事で掲載された募集方法は第五課に於いて試験を実施して選抜することであり、史料二の募集方法と同様である。当時、参謀局各課における人員募集の方法の一つは、試験による選抜であり、募集情報を周知させる方法の一つは、新聞に公告を出すことであつたと推測される。信岡(2003)では、軍事分野の専門用語辞典と、一般的な専門用語辞典の違いについて、「兵語の辞典が民間の事業ではなく、先ず官製版として参謀本部で編纂・刊行された」と述べている。そこで、このような大規模の人員募集は「官製版」としての『五国』ならではの編纂事情であろう。

³⁰ JACAR Ref.C04026382500、明治 8 年 「大日記 諸局伺届並諸達書 3 月水 陸軍第 1 局」(防衛省防衛研究所)

³¹ 調査対象は東京日日新聞、讀賣新聞及び、『東京曙新聞 復刻版』(柏書房, 2008)、明治期の新聞集成『新聞集成 明治編年史』(中山泰昌, 1958)、『明治ニュース事典』(明治ニュース事典編纂委員会, 1985)である。

一方、『五国』の編者西周の書いた序文に「至八年三月更下命於是集譯者八九輩而專從事於此」と書いてあるが、史料三に出てきた編者の数 17 名と合致しない。ここで考えられる理由は様々であるが、中には、「フランス語を中心に翻訳する」という編纂方針が立てられたことが理由の一つとして挙げられる。史料三を見れば分かるように、募集したのは、フランス語・ドイツ語・英語の翻訳ができる者である。つまり、募集する時に、陸軍省第三課は翻訳底本のフランス語・ドイツ語・英語の部分を翻訳するつもりであったと見られる。しかし、『五国』の編者室岡峻徳の凡例にも示されているように、翻訳作業はフランス語を中心に行われることになった。このような経緯があって、募集した 17 名の編者の人数を 8、9 に減らしたのではないかと推察する。

3.3 まとめ

ここまでの調査結果を、『五国』序文と凡例の内容、信岡(2003)と合わせてみると、『五国』の編纂事情を次のように推察できる。以下、時間軸に沿って示す。

- | | |
|----------------|---|
| 1874 年 5 月 | 辞書編纂の命令が下される |
| 5 月 24 日 | 八等出仕室岡峻徳、松岡邦道、十一等出仕柳田昶、菊野七郎、若藤宗則、十二等出仕高橋琢也の 6 人が辞書編輯掛に任命された |
| 7 月 2 日 | 陸軍中佐浅井道博が兵語辞書編輯掛に任命された |
| 1875 年 2 月 8 日 | 辞書編纂のために、翻訳者の募集を行った |
| 3 月 | 辞書編纂の命令が再び下された |
| 3 月 7 日 | 陸軍少佐萬年千秋、木村信卿が兵語辞書編輯掛に免じられた |
| 8 日 | 陸軍少佐齋藤正蓉が兵語辞書編輯掛に免じられた |
| 17 日 | 陸軍中佐浅井道博が兵語辞書編輯掛に免じられた |
| 18 日 | 陸軍四等出仕西周が兵語辞書編輯校正掛に免じられた |
| | 兵語辞書編輯御用掛に任命された |
| 19 日 | 江副広蔵をはじめとする 17 人が兵語辞書編輯掛に任命された |

1879 年 10 月	辞書の原稿が完成した
1880 年 12 月	<u>西周</u> による序文が完成した
1881 年 1 月	<u>室岡峻徳</u> による凡例が完成した
2 月	『五国』が出版された

以上、「陸軍省大日記」の史料、『五国』の序文と凡例、信岡(2003)に基づいて、『五国』の編纂の時間軸を推察した。翻訳命令を二度も下したこと、新聞に募集をかけたこと、大人数を集めて翻訳に従事させたことなどを考えると、当時『五国』の編纂は重要視されていたと考えられる。

4. 『五国』の翻訳底本

『五国』の序文では、「此書所據。係和蘭陸軍歩兵大尉蘭達拉多氏所輯。號海陸軍術語蒼譯辭書者。彼千八百六十七年所印行。而纂集佛朗西獨逸英吉利和蘭四國語之對譯辭書也。³²⁾」と述べられている。

そして、『五国』の凡例では、「是書原本五卷、本編四卷、每編別佛獨英蘭之語、而互相足爲主客、續編一卷、更輯佛獨蘭三國之語、以補本編遺漏、今所纂譯、本編及續編、共以佛語爲主、故下譯字、亦專據佛國之定例、較獨英蘭之慣用、則或不允當、覽者諒焉、」と述べられている。

序文と凡例に示された情報をまとめると、『五国』は1867年に出版されたオランダの陸軍歩兵大尉蘭達拉多Landoltの書いたフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語の四ヶ国語対訳辞書『海陸軍術語蒼訳辞書』に日本語訳を附したものである。翻訳底本の『海陸軍術語蒼訳辞書』は本編4巻と補遺1巻からなっている。『五国』はフランス語編の辞書を底本にして編纂され、翻訳は専らにフランスの常例による。

しかし、オランダの陸軍歩兵大尉蘭達拉多は如何なる人物であるか、『海陸軍術語蒼訳辞書』は如何なる辞書であるか、欧文書名は何であるかなど、『五国』の翻訳底本をめぐって、様々な疑問が残されている。

本章は『五国』の翻訳底本の問題に着目し、『五国』と、オランダの陸軍大尉 Heinrich Mathias Friedrich Landolt の著書 *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* (1866-1868) のフランス語編、及び *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine Supplément* (1871) のフランス語部の兵語辞書との関係を立証する。また、その編集は翻訳底本に忠実であること、その上に、翻訳底本の不適切なところに一部修正を加えたことも明らかにする。

4.1 『五国』の翻訳底本に関する先行研究

西周の序文によると、『五国』の翻訳底本は、1867年に出版されたオランダの陸軍大尉蘭達拉多Landoltの著書『海陸軍術語蒼訳辞書』である。翻訳底本の正式名称と内容については、豊

³²⁾ 下線部は原文のままである

田(1963)、惣郷・朝倉(1977)、信岡(2003)などの研究がある。

豊田(1963)は日本における英学、また英文学についての研究であるが、『五国』について次のように述べている³³。

五国
対照 兵語字書 西周序 室岡峻徳凡例 版權
所有 参謀本部 明治十四年(一八八一)洋中 本
書は五国
対照 兵語字書附図を伴う。

本書の由来は当時の参謀本部御用掛西周^{にしあまね}の漢文の序に示されている。すなわち本書の底本はオランダ陸軍大尉蘭達拉多^{ランダラド}の編集にかかる西暦一八六七年の仏、独、英、蘭四国語対照の海陸軍術語薈訳辞書(*Dictionnaire Polyglotte Militaire et Naval*)であり、それに日本語訳を付けるよう明治七年五月翻訳課に命が下り、西周、室岡峻徳らの数名がこれに従事して明治十二年十月に脱稿したものである。

(中略)

この辞書の訳語は日本の軍隊用語の決定にあずかって力があつたもののようである。

この記述は『五国』の序文の内容に基づいて書かれたものである。翻訳底本の著者と書名は『五国』の序文に示した和訳と同じものを示したうえに、フランス語の書名も挙げている。但し、第1章にも示したように、*Dictionnaire Polyglotte Militaire et Naval* は、翻訳底本の書名ではなく、『五国』の中扉に示された仏文標題である³⁴。

惣郷・朝倉(1977)には、『五国』について、詳しい解説が見られる。その解説を次に示す。

参謀本部編・刊 明一四・二 九七七頁 別巻付図 菊判 定価記載なし横一組三〇行仏語 ABC 順。これに対応する独語、英語、オランダ語、日本語を付す。日本語は縦組。参謀本部御用掛西周序(三頁)。室岡峻徳凡例(二頁)によれば、原本は一八六七年版オランダ陸軍大尉蘭達拉多^{ランダラド}の『兵語辞典』で、仏語編、独語編、英語編、オランダ語編の四巻と補遺一卷から成り、本書はそのうち仏語編の本編と補遺に日本語訳を付したもの。別巻の付図集(一九八図)は原本からでなく、参照した約五〇〇冊の本から採った。巻末に馬の「毛色解及毛色類別」(十二頁)を付録。明治七年五月

³³ 本章における先行研究の引用は原文の表記に従う。

³⁴ 同じ誤りは早川(2006)にも見られる。早川(2006)は『五国』について、「パリ刊行の仏独英蘭対照辞典 *Dictionnaire Polyglotte Militaire et Naval* (1867)に日本語訳を加えた。」と述べている。

下命、十二年一〇月脱稿した。仏文標題 *Dictionnaire polyglotte Militaire et Naval*³⁵

ここでは、*Dictionnaire Polyglotte Militaire et Naval* を正しく『五国』の仏文標題であると明記している。翻訳底本の著者は『五国』の序文に示した和訳「蘭達拉多」と同じである。翻訳底本がフランス語編・ドイツ語編・英語編・オランダ語編の四巻と、補遺の一巻からなることは、凡例に示された情報と一致する。しかし、翻訳底本については、『兵語辞典』とするのみである。

惣郷（1986）は、再び『五国』に触れ、「原本はフランスの陸軍大尉ランドレットが一八六七年に編んだ五巻本で、フランス語、英語、ドイツ語、オランダ語の相互対訳であった。」と説明するが、翻訳底本の名称を挙げていない。底本の作者は、片仮名で示し、その国籍は、惣郷・朝倉（1977）に示したオランダからフランスに変更されている。

信岡（2003）は、西周の序文に出た「蘭達拉多」という人物について、法政大学名誉教授安岡昭男から、該当する人物は 1828 年オランダ生まれの軍人 Landolt, Heinrich Mathias Friedrich であろう、との情報提供を受け、西周のいう『海陸軍術語薈訳辞書』は、オランダの人名事典 *Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek* (1974)³⁶に記されている Landolt, Heinrich Mathias Friedrich の主著 *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* (1865-1870 4 巻) であろう、と推測した。

2008 年、国立国会図書館主催の「辞書を片手に世界へ」の展示において、『五国』は軍事用語の専門辞書として挙げられている。同展示では、「オランダ軍人ランドルト (H. M. F. Landolt) の仏独英蘭四ヶ国語対照の陸海軍術語辞典を底本とし、西周らが翻訳して五ヶ国語対照としたものである」と解説されている³⁷。底本の編者を H. M. F. Landolt にしたのは、信岡（2003）の見解を反映させたものであろう。

そのほか、『五国』や参謀本部についての研究は西堀（1973）、大江（1985）などがあるが、翻訳底本に関する記載は見られない。

以上より、『五国』はオランダの陸軍大尉 Heinrich Mathias Friedrich Landolt の著書を翻訳したものであるとする点に異論はなかろう。翻訳底本に関する推測が出されているが、その根拠はまだ示されていない。本章では、信岡（2003）を受けて、『五国』の翻訳底本と底本の著者について、詳しく検討したい。

³⁵ 惣郷・朝倉（1977），p. 196

³⁶ *Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek* は 1911 年から 1937 年にかけて出版されたものである。1974 年出版のものは復刻版である。

³⁷ 国立国会図書館第 152 回常設展示のパンフレット「辞書を片手に世界へ—近代デジタルライブラリーにみる明治の語学辞書—」（作者不詳，2008）による。

4.2 蘭達拉多(Landolt) の経歴と著作

オランダの人名事典 *Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek* (1974) の第 2 巻に、Heinrich Mathias Friedrich Landolt の項目がある³⁸。その内容に基づき、Landolt の経歴をまとめると、次のようになる。

Landolt は 1828 年 11 月 29 日、ブレダ³⁹生まれ、1871 年 6 月 22 日、バート・ヴィルドウンゲン⁴⁰没。軍人家庭に生まれた Landolt は、1844 年、ブレダの兵学校 *Koninklijke Militaire Academie* に入学。1848 年、第 2 陸軍第 2 歩兵連隊の中尉に任命。1861 年、大尉に昇進。1861 年から 1864 年 1 月にかけて、オランダの軍隊月刊誌 *Militaire Spectator* の編者を務めた。

Landolt は次に示すような軍事関連の著書を出している⁴¹。

- i. *Geschiedkundige herdenking van het 25-jarig bestaan der bataillons Grenadiers en Jagers* (1854)
- ii. *Geschiedenis van het Nederlandsche Krijgswezen* (1855)
- iii. *Geschiedenis Van het Nederlandsch Zeewezen* (1856)
- iv. *Beschouwingen over de taktiek der infanterie in Europa* (1858)
- v. *Militair woordenboek* (1862)
- vi. *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* (1865-1868)
- vii. *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine Supplément* (1871)

Landolt の著書には、オランダやオランダ海事の歴史に関するもの、翻訳したもの、辞書がある。彼の著書の中から、『五国』の翻訳底本を探すと、西周のいう 1867 年出版の辞書に相当するものはないが、可能性の高いものは、vi の *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* (1865-1868) (以下 Landolt(本編))であろう。そして、Landolt(本編)と vii の *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine*

³⁸ *Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek* (1974) II, p. 754

³⁹ ブレダ(Breda)はオランダ南部の主要都市である。

⁴⁰ バート・ヴィルドウンゲン(Bad-Wildungen) はドイツのヘッセン州にある町である。

⁴¹ 本稿では、米国議会図書館・ニューヨーク公共図書館・フランス国立図書館の蔵書検索を利用し、Landolt の関連著書をまとめた。

Supplément (1871) (以下 Landolt(補遺)は室岡峻徳のいう本編の4巻と補遺の1巻からなる辞書である可能性が高い。筆者はニューヨーク公共図書館に所蔵する Landolt(本編)と Landolt(補遺)のコピーを入手できたので、それらの内容や構成を説明する。

4.3 Landolt(本編)と Landolt(補遺)

4.3.1 Landolt(本編)

Landolt(本編)と Landolt(補遺)は Landolt の最も重要な著書である。Landolt(本編)は 1865 年から 1868 年までの4年間をかけて出版されたものである。オランダ語編(1865)・ドイツ語編(1866)・フランス語編(1867)・英語編(1868)の4冊からなっている。室岡峻徳の言う「本編四巻」と一致する。

各冊の扉に、フランス語で書名 Dictionnaire Polyglotte / de / Termes Techniques Militaires et de Marine と書かれている(図7)。日本語に訳せば、「多言語海陸軍術語辞典」という意味である。その次に、冊の番号と、四ヶ国語配列順が示されてい

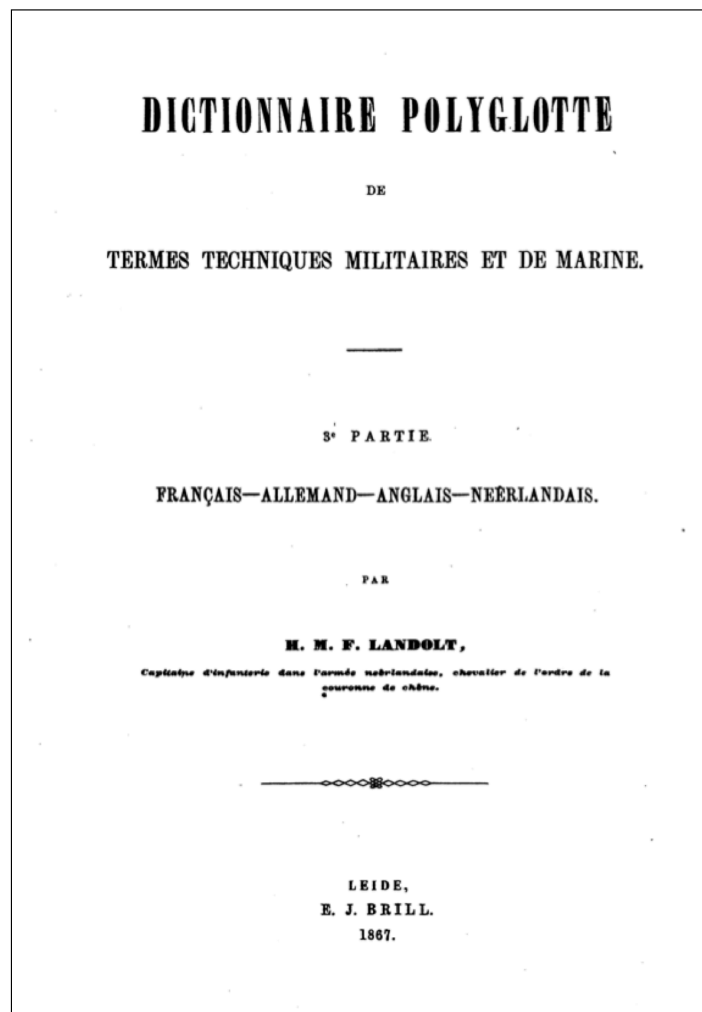


図7 Landolt(本編)のフランス語編の扉

るが、冊ごとに配列順の表示が異なっている⁴²。

たとえば、1867 年出版のフランス語編の配列順をみると、FRANÇAIS – ALLEMAND – ANGLAIS – NEÉRLANDAIS.と記され、フランス語・ドイツ語・英語・オランダ語の順である。これは『五国』の配列順と一致する。配列順の下に、作者の経歴についての説明 PAR/H. M. F. LANDOLT, Capitaine d'infanterie dans l'armée neêrlandaise, chevalier de l'ordre de la/couronne de chêne. と説明が書かれており、訳せば「功労勲章オーククラウンの騎士勲位が授けられているオランダの陸軍大尉」という内容である。扉の下には、LEIDE/E.J.BRILL.と、出版地と出版社が示され、最後に、出版年が記されている。扉の次に、毎冊の見出し語となる言語で書かれた中扉がある。書式と内容は扉と同じである。

4.3.2 Landolt(補遺)

Landolt(補遺)の表紙に、フランス語で書名 DICTIONNAIRE POLYGLOTTE/DE/TERMES TECHNIQUES MILITAIRES ET DE MARINE.と書かれている(図 8)。Landolt(本編)と同じ書名である。それに続けて、SUPPLÉMENT / DES

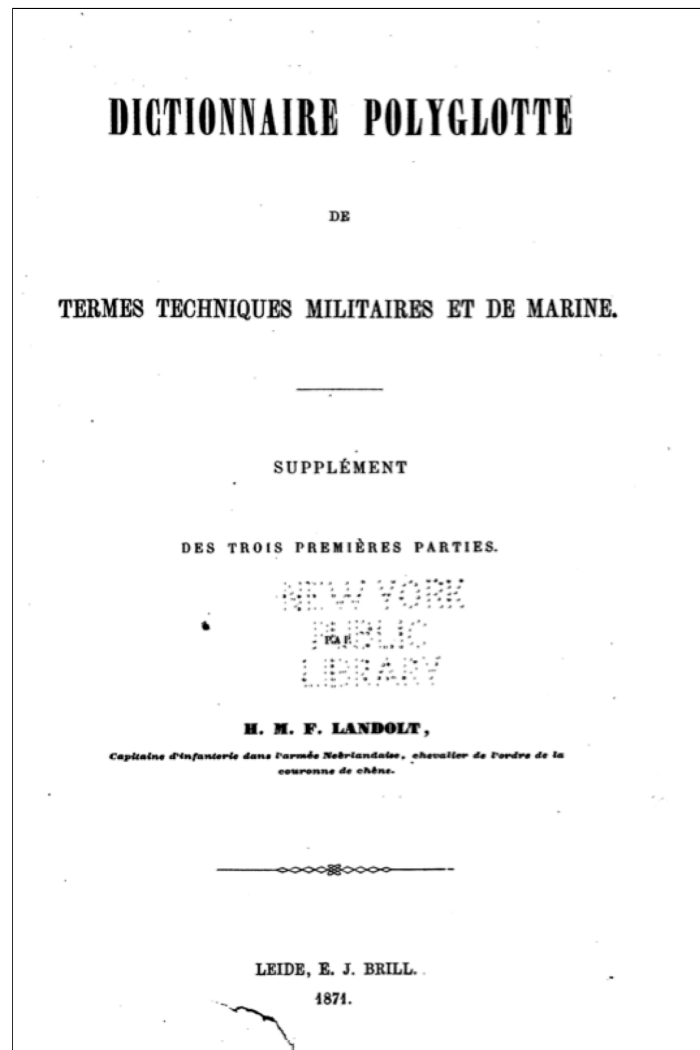


図 8 Landolt(補遺)の扉

⁴² 各国語の配列順は巻によって異なる。

オランダ語編(1865)：オランダ語-フランス語-ドイツ語-英語

ドイツ語編(1866)：ドイツ語-オランダ語-フランス語-英語

フランス語編(1867)：フランス語-ドイツ語-英語-オランダ語

英語編(1868)：英語-フランス語-オランダ語-ドイツ語

TROIS PREMIÈRES PARTIES.とあり、「補遺」、「最初の3部」であることがわかる。その下に、Landolt(本編)と同じ内容の作者の経歴、さらに、LEIDE E.J.BRILL./1871 と、出版地、出版社と出版年が示されている。

Landolt(補遺)の本文は Landolt(本編)と同じく、四ヶ国語対照で語彙が並べられている。扉の“DES TROIS PREMIÈRES PARTIES”から、3部を収録していることがわかるが、これを辞書の内容に即して確認すると、収録はオランダ語部・ドイツ語部・フランス語部の3部で、英語部の収録はない。本文の254ページにフランス語で書かれている出版に関する事情を読むと英語部のない理由が分かる。

その内容をかいつまんで訳すと、「作者が早逝⁴³にしたため、自筆原稿に基づいて編集した多国語辞典の補遺が出版された。作者の逝去で、自筆原稿の編集は第3部の途中で中断した。それに続く第3部の補遺は残念ながら、認められない。また、第4部の英語部も殆ど役に立たない。」となる。ここから、作者の残った自筆原稿は第3部フランス語部の途中までであったことが分かる。出版の際に、第3部フランス語部と第4部英語部の補遺をほかの人物に頼んだらしいが、結果はあまり思わしくなかったため、英語部を未収録として、補遺を出版したことが推察される。

以上の Landolt(本編)・Landolt(補遺)の内容と構成は、『五国』の序文と凡例に見える翻訳底本に関する記述と、一致している。

4.3.3 日本における Landolt(本編)と Landolt(補遺)の所蔵

日本において Landolt(本編)・Landolt(補遺)は、東京大学総合図書館と、長崎大学附属図書館に所蔵されている。これらを調査したところ、東京大学総合図書館と、長崎大学附属図書館に所蔵する Landolt(本編)・Landolt(補遺)の構成はニューヨーク公共図書館の Landolt(本編)と Landolt(補遺)と同じである⁴⁴。但し、東京大学総合図書館と、長崎大学附属図書館に所蔵する Landolt(本編)・Landolt(補遺)には複数の印が押されている。以下、それぞれについて説明する。

東京大学総合図書館所蔵のものは Landolt(本編)の4冊全部と Landolt(補遺)である。1865年から1868年にかけて出版された Landolt(本編)のオランダ語編(1865)・ドイツ語編(1866)・フランス語編(1867)・英語編(1868)の4冊のは合綴されており、左開きになってい

⁴³ Landolt は 1871 年 6 月 22 日に、42 歳の若さで死去。

⁴⁴ ただし、長崎大学附属図書館所蔵の Landolt(本編)はオランダ語編・ドイツ語編・フランス語編の3冊であるため、英語編の対照はできなかった。

る。合綴本の大きさは縦 25cm、横 17cm、厚さ 5.5cm である。表紙は茶色の堅紙で、背に書名を箔押されている。Landolt(本編)の書名と対照してみると、背に箔押された書名は一部省略されており、‘DICTIONNAIRE DE TERMES TECHNIQUES LANDOLT FRANCAIS-ALLEMAND ANGLAIS-NEERLANDAIS. LEIDE, 1965-8.’である。

そして、Landolt(補遺)の大きさは縦 25cm、横 17cm、厚さ 1.7cm である。Landolt(本編)と同じく、左開きになっている。表紙は濃青色の堅紙で、花紋柄である。背に‘LANDOLT, DICTIONNAIRE POLYGLOTTE’と箔押されている。Landolt(本編)と同じように、書名は一部省略されている。

東京大学総合図書館の Landolt(本編)と Landolt(補遺)の見返し紙には、‘gift of the Patent Office. for the reconstruction of the library destroyed on Sept. 1, 1923 大正十二年本館焼失ノ後復興ノ為メヨリノ寄贈’という内容の記されている紙が貼られている⁴⁵。そして、Landolt(本編)と Landolt(補遺)の遊紙に、「東京帝国大学図書館」の印、‘REMOVED FROM PATENT OFFICE LIBRARY 29SEP.1927’の印、‘PATENT OFFICE LIBRARY’の印が押されている。従って、東京大学総合図書館所蔵の Landolt(本編)と Landolt(補遺)は関東大震災の後、PATENT OFFICE LIBRARY より寄贈されたもので、『五国対照兵語字書』の編纂する時に使われたものではないということがわかる。

一方、現在、長崎大学附属図書館に所蔵するものは、Landolt(本編)のオランダ語編(1865)・ドイツ語編(1866)・フランス語編(1867)の3冊と、Landolt(補遺)である⁴⁶。

Landolt(本編)のオランダ語編(1865)・ドイツ語編(1866)・フランス語編(1867)の大きさはいずれも、縦 23cm、横 15cm、厚さ 1cm で、左開きになっている。表紙は紺色の堅紙である。背に‘Dictionnaire Polyglotte de Termes Techniques Militaires et de Marine.’と標題が示されている。標題に続いて、冊の番号が示されている。

そして、Landolt(補遺)の大きさは縦 23cm、横 15cm、厚さ 1.6cm である。左開きになっている。表紙は Landolt(本編)のと同じものを使っており、背には横書きで‘Dictionnaire Polyglotte’だけが示されている。

長崎大学附属図書館所蔵の Landolt(本編)と Landolt(補遺)の扉のいずれにも、二つの印が押されている。一つ目は扉の右上にある。「海軍兵学校蔵書之印」という朱文の方印である。二つ目は「海軍兵学校蔵書之印」の方印の下にあり、「教辞第一五九四番」という縦長の長方印である。そこで、長崎大学附属図書館所蔵の Landolt(本編)と Landolt(補遺)

⁴⁵ 英語の部分は横書きで、日本語の部分は縦書きで記されている。

⁴⁶ 図書館の係員に英語編の所在の調査を依頼したところ、図書館に英語編は登録されているが、紛失したらしいとのことである。

は元々、海軍兵学校の蔵書であることがわかる。しかし、Landolt(本編)と Landolt(補遺)はどの時期に海軍兵学校の蔵書として収録されたかは不明であるため、長崎大学附属図書館所蔵の Landolt(本編)と Landolt(補遺)は『五国対照兵語字書』の編纂する時に使われたものであるかどうかは判断しかねる。

調査で得た内容に関する写真などを本論文の資料編にまとめておく。

4.4 『五国』の翻訳底本

4.4.1 検証方法

本節では、Landolt(本編)・Landolt(補遺)と、『五国』との関係を具体的に検討する。『五国』の凡例では、「是書原本五卷、本編四卷、毎編別佛獨英蘭之語、而互相足爲主客、續編一卷、更輯佛獨蘭三國之語、以補本編遺漏、今所纂譯、本編及續編、共以佛語爲主、」と述べられている。すなわち、『五国』は本編のうちのフランス語編と続編をまとめて編集し、日本語訳語を付したものである。この記述に基づき、Landolt(本編)のフランス語編(以下資料 1)と、Landolt(補遺)のフランス語部(以下資料 2)を使って検証を行う。

『五国』に収録されている見出し項目は 13,304 件である。一方、資料 1 の見出し項目は 11,519 語で、資料 2 の見出し項目は 1,747 語である。項目数がかなり多いため、見出し項目をすべて検証することは難しい。そこで、A 部の見出し項目を対象にして、検証を行うことにする。検証は次のステップで行う。

- 資料 1、資料 2 のフランス語の見出しと、『五国』のフランス語の見出しを照合して、一致するかを調べる。
- 前のステップで得たフランス語の見出しに対応するドイツ語・英語・オランダ語の訳語を対象にして、資料 1、資料 2 の内容と、『五国』の内容を照合して、一致するかを調べる。
- 以上の二つのステップで一致した見出しについて、資料 1、資料 2、『五国』に占める割合を調べ、資料 1、資料 2 と『五国』との関係を判断する。

4.4.2 検証結果

資料 1 の A 部の見出し項目は 876 件、資料 2 は 221 件、『五国』は 1,094 件である。下記は対照に使う資料 1 と『五国』のデータの一部である(改行は原文のまま、二重下線は筆者による。以下同)。

資料 1	『五国』
Aabam, m. (mét.) — <i>Aeltere Benennung für Blei</i> — Ancient denomination of lead. — <i>Oude benaming voor lood.</i> (資料 1 p. 1)	Aabam, m. (mét.) — Aeltere benennung für blei. 鉛 古名 — Ancient denomination of lead. — Oude benaming voor lood. (『五国』 p. 1)
Abandonner, v. (le champ de bataille) — <i>Das Feld räumen, verlassen.</i> — To abandon, leave, <u>give up</u> , To quit the field. — <i>Ontruimen, Verlaten.</i> (資料 1 p. 1)	Abandonner, v. (le champ de bataille) — Das feld 去ル (戦場ヲ) räumen, verlassen. — To abandon, <u>leave up</u> , To quit the field. — Ontruimen, Verlaten. (『五国』 p. 1)
Adjudant sous-officier, m. — <u>Junker</u> , Porlépée-fähnrich, m. — Regimental-or troop-sergeant-major. — <i>Adjudant-onder-offcier, m.</i> (資料 1 p. 3)	Adjudant sous-officier, m. — <u>Iunker</u> , Porlépée- 下副官 fähnrich, m.—Regimental-or troop-sergeant-major.—Adjudant-onder-offcier, m. (『五国』 p. 9)

以上より、収録項目‘Aabam’の資料 1 と『五国』の両資料における記述はすべて一致する。しかし、収録項目‘Abandonner’と‘Adjudant sous-officier’の両資料における記述に不一致の箇所(二重下線部)がある。前者の英語の訳語に、資料 1 は‘leave, give up’と訳すのに対し、『五国』は‘leave up’と訳す。後者はドイツ語の訳語に、‘Junker’と‘Iunker’に、‘J’と‘I’の違いがある。これらの不一致は誤植による可能性が高いと思

われる。不一致の箇所を除き、前後の記述をみると、資料 1 と『五国』との対応関係は明白であるから、本稿の検証では、このような例を一致例として扱うことにする。

それでは、資料 1 と『五国』との対照結果を見てみよう。

資料 1 の見出し語 876 語のうち、874 語が『五国』に収録されている。この 874 語のドイツ語・英語・オランダ語の訳語と、『五国』の訳語を対照してみると、すべて一致する⁴⁷。つまり、資料 1 の 99.8%以上は『五国』に収録されている。

未収録は次の 2 語である。

(1). *Acier de lopin, m. —Luppenstahl. —*

Bloom-steel. —Wolfstaal.

(資料 1 p. 2)

(2). *Air, m. (min.)—Verdorbene Luft, f.*

Wetter, n. —Foul air, Choke damp,

Malaria. —Bedorvenlucht, f.

(資料 1 p. 6)

現代フランス語では、(1)の意味は「ビレット」⁴⁸で、(2)の意味は「空気」である。未収録の理由については、兵語辞書に相応しくない単語として削除された、編集の時に見逃してしまった、など様々に推測できる。この点については、『五国』と資料 1、資料 2 を全体的に対照し、未収録のものを全体的に収集した上で、検討することにする。

今回の調査に現れた(1)と(2)の未収録の理由を検討すると、(1)は‘*Acier*’ (鋼鉄) の関連用語 12 語の中にあるもので、編集の時に見逃された可能性が考えられる。(2)については後述する。

次に、資料 2 と『五国』との対照結果を見ていく。対照に使う資料 2 と『五国』のデータの一部を次のページに示す。

⁴⁷ ‘*Abandonner*’, ‘*Adjudant sous-officier*’のような誤植と見られるところが 15 箇所ある。

⁴⁸ ビレットは製鋼の圧延工程の中間製品のひとつである。

資料 2	『五国』
Abanicrado, m. — <i>Spanischer Fahnen-träger</i> . — Spanish ensign. — <i>Spaansche standaarddrager</i> . (資料 2 p. 215)	Abanicrado, m. — Spanischer fahnenträger. — 大旗手 西班牙 Spanish ensign. — Spaansche standaarddrager. (『五国』 p. 1)
Au vent, <u>adj.</u> (mar.) — <i>Luvwärts</i> . — Windward. — <i>Te loevert</i> . (資料 2 p. 219)	Au vent, <u>adv.</u> (mar.) — <i>Luvwärts</i> . — Windward. 風上 ⁼ — <i>Te loevert</i> . (『五国』 p. 78)

資料 2 と『五国』の両資料における‘Abanicrado’の記述はすべて一致する。‘Au vent’のフランス語の見出しに、‘adj.’と‘adv.’の違いが見られるが、ほかの訳語はすべて一致し、対応関係は明白である。このような用例は一致例として扱うことにする。

対照の結果、資料 2 の見出し 221 件のうち、219 件が『五国』に収録されている。この 219 件のドイツ語・英語・オランダ語の訳語と『五国』の訳語はすべて一致する⁴⁹。『五国』に収録されているものは資料 2 の 99.1%を占めている。

未収録の 2 語は次の(3)、(4)である。前者の意味は「上陸すること」で、後者の意味は「弩」である。

(3). *Accès*, m. syn. *Abords*.

(資料 2 p. 215)

(4). *Avant traversier*, m. (mar.)—*Querbug*,
m. —Cross-bow.—*Dwarsboeg*, *m.*

(資料 2 p. 219)

⁴⁹ 誤植と見られるところが 4 箇所ある。

一方、『五国』のA部の見出しは1,094件である。そのうち、資料1からの引用は874件、資料2からの引用は219件で、合計1,093件である。つまり、『五国』の99.9%は資料1と資料2からの引用である。この割合をみると、資料1と資料2は『五国』の翻訳底本であると断定してよいと思われる。

なお、資料1と資料2からの引用ではなく、『五国』だけに収録されているのは、次に示す‘Air dans les galleries’という連語である。

(5). Air dans les galleries, m. (min.)—Verdorbene 隧内汚気

Luft, f. Wetter, n. —Foul air, Choke damp,

Malaria. —Bedorven lucht, f.

(『五国』 p. 20)

(5)は資料1にも、資料2にも収録されず、『五国』にしか収録されていないものである。(5)は如何なる資料によって導き出されたかを調べたところ、前述の(2)及び、Landolt(本編)の英語編との関連が見えてくる。

(2). Air, m. (min.)—*Verdorbene Luft, f.*

Wetter, n. —Foul air, Choke damp,

Malaria.—*Bedorvenlucht, f.*

(資料1 p. 6)

(6). Foul air, s. (min.)—*Air dans les gale-*

ries, m. —*Bedorvenlucht, f.* —*Wetter, n.*

(Landolt(本編)の英語編 p. 105)

(2)は資料1の内容で、前記の資料1の中の、『五国』に収録されていない2語の一つである。(2)を(5)と対照すると、ドイツ語・英語・オランダ語の訳語は一致するが、フランス語だけは一致していないことが分かる。一方、(6)はLandolt(本編)の英語編に収録されている内容である。配列順は英語・フランス語・オランダ語・ドイツ語である。その訳語を(5)と比べると、フランス語とオランダ語の訳語は一致するが、ドイツ語と英語の訳語は一部省略されたことが分かる。

語彙の意味をみると、(2)のフランス語‘Air’は一般的に「空気」の意味であるが、(2)の‘Air’の後ろに‘(min.)’と書いている。『五国』の凡例によると、‘(min.)’は「坑兵語」の意味である。すなわち、(2)の‘Air’は坑兵語で、「坑道内の空気」を指していると思われる。その後ろに記されている三ヶ国語の訳語の意味は「汚れた空気」であったり、「窒息性のガス」であったりする。つまり、(2)の“Air”は「坑道内の汚れた空気」、あるいは「坑道内の窒息性のガス」の意味であろう。また、(6)のフランス語‘Air dans les galleries’は「坑道内の空気」の意味である。一方、『五国』では、フランス語の意味「坑道内の空気」と、他の三ヶ国語の意味「汚れた空気」・「窒息性のガス」とを、「隧内汚気」という日本語訳でまとめて表している。

資料1を翻訳する際に、編者たちもおそらく(2)のフランス語‘Air’だけでは、「坑道内の汚れた空気」を表せないということに気づき、ほかの編で調べたのではないかと推察する。その結果、Landolt(本編)の英語編に似た内容を見つけた。フランス語表記は‘Air dans les galleries’で、「坑道内の空気」という意味である。そこで、(2)のフランス語表記‘Air’を‘Air dans les galleries’に直し、四ヶ国語の意味をまとめて「隧内汚気」という日本語の訳語を付けたと思われる。

このように、『五国』は翻訳底本の内容に忠実であるが、底本の不適切な箇所に編集を加えたところも見られる。もう一つの用例として、次のページの図9を挙げる。

Arrêt, m. (man.) — Halt, m. — Stop. —
 Halte, f.
 Arrêtoir, m. (m. d'a.) — Stütze, f. Hal-
 ter, m. — Stop. — Rust, f.
 — de coffre, m. (art.) — Grenzblatt,
 n. — Stop-plate. — Oog tot bevestiging
 der munitiekist, n.
 — d'écouvillon, m. (art.) — Grenzblatt,
 Grenzeisen, n. — Catch, Nib. — Steun, m.
 — de levier, m. (art.) — Stützeisen,
 n. — Catch, Nib fixed. — Beslag der
 handspak, n.
 Arrêter, v. — Verhaften. — To put to
 prison. — Arresteren, In arrest nemen.
 — l'ennemi, v. — Aufhalten. — To
 keep the enemy in check. — Ophouden.
 — v. (tact.) — Anhalten. — To halt. —
 Halt houden.
 — quelqu'un par le qui-vive, v. —
 Anrufen. — To challenge. — Aanroepen.

(資料1 p. 17)

Arrêt, m. (man.) — Halt, m. — Stop. — Halte, f. 駐止^{マド}
 Arrêter, v. (man.) — Arretiren. — To halt. — 駐メ^{マド}
 Halt houden.
 Arrêter, v. — Verhaften. — To put to prison. — 禁錮^{マド}
 Arresteren, In arrest nemen.
 Arrêter l'ennemi, v. — Aufhalten. — To keep the 敵ヲ^{マド}
 enemy in check. — Ophouden.
 Arrêter, v. (tact.) — Anhalten. — To halt. — 止ム^{マド}
 Halt houden.
 Arrêter quelqu'un par le qui-vive, v. — Anrufen. 誰何^{マド}
 — To challenge. — Aanroepen.
 Arrêtoir, m. (m. d'a.) — Stütze, f. Halter, m. — 環爪^{マド}
 Stop. — Rust, f.
 Arrêtoir de coffre, m. (art.) — Grenzblatt, n. — 環板^{マド}
 Stop-plate. — Oog tot bevestiging der munitie-
 kist, n.

(『五国』 p. 62)

図9 翻訳底本と『五国』の収録語彙の対照

図9の左側は資料1の内容で、右側は『五国』の内容である。見出し語のところを見ると、資料1はArrêt → Arrêtoir → Arrêtoir de coffre → Arrêtoir d'écouvillon → Arrêtoir de levier → Arrêter → Arrêter l'ennemi → Arrêter → Arrêter quelqu'un par le qui-viveの順番で語彙を掲載しているが、明らかにフランス語ABC順と一致していない。そこで、『五国』では、修正を加えて、Arrêt → Arrêter⁵⁰ → Arrêter → Arrêter l'ennemi → Arrêter → Arrêter quelqu'un par le qui-vive → Arrêtoir → Arrêtoir de coffreのように、語順を直している。資料1と資料2のA部において、以上のような誤った配列順が資料1に2箇所、資料2に1箇所ある。『五国』では、この3箇所に修正を加えて、正しい配列順に直しているのである。

4.5 まとめ

本章では『五国』の翻訳底本と底本の著者に関する問題について検討を行った。その結

⁵⁰ 'Arrêter'は資料2から引用した項目である。

果、『五国』はオランダの陸軍大尉 Heinrich Mathias Friedrich Landolt の著書 *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* (1865-1868) のフランス語編と、*Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine Supplément* (1871) のフランス語部を翻訳底本にして、参謀本部によって、翻訳・編集・出版されたものであることが分かった。編集は翻訳底本に忠実であるが、翻訳底本の誤った配列順を直したり、不適切な表記を直したりするなど、一部修正を加えていることも明らかになった。

5. 『五国』の準備期の稿本

本章では、『五国』の準備期の稿本について検討する。

早川(2006)では、池田良輔という人物を『五国』の編者として挙げている。しかし、『五国』の序文における編者の記述には、池田良輔の名前は挙げられていない。池田良輔は『五国』と如何なる関係にあるか。本章では、早稲田大学古典籍総合データベースに公開された和歌山の洋学者、池田良輔の手稿『兵学辞書 A ノ部：仏独英蘭日五ヶ国対訳』を、『五国』の A 部と対照し、両者の関係を解明しようとする。また、両者の訳を比べ合わせることによって、『五国』の訳の特徴を掴もうとする。

5.1 先行研究とその問題点

これまでの研究をみると、『五国』の編者について述べる時に、池田良輔の名前を挙げたのは、藤田(1940)、信岡(2003)及び早川(2006)がある。

藤田(1940)は、『和歌山史要』(1920)の内容に基づき、池田良輔という人物の経歴を次のようにまとめた。

池田良輔(二四七七―二五五四⁵¹)名高英、初稱富之丞。大阪天満與力良輔高德次男。長崎に遊びて英佛獨蘭の語を學び、緒方洪庵の薦めにより、慶應二三年の交紀藩に仕す。和歌山に英佛獨語を開始した先覺なり。維新後陸軍省に召され翻譯事務に従事す。明治二十七年五月歿。⁵²

以上の記述から、池田良輔は英語、フランス語、ドイツ語、オランダ語を学んだことがあり、和歌山で英語、フランス語、ドイツ語学をはじめた先覚である。明治維新の後に、陸軍省に翻訳関連の仕事に携わったことがある。

そして、藤田(1940)は池田良輔自筆に係るものの中から、『兵学辞書 A ノ部：仏独英蘭日五ヶ国対訳』(以下、池田手稿)の内容の一部を『五国』と比較した。その結果、池田

⁵¹ 「二四七七―二五五四」は皇紀による年号表記である。

⁵² 下線は筆者による。

手稿は『五国』の準備期の稿本と推測し、そのタイトルに書かれた「兵学辞書」、「五ヶ国対訳」は『五国』の名の源であると述べている。

信岡(2003)では、池田良輔について「西周の序文には記されていないが、字書の成立に大きく貢献したことは疑いない」と述べている。また、池田手稿について、信岡(2003)では、藤田(1940)の研究をうけ、池田手稿の実物を確認して考察を行った。信岡(2003)における池田手稿の情報を次のようにまとめる。

まず、池田手稿の大きさは24.4cm×16.6cmであり、薄い青罫の和紙に書かれている。和紙は真ん中で二つ折して重ねて左綴じにされており、中央に陸軍参謀局第三課の文字が入っている。池田手稿は全部で146頁であり、数カ所に手書きの図が添えられている。また、池田手稿の見出し語の頭に番号が振られているが、信岡(2003)では、これらの番号の意味は不明であると述べている。

さらに、信岡(2003)では、池田手稿と、『五国』A部の始まりの6語と対照し、見出し語に不一致や、訳語の細部に異同があると指摘する。

次に、早川(2006)を見てみよう。ここでは、『五国』の編者室岡峻徳、菊野七郎、若藤宗則、矢島玄四郎と池田良輔の略歴をまとめている。詳しい内容は第一章第2節で参照することとし、ここでは、池田良輔の略歴だけを次に引用しておく。

池田良輔（いけだ・りょうすけ）

1816(文化13)–1894(明27.5.27)大坂天満の与力の次男として生まれる。別名は佐々木高英。大塩平八郎に漢学を、華岡青洲に外科を、緒方洪庵に蘭学および西洋医学を学んだ。長崎ではオランダ人から医学と語学を学んだ。洪庵の推薦で紀州藩に仕官する。維新後は明治政府に出仕し、陸軍省に勤務した。ドイツ語やフランス語も教授した。大村益次郎や福沢諭吉に思想的影響を及ぼしたといわれる。『英吉里私文典』(慶応3)などの著作がある。池田の蔵書は大槻家旧蔵書、勝俣銓吉郎らの蔵書を加え「洋学文庫」と名づけられ早稲田大学附属図書館に保管されている。⁵³

藤田(1940)・信岡(2003)・早川(2006)における池田良輔の記述をまとめると、池田良輔は和歌山に英語・フランス語・ドイツ語を開始した先覚であること、陸軍省でドイツ語・フランス語を教授したこと、翻訳関係の仕事に携わったことがわかる。こうした状況から

⁵³ 早川(2006), p. 226

池田良輔の自筆した池田手稿は『五国』の準備期の稿本である可能性が高い。しかし、先行研究における池田手稿と『五国』との対照は一部しか行われていないため、両者の関係を明確的に断言できない。また、信岡(2003)に指摘されているが、池田手稿の見出し項目の前に書かれた番号の意味、池田手稿と『五国』の両資料における見出し語の不一致や、訳語の細部の異同などの問題点は解決されていないまま残っている。

藤田(1940)・信岡(2003)・早川(2006)のほかに、池田良輔については、藤田(1941)、貴志(1957)の研究2件と、陸軍省の史料1件がある。

藤田(1941)では、池田良輔が自筆した仏朗西文典草稿の訳語について分析を行った。フランス語に添えられた発音を表す片仮名は、今日の発音に近く、ことに優秀なものであると高く評価している。

貴志(1957)は池田良輔の孫池田英男が所蔵する池田良輔宛の書状などの資料を元にして書かれた伝記である。書状の中に、緒方洪庵・福沢諭吉・津田出などの著名人からのものが多く見られる。ここで紹介された池田良輔の生涯は早川(2006)に示された内容とほぼ同じであるが、早川(2006)に記されていないものだけを、次にまとめる⁵⁴。

池田良輔は洪庵の推薦で長崎に蘭医ニューマンに師事。その時に、英仏独などの語学も修得した。40歳頃、また、洪庵の推薦で紀州藩に出仕し、洋学と西洋兵学を教授。50歳頃、『仏朗西訳文典ひとりあゆみ』と『英訳文典』を出版。1874年、当時の陸軍少将津田出の勧誘で、陸軍省参謀局に勤務。62歳の時に、退官し、和歌山に隠居。1894年歿、79歳。

貴志(1957)では、池田良輔が紀州藩から陸軍省参謀局に仕官するきっかけについて、津田出によって書かれた池田良輔宛の1874年7月9日付書状を引用し証明している。その後、同年の9月25日に、池田良輔に参謀局に分課するとの辞令「佐々木慎恩朝外3名分課届」⁵⁵が出された。

筆者は当時の陸軍省の文書類を収録している「陸軍省大日記」を調べた結果、次のような史料が得られた。下線は筆者による。

第三百二十一号／各通／九等出仕佐々木慎思朗／同 池田良輔／十三等出仕

⁵⁴ 下線は筆者による。

⁵⁵ JARCA Ref.C04026090700、明治7年 「大日記 第3号 9月より利参謀局」

河合友輔／十五等出仕佐野絜／第三課分課申付候事／前書ノ通相達候間此段御
届申上候也／明治七年九月二十七日／参謀局代理 陸軍中佐浅井道博 山県陸
軍卿殿

上記の史料は1874年9月27日に、陸軍中佐浅井道博が陸軍卿山県有朋に送ったもので、池田良輔を含む4人を、第三課に分課するという内容である。史料に現れる第三課は、参謀局第三課のことで、欧亜兵制に関する調査研究にあたる部門である。当時、第三課の課長は『五国』の編纂の総裁を務めている西周である。

貴志(1957)に示された辞令の下された時期と合わせてみると、辞令の2日後に、池田良輔は陸軍省参謀局第三課に分課されたことがわかる。また、この史料の時間を遡ること4ヶ月前、参謀局第三課に、『五国』の編集命令が下された。それから、山県宛の書状の差出人である浅井道博が1874年7月2日に、兵語辞書編集掛に任命されたことは、先行研究の信岡(2003)で示されたとおりである(「3.1『五国』の編纂に関する先行研究」を参照)。

以上の池田良輔に関する情報から、池田良輔は英語・仏語・独語・蘭語に通じているばかりでなく、西洋兵学にも詳しく、『五国』の翻訳に最適な人と言ってもよかろう。しかも、池田良輔が陸軍省参謀局に勤務した1874年は、『五国』の編集が始まった年で、官人をやめた年1881年は、『五国』の出版された年である。以上より、池田良輔は陸軍省で『五国』の編集に関係した可能性が極めて高いと考えられる。

しかし、具体的に池田手稿が如何なるものであるか、如何なる訳が収録されているか、『五国』と関係しているとしたらどのくらいの訳が『五国』に取り入れられたかなどについて、先行研究ではまだほとんど解明されていない。

本章は、池田手稿と、『五国』A部のすべての訳をデータ化し、訳を対照しながら、両者の関係を検証したい。また、両者の訳を比べ合わせることによって、『五国』の訳の特徴の一端を描きたい。

5.2 池田手稿

本稿で用いる池田手稿は、早稲田大学古典総合データベースで公開されている。このデータベースには池田良輔の旧蔵本が合計30件収録されている。これらは池田良輔の孫である池田英男より寄贈されたものである。

蔵書の中には、蘭和辞書の『和蘭字彙』(桂川甫周, 1858)1冊と、英和辞書の『英和対

訳袖珍辞書』(1867) 1 冊がある。ほかには、フランス語・ドイツ語で書かれた戦略・砲兵に関する軍事関連書や、欧文の辞書などが 14 冊ある。さらに、池田良輔によって編集されたもの、翻訳されたもの、あるいは書写されたものが 14 冊ある。中には、翻訳した英語、フランス語の辞書はもちろん、英語の会話集、数学の教科書も見られる。先行研究で示されている通り、池田良輔は確かに英語、フランス語などの西洋言語に堪能な人物であったようである。

本稿の研究対象の池田手稿はその中の一冊である

(図 10)。書写年に関する記載は見えない。表紙に毛筆で、「兵學辭書 A ノ部／佛獨英蘭日五ヶ国對譯」と書かれている。手稿の名前の隣に、「池田良輔／(一八一七ー一八九四)／著書之印」という内容の朱文の方印と、「寄贈 良輔孫 池田英男」という内容の朱文の長方印が押されている。A の部以外の存否について、早稲田大学図書館とその他の図書館を調べたが、いまのところ見出していない。おそらく完成したのは A の部だけではないかと推定される。

池田手稿は原稿用紙を真ん中で二つ折して重ねて和綴じにしたものである。使っている原稿用紙は赤罫の紙(計 26 ページ)と、青罫の

方眼紙(計 120 ページ)の 2 種類である。青罫の方眼紙の折り目に、「陸軍参謀局第三課」の表記があり、参謀局第三課の用箋であると思われる(図 11)。原稿用紙には、ページ番

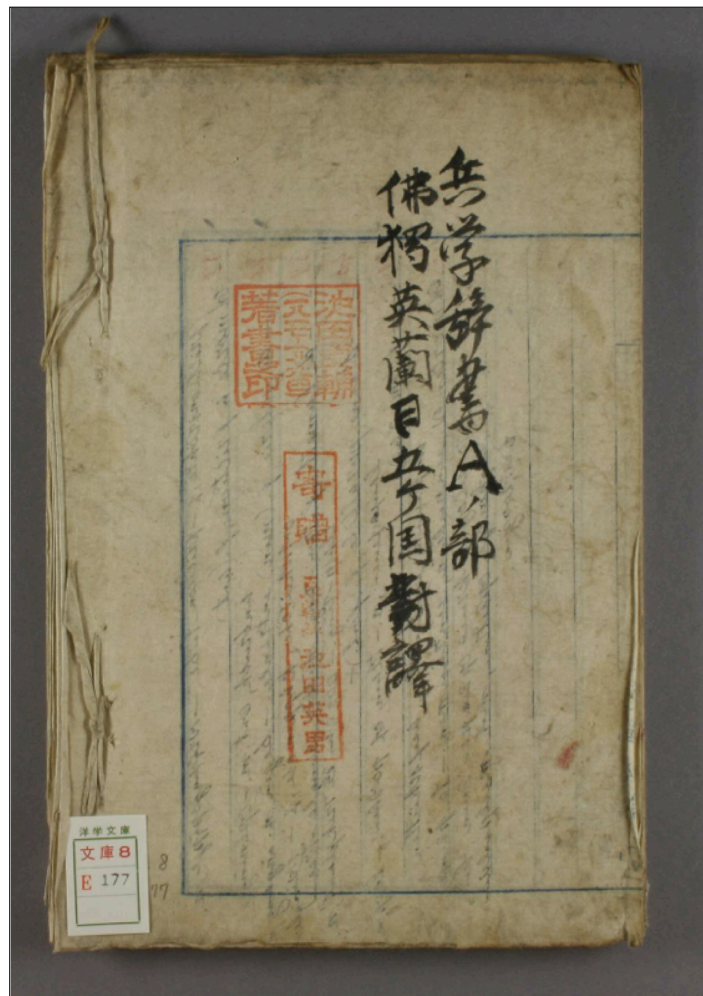


図 10 池田手稿

号の記載がないが、数えてみると、合計で 146 ページである。

また、図 11 から分かるように、池田手稿の収録項目は基本的にフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語の見出しと、日本語訳からなっている⁵⁶。この配列は『五国』のと同じである。全稿は、欧文・日本語を問わず、すべて毛筆で書かれている。1 ページから 9 ページの前半まで、欧文見出しの部分は朱書きで、日本語訳は黒字で記されている。残りのページにおける記述はすべて黒字で記されている。従って、池田良輔は翻訳底本に直接に日本語訳を書き込むのではなく、翻訳底本の内容を写してから、翻訳を行ったと見られる。

翻訳底本を写すことは、昔から日本の知識人の間によく見られる。古典やお経の写本はいうまでもなく、蘭学者前野良沢は自らの著書『蘭化亭訳文式』（前野良沢, 1785）の冒頭に、「凡翻訳ヲ為ス者、宜先線字ヲ用テ原文ヲ謄写スベシ。」と述べているように、18 世紀になってからも、蘭学をはじめとして西洋の書物を翻訳する時に、翻訳底本を写してから翻訳作業を行うのが一般的である。翻訳底本を写すことは翻訳底本が高価であったり、入手困難なものであったりすることに繋がるが、写すということ自体は翻訳底本の内容を理解することに役に立つと思われる。

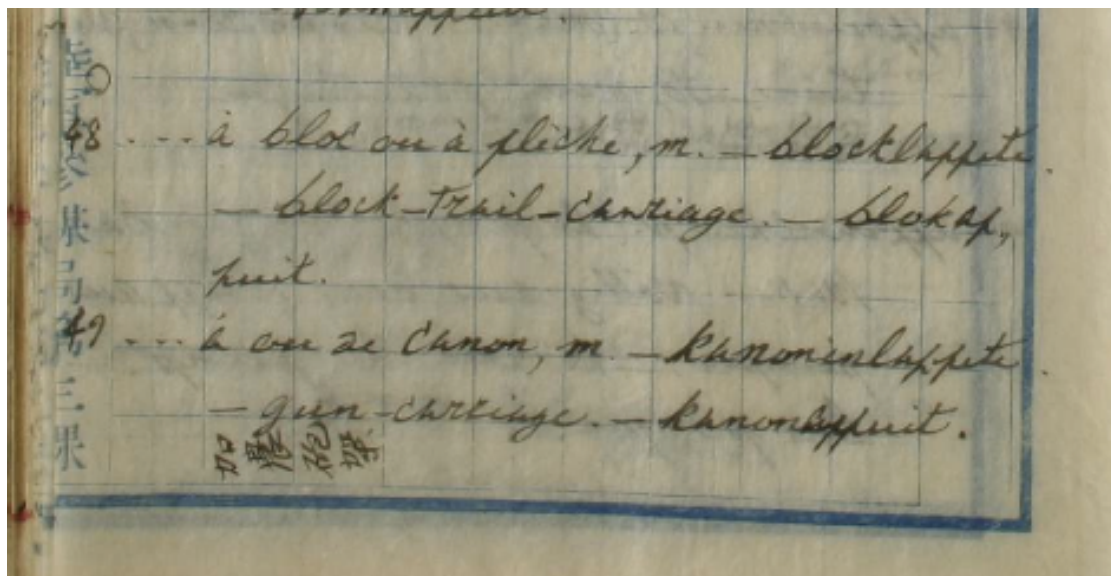


図 11 池田手稿に使われている青罫の方眼紙

⁵⁶ 日本語訳の付いていない収録項目も見られる。詳しいことについては後述する。

池田手稿の収録項目をみると、一つの見出し項目に付き、基本的に一つの単語もしくは、一つの文で翻訳する。一部の収録項目の左側に「○」の印が見られる。すべての「○」付きの収録項目に、日本語訳がないため、「○」の印は、日本語訳がまだ決まっていない意味を指しているを思われる。「○」の付いた収録項目は合計 43 件ある。また、一部の収録項目の左側に数字が見られる。これらの数字の意味は後述する。

そのほか、池田手稿の 146 ページの中に、付箋の貼られた用紙が 5 枚ある。付箋は収録項目の隣に、あるいは用紙の上部に貼られる。収録項目の隣に貼られた付箋に該当する項目についての説明または、絵が記されている。用紙の上部に貼られた付箋には、該当するページにある複数の収録項目についての説明、または絵が記されている。付箋が用紙の上部に貼られる場合に、各付箋の下に、「1、2、3」のような数字が書かれている。これらの数字は、用紙に書かれた収録項目の順番を示すものである。図 12 は池田手稿に貼られた付箋の一例であるが、この付箋をみると、錨の絵の下に、数字の「3」が記されている。そこで、錨の絵は、3 番目の収録項目「錨環」を説明するために附されたものであることがわかる。

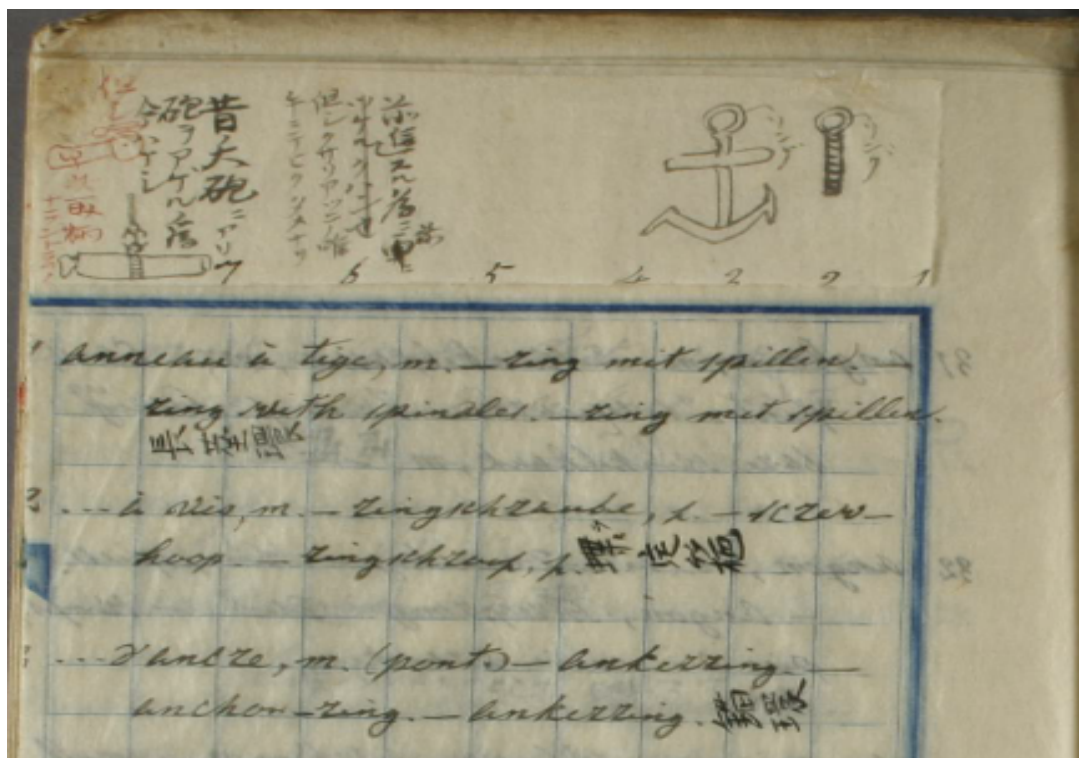


図 12 池田手稿に貼られた付箋

5.3 池田手稿と『五国』

5.3.1 検証方法

第4章に示したように、『五国』の翻訳底本はオランダの陸軍大尉 Heinrich Mathias Friedrich Landolt の著書 *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* (1866-1868) のフランス語編と、*Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine Supplément* (1871) のフランス語部である。従って、池田手稿と『五国』との関係を検討する時には、池田手稿と Landolt (本編)、Landolt (補遺) との関係も検討しなければならない。本節では、池田手稿、『五国』、Landolt (本編)、Landolt (補遺) の4資料の見出し項目の異同を検証する。

池田手稿はAの部しか収録されていないため、検証はAの部の収録項目を中心に行う。次のステップで検証する。

- 池田手稿の見出しのフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語と、Landolt (本編)、Landolt (補遺) の見出しのフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語とを照合し、表記・順番が一致するかを調べる。
- 前のステップの検証で一致した見出しが池田手稿・Landolt (本編)・Landolt (補遺) の3資料に占める割合を計算し、3資料の関係を判断する。
- 池田手稿の見出しのフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語と、『五国』の見出しのフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語を照合し、一致するかを調べる。
- 池田手稿の日本語訳と、『五国』の日本語訳とを照合し、両者における日本語訳の関係を検討する。
- 池田手稿と『五国』を照合した結果をまとめ、両者の関係を判断する。

なお、池田手稿は書写されたものである。特に、欧文の見出し項目の部分は、筆記体で書写されたために、書写の癖や、習慣による個人差が考えられる。従って、見出し項目の対照作業は、フランス語・ドイツ語・英語・オランダ語の単語の相違を中心に行い、スペリングや、綴り字記号の相違については、一致例として扱うことにする。

5.3.2 池田手稿と Landolt (本編)・Landolt (補遺)との関係

まず、3資料のA部の見出し項目を見てみよう。池田手稿の見出し項目は876件である。Landolt (本編)の見出し項目は池田手稿と同じく、876件である。Landolt (補遺)の見出し項目は221件である。

池田手稿と、Landolt (本編)・Landolt (補遺)を対照した結果、池田手稿の見出し項目はLandolt (本編)のものとすべて一致する。一方、Landolt (補遺)のものと一致するものは見られない。そこで、池田手稿はLandolt (補遺)と関係しないことが推定できる。信岡(2003)では、池田手稿と『五国』の見出し項目の間に不一致が見られ、『五国』には、池田手稿に収録されていない項目が追加されたと述べているが、池田手稿と、Landolt (本編)、Landolt (補遺)を対照した結果からみると、追加されたものはLandolt (補遺)の内容であると思われる。

池田手稿と、Landolt (本編)の見出し項目とを対照すると、両者は内容が一致する上に、配列順番も対応している。特に、池田手稿の15ページの左上に縦書きで、「三四五六」と書かれているところがある(図13)。

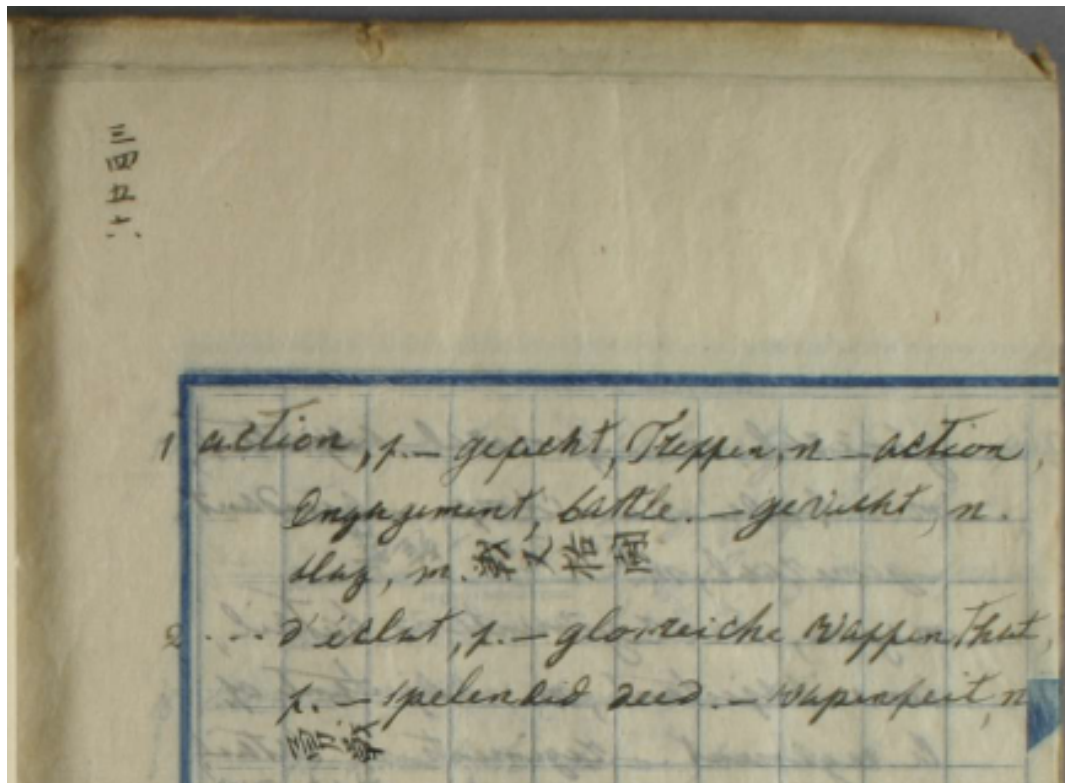


図13 池田手稿にある書き込み

このページの見出し項目は‘Action’から始まり、ちょうど Landolt(本編)の3ページの左側の最初の項目と一致する。しかも、池田手稿の15ページから、55ページまでの見出し項目は、Landolt(本編)の3ページから、6ページまでの見出し項目と対応している。そこで、左上に書かれた数字は Landolt(本編)のページ数を表しているものと推定できる。同じ表記は池田手稿の55ページ、107ページ、128ページにある。55ページには、「九十十一十二三十四十五十六」と縦書きで書いている。107ページと127ページには、それぞれアラビア数字「17」、「20」と書いている。確認したところ、これらの数字はいずれも Landolt(本編)のページ数を表している。そこで、池田良輔は翻訳底本の Landolt(本編)をページで幾つかの部分に分けて翻訳したと推測される。

では、信岡(2003)に示した疑問に戻る。池田手稿の一部の見出し項目の左側に数字が振られているところがある。これらの数字は1から始まって80でまた1に戻ったり、または1から始まって89でまた1に戻ったりする。たとえば、図13をみると、‘action’の見出しの左側に数字の1が付いている。このページから28ページまでの見出しの左側に、1から80までの数字が振られている。信岡(2003)では、これらの数字の意味を不明としている。筆者が調査したところ、これらの数字の意味するところが判明したので、次に説明する。

池田手稿の15ページから28ページまでにおける見出しの1から80までの数字は Landolt(本編)の3ページから4ページまでの収録項目の順番と対応している。池田手稿の29ページで、見出しの左側の数字はまた1に戻る。同様に、29ページから42ページまでの見出しの左側に、1から89までの数字が振られており、Landolt(本編)の5ページから6ページまでの収録項目の順番と対応している。従って、見出し項目の左側に振られた数字は Landolt(本編)の見出し項目の順番を表すものであると考えられる。

ただし、筆者の参看した Landolt(本編)では、収録項目には数字が振られていない。おそらく池田良輔が Landolt(本編)の収録項目を写す時に、写し漏れを防ぐ為に、Landolt(本編)と、手稿の両方に数字を付けてから、写し始めたのではないかと推測される。

要するに、池田手稿と Landolt(本編)の見出し項目の内容は一致し、項目の配列順番も対応している上に、池田手稿には、Landolt(本編)のページ数を表す書き込みがある。以上より、池田手稿は Landolt(本編)に基づいて書写されたものと判断できる。

5.3.3 池田手稿と『五国』との関係

池田手稿はLandolt(本編)に基づいて書写されたものであることは、前節で証明された。それでは、『五国』と池田手稿とは如何なる関係にあるか。本節は池田手稿と『五国』の訳語を対照しながら、この問題を検討する。

まず、池田手稿と『五国』の見出し項目の数を見てみよう。池田手稿の見出し項目は876件である。『五国』の見出し項目は、Landolt(本編)から引用した874件、Landolt(補遺)から引用した219件と、その他の1件からなっている。池田手稿とLandolt(本編)の見出し項目は一緒であるため、池田手稿の見出し項目876件のうち、『五国』と一致するものは874件である⁵⁷。

見出し項目874件の中に、類義の二つのフランス語を、‘syn.’か、‘voy.’⁵⁸かで繋ぎ、ドイツ語・英語・オランダ語・日本語を省略したものは64件である。この64件を除くと、日本語訳付きの見出し項目は810件である。本節における訳の対照はこの810件を対象に行う。

対照した結果、日本語訳810件の中に、一致するものは578件で、池田手稿から影響を受けていると見られるものは103件で、計681件である。即ち、対象の810件のうち、池田手稿の訳と同じかそれから影響を受けているものは84.1%を占めている。残りの129件は、池田手稿で訳されなかったもの、池田手稿で誤訳されたものなどを含む『五国』と一致しないものである。そこで、池田手稿は『五国』の準備期の手稿である可能性があると推定できる。

では、『五国』は池田手稿から如何なる影響を受けているか。以下、一致するものと、影響を受けていると見られるもの、それぞれを一部取り上げて検討していく。

・ 一致するもの

池田手稿と『五国』の日本語訳とが一致するものは578件である。つまり、池田手稿の日本語訳の71.4%は『五国』に取り入れられたと言ってよかろう。その一部を次のページの表1に示す。

なお、池田手稿や『五国』に、日本語訳が二つ以上ある場合に、表1では「池田手稿(1)」、

⁵⁷ 池田手稿にはあるが、『五国』に収録されていない2件の見出し項目は第三章の4.2節を参考されたい。

⁵⁸ たとえば：‘A syn. B’は「AとBは同義語」という意味で、‘A voy. B’は「Aの意味はBを参照」という意味である。

「池田手稿(2)」、「『五国』(1)」、「『五国』(2)」と分けて、訳を示す。また、分類の際に、表1にある1番の‘Aabam’のような、池田手稿の訳を全部受け取ったが、修飾部分もしくは目的語を説明文に入れた用例も一致例として扱うことにする。このような用例は合計37件ある

表1 一致するものの一部

No	見出しの フランス語	池田手稿 (1)	池田手稿 (2)	池田手稿 説明文	『五国』 (1)	『五国』 (2)	『五国』 説明文
1	Aabam	鉛ノ古名	-	-	鉛	-	古名
2	Abab	土耳其ノ水夫	-	-	水夫	-	土耳其ノ
3	Abandonner	戦場ヲ去ル	-	-	去ル	-	戦場ヲ
4	Abatis	鹿角	-	即チ逆茂木	鹿角	-	即チ逆茂木
5	Abreuver	水ヲ飲フ	-	-	水ヲ飲フ	-	-
6	Abolle	古昔兵士ノ外 套	-	-	兵士外套	-	古昔ノ
7	Absinthe	茵陳蒿	-	-	茵陳蒿	-	-
8	Académie militaire	兵学校	-	-	兵学校	-	-
9	Accôre	支柱	-	-	支柱	-	-
10	Acide hydroc- hlorique ou muriatique	鹽酸	-	-	鹽酸	-	-
11	Acier	鋼鉄	-	-	鋼鐵	-	-
12	Adynati	廢兵	-	-	廢兵	-	-
13	Affronter	奮撃スル	対撃スル	-	奮撃スル	対撃スル	-
14	Aide mémoire	手簿	-	-	手簿	-	-
15	Affût à dépre- ssion	俯撃砲架	-	山城ヨリ俯撃 スル者ヲ云	俯撃砲架	-	山城ヨリ俯撃 スル者ヲ云

16	Albanis	亞留婆尼亞人	-	-	亞留婆尼亞人	-	-
17	Angle mort	死角	-	-	死角	-	-
18	Appel	呼号	點呼	-	呼号	點呼	-
19	Approvisionnement	軍需	-	-	軍需	-	-
20	Aquilifère	古羅馬國旗手	-	-	國旗手	-	古羅馬ノ

表 1 に示した池田手稿と『五国』の日本語訳をみると、「鉛ノ古名」と「鉛(古名)」、「土耳其ノ水夫」と「水夫(土耳其ノ)」のような、修飾成分を説明文に入れる用例があるが、二つの資料における日本語訳は明確に対応していることが分かる。

また、日本語訳の中に、「水ヲ飲フ」、「兵学校」、「支柱」、「鋼鉄」、「手簿」など、一般的に使われているものが一致するだけでなく、「鹿角」、「茵陳蒿」⁵⁹のような専門的で、使用頻度の低いものも一致している。

例えば、4 番の‘Abatis’をみてみよう。池田手稿と『五国』における‘Abatis’の記述は、日本語訳が一致するうえに、説明文の内容も完全に一致する。その記述を次に示す。

Abatis, m. (fort.) – Verhau, Verhack, m. –

鹿角 即チ逆茂木

Abattis. – Verhacking, f.

(『五国』 p. 2)

逆茂木^{サカモギ}というのは、敵の侵入を防ぐために、先端を鋭くとがらせた木の枝を外に向けて並べ、結び合わせた柵のことである。「鹿砦^{ろくさい}」「鹿角砦^{ろっかくさい}」ともいう⁶⁰。

当時の外国語辞書で調べたところ、『波留麻和解』(稲村三伯・宇田川玄随・岡田甫説ら, 1796)、『訳鍵』(藤林淳道, 1810)、『和蘭字彙』(桂川甫周, 1855)といった和蘭・蘭和辞書には該当する項目‘Verhacking’がないが、『三語便覧』(村上英俊, 1854)に「鹿角」の収録が見られる。そして、仏和・和仏辞書と英和・和英辞書で調べると、『官許仏和辞典』(岡田好樹, 1871)に‘Abatis’が収録されており、『和訳英辞林』(高橋良昭[ほか], 1871)、

⁵⁹ 「茵陳蒿」は植物「かわらよもぎ」の漢名である。

⁶⁰ 『日本国語大辞典』(第二版)による。

『英和対訳辞書』（荒井郁之助, 1872）、『和英語林集成』再版（ヘボン, 1872）にも‘Abatis’の収録が見られる。次に示す。

サカモギ ヲ ヲ フ ラ グ ア コ ル ネ ホー ル ン ウ ヲ ル ク ホー レ ン ウ ェ ル ク
鹿角 ouvrage a corne horn-work horenwerk⁶¹

（『三語便覧』 中巻 2 ウ兵語）

Abatis, sm. 伐水。頽レ家。殺シタル獣。獣肉ノ食用ニナラヌ所。廃物。元物⁶²

（『官許仏和辞典』 p. 1）

Ab'a-tīs, Ab'at- tīs, s. サカモギ
逆木

（『和訳英辞林』 p. 1）

Ab'a-tīs, Ab'at- tīs, s. サカモギ
逆木

（『和英対訳辞書』 p. 1）

Abatis, n. Sakamogi

（『和英語林集成』再版 p. 1）

上記のように、『三語便覧』に「鹿角」の項目が収録され、「サカモギ」という発音も示されている。しかし、『三語便覧』における「鹿角」のフランス語 ‘ouvrage a corne’・英語 ‘horn-work’・オランダ語 ‘horenwerk’ をみると、いずれも『五国』に示されているフランス語‘Abatis’・英語‘Abattis’・オランダ語‘Verhakking’と一致しない。

『官許仏和辞典』の日本語訳は「鹿角」にも、「逆茂木」にも関係しない。

『和訳英辞林』と、『和英対訳辞書』では、英語‘Abattis’を「逆木」と訳したうえに、「サカモギ」という発音も示した。『和英語林集成』再版でも‘Abattis’を‘sakamogi.’と訳した。

従って、『三語便覧』には、確かに「鹿角」の収録が見られるが、当時の辞書でフランス語‘Abatis’と英語‘Abattis’の訳語を調べると、「サカモギ」と訳すことが一般的であり、

⁶¹ 『三語便覧』の見出し項目は日本語・フランス語・英語・オランダ語の順番に、縦書きで示されている。本稿では、横書きに示すことにする。

⁶² 『官許仏和辞典』・『和訳英辞林』・『和英対訳辞書』における日本語訳は縦書きで示されているが、本稿では、横書きに示すことにする。

池田手稿のように「鹿角」と訳すのは珍しい。池田良輔は「鹿角」を「サカモギ」の意味で挙げたのは、『三語便覧』の影響を受けたか、または、「鹿角砦」の略として「鹿角」を挙げたかを解明するのが難しい。一方、『五国』では、一般的の「サカモギ」ではなく、「鹿角」をフランス語‘Abatis’の訳語として挙げ、説明文も池田手稿のままに挙げたのは、池田手稿から影響を受けている可能性があるのではないかとと思われる。

要するに、「水ヲ飲フ」、「兵学校」、「支柱」「鋼鉄」、「手簿」など一般的に使われているものの一致は、『五国』が池田手稿を参考にした証拠とまでは言い切れないが、「鹿角」「茵陳蒿」のような専門語、訳の説明文及び略語までの一致は、『五国』が池田手稿を参考にしたことの裏付けになると考えられる。

・ 影響を受けていると見られるもの

池田手稿では、‘Abandon’を、「委兵ノ罪状」で翻訳しているが、『五国』になると、「委兵罪」のような単語の形で記すようになっている。また、池田手稿では、‘Ablectes’を翻訳する時に、「戦争ノトキ選ヒ取ル羅馬コンシュル官ノ親衛兵」のような説明文で記している一方、『五国』になると、「戦時親衛兵」のような単語で述べるようになっており、「羅馬議政官ノ」という修飾成分を附注の中に記している。

このように、『五国』の日本語訳が池田手稿の日本語訳と類似しているが、池田手稿の訳よりより練られた場合に、『五国』の日本語訳が池田手稿から影響を受けていると見られる。この類に属するものは 103 件ある。その一部を表 2 に示す。

表 2 影響を受けていると見られるものの一部

No	見出しの フランス語	池田手稿 (1)	池田手稿 (2)	池田手稿 説明文	『五国』 (1)	『五国』 (2)	『五国』 説明文
21	Abandon	委兵ノ罪状	-	-	委兵罪	-	-
22	Ablectes	戦争ノトキ選ヒ 取ル羅馬コンシ ュル官ノ親衛兵	-	-	戦時親衛 兵	-	羅馬議政 官ノ
23	Abreuvoir	水飲場所	-	-	飲水場	-	-
24	Abri	安全ナル碇泊所	-	-	安全泊湾	-	-

25	Accolade	義勇社ニ入ル儀式	-	劍ノ脊ニ テ肩ヲ打 ツコト	入社儀式	-	義勇者ニ 入ル時劍 ノ脊ニテ 肩ヲ打ツ コト
26	Accourir	手綱ヲ引き縮メ ル	-	-	引縮スル	-	韁ヲ
27	A cheval!	馬ヲ乗り込ム	-	-	乗レ馬ニ	-	-
28	Adarque	モヲルノ劍	-	-	莫兒劍	-	-
29	Affût à ou de canon	加農砲架	-	-	加納砲架	-	-
30	Agiem-clich	波斯ノ劍	-	-	波斯刀	-	-
31	Aide	助ヶ手	-	-	助手	-	-
32	Alcohol	アルコール	酒精	-	酒精	-	-
33	Alliance défensive et offensive	攻守契約	-	-	攻守同盟	-	-
34	Allumelle	長細キ劍	-	-	細長劍	-	-
35	Archet	牽鑲ノ弓把	-	-	弓把	-	牽鑲ノ
36	Artillerie	砲兵	-	-	砲兵	大砲	-
37	Artillerie de réserve	豫備砲	-	-	豫備砲	豫備砲兵	-
38	Attaque de front	前面攻撃	-	-	正面攻撃	-	-
39	Aulne blanc	白赤楊	-	-	白色赤楊	-	-
40	Avant-mur	前壁	-	-	外壁	-	-

表 2 に示した池田手稿の日本語訳と、『五国』の日本語訳を対照すると、池田手稿の日本語訳では句で訳すものが多い。手稿の段階にあり、日本語訳は洗練さや正確さが欠いているところがある。一方、『五国』になると、語で訳すものが多くなる。『五国』の編者は池田手稿の内容に基づき、修正や加筆を加え、より練られた日本語で見出しのフランス語を訳したと見られる。

たとえば、21 番の‘Abandon’の日本語訳をみると、池田手稿では、「委兵ノ罪状」と、句で訳したのに対し、『五国』では、練られた語「委兵罪」と訳した。

また、22 番の‘Ablectes’について、池田手稿では「戦争ノトキ選ヒ取ル羅馬コンシュル官ノ親衛兵」と、説明文で訳したのに対して、『五国』では、「戦時新衛兵」と、語で訳したうえに、「羅馬議政官ノ」という説明を注に入れた。池田手稿の日本語訳をよく練って訳したと見られる。

なお、池田手稿に出た「コンシュル」という言葉は、‘consuls’の音訳である。見出しのフランス語には現れなかったが、下の二重下線部に示したように、ドイツ語・英語・オランダ語の対訳に現れている。

Ablectes, m. pl. (a.) – Auserlesene leibwache der
römischen Consuln in Kriegszeiten. – Guard of
the Roman consuls in time of war – Uit-
gekozen lijfwacht der Romeinsche consuls in
oorlogstijd.

戦時親衛兵 羅馬議政官ノ

(『五国』 p. 2)

『五国』の凡例によると、翻訳はフランス語を中心に行うというが、‘Ablectes’の日本語訳をみると、池田良輔が翻訳する段階で、翻訳底本のフランス語だけではなく、残りのドイツ語・英語・オランダ語も参考にして翻訳したと見られる。

そのほか、池田手稿の影響を受けながら、修正を加えたものも見られる。27 番の‘A cheval!’をみてみよう。池田手稿では「馬ヲ乗リ込ム」と訳したのに対し、『五国』では、命令形の「乗レ馬ニ」と訳した。‘A cheval!’の収録項目を下に示す。

A cheval! (com.) – Aufgesessen! – Mount! –
Stijg-op!

乗レ馬ニ

(『五国』 p. 6)

‘A cheval’の意味は「騎馬」である。‘A cheval’の後ろに‘(com.)’という術語注記が付いている。略語表で確認したところ、‘(com.)’は「号令語」の意味である。それに、フランス語、ドイツ語、英語、オランダ語の見出しに、いずれも感嘆符が付いているから、‘A cheval!’は号令語である。そこで、意味からみると、池田手稿の「馬ヲ乗り込ム」と『五国』の「乗レ馬ニ」はともに正しいが、設定された状況からみると、『五国』の訳のほうが適切であろう。このような修正が加えられたものは、ほかには「前面攻撃/正面攻撃」、「前壁/外壁」などある。

編者の西周の書いた序には、「是以翻譯之要。在譯字眼。以精確不可動之語」とある。読み下せば、「是ヲ以テ翻訳ノ要ハ字眼ヲ訳スニ在ル、精確ニシテ動カスベカラザル語ヲ以キル」である。池田手稿から影響を受けていると見られるものは、池田手稿の訳に基づき、西周の言った「字眼」⁶³を洗練したものと言ってよかろう。ただし、訳が誰によって修正され、決められたかについては、まだ不明である。現段階で考えられる辞書編集の合理的な流れは、まず、池田良輔のようなフランス語・ドイツ語に堪能であるメンバーが辞書を翻訳する。その後、編纂の総裁を務める西周のような翻訳のベテランが訳したものを修正するということである。

5.4 まとめ

本章では、池田手稿と『五国』との関係を検討した。池田手稿は『五国』の翻訳底本 Landolt(本編)に基づき、和歌山の洋学者池田良輔によって書写・翻訳されたものである。

池田手稿は A の部しかないため、『五国』との対照は A の部を中心に行った。対照の結果、『五国』は池田手稿から影響を受けていることが分かった。

対照した『五国』の日本語訳 810 件の中で、池田手稿から影響を受けていると見られるものは 681 件で、全体の 84.1%を占めている。その中では、池田手稿の日本語訳のまま採録をしたものが 578 件で、多数を占めている。そして、池田手稿の日本語訳に基づき、修正を加え、より練られた言葉で表すものが 103 件であった。

⁶³ 『日本国語大辞典』(第二版)によると、「字眼」というのは、詩文の中で、1 字の巧拙がその詩文の死活を決める、その主要な文字のことである。

6. 『五国』の収録項目

『五国』の収録項目はフランス語の ABC 順に並んでいる。そのため、フランス語が分からなければ、対応する日本語訳を調べるできない。『五国』に如何なる日本語訳を収録しているかを考察する時に、その全文のデータベースが必要になる。筆者は 2013 年度の北海道大学大学院文学研究科研究プロジェクト「人文学と社会」リサーチ・アシスタント(RA)の研究助成を受け、2013 年 4 月 1 日から 2014 年 3 月 31 日にかけての 1 年間で、北海道大学附属図書館文学研究科言語情報学講座に所蔵する『五国』に基づき、データベースを作成した。作成した『五国』のデータベースはデータ番号、術語注記、見出しのフランス語、日本語訳、フランス語括弧付き注記、日本語括弧付き注記、説明文とルビから構成される。『五国』の凡例に、辞書の翻訳はフランス語を中心に行われると示したため、今回、データ化したのは、本文の見出しのフランス語と、日本語訳の部分だけである。残りのドイツ語・英語・オランダ語のデータ化は、今後の課題とする。

本章では、このデータベースを利用し、『五国』の収録項目を詳細に検討し、如何なる特徴を持っているかを考察する。

6.1 『五国』の収録項目に関する先行研究

従来の研究の中で、『五国』の収録項目数の問題に答えたものは惣郷(1986)と信岡(2003)である。

惣郷(1986)では、『五国』について解題した最後に、「こうして参謀本部から『五国対照兵語字書』(約五、〇〇〇語、菊判・九九〇ページ、別巻付図一九八図)が発行された。」と述べる。

また、信岡(2003)では、『五国』の収録項目について、「1 頁当りのフランス語見出しがほぼ 15 語[句]なので、全体としてのフランス語見出し語[句]数は約 1 万 5 千、収録語[句]数は 4 か国合計約 6 万と見られる」と述べる。また、惣郷(1986)に記した 5,000 語について、信岡氏は「惣郷氏の記す五〇〇〇語は一桁誤っていると思われる」と記す。

ところが、『五国』の収録項目の数について惣郷(1986)と信岡(2003)の出した答えは両方とも概数であるため、『五国』に具体的な収録項目数については、まだ明らかにされていない。本章では、『五国』のデータベースを使ってこの問題を解明し、収録項目から『五

国』の特徴を検討する。

6.2 『五国』の収録項目

データベースを使って統計した結果、『五国』の収録項目は合計 13,304 件である。その中で、日本語訳付きの収録項目は 11,654 件であり、日本語訳の付いていない収録項目は 1,650 件である。

日本語訳付きの収録項目をみると、基本的に一つの見出し項目に付き、一つの日本語訳が附されているが、場合により、複数の日本語訳が附されている収録項目も見られる。一つの見出し項目に附される日本語訳は最大で四つある。日本語訳の数は述べ 11,817 件である。

同じ時期に出版された対訳辞書をみると、『英和対訳袖珍辞書』（堀達之助, 1869）の収録語彙は 35,000 語であり、『英和字彙：附音挿図』（柴田昌吉・子安峻, 1873）の収録語彙は 55,000 語である⁶⁴。これらの辞書と比べると、『五国』の収録項目は決して多いとは言えない。しかし、軍事分野の用語集の少ない明治初期からみると、『五国』には十分な語彙を収録していると言ってもよからう。

6.3 アルファベット配列からわかる『五国』の特徴

『五国』はフランス語の ABC 順に並んでいる。各アルファベットの部⁶⁵における収録状況および、収録項目を見るために、各レターの最初と最後のページ、収録項目、日本語訳付き項目及び、最初と最後の項目⁶⁶を示せば次のようになる。

A 部 pp. 1-84 (収録項目: 1,094 件、訳付き項目: 958 件)

Aabam, m. (mét.) — Aeltere benennung für blei.

鉛 古名

— Ancient denomination of lead. — Oude benaming voor lood.

⁶⁴ 国立国会図書館第 152 回常設展示のパンフレット「辞書を片手に世界へー近代デジタルライブラリーにみる明治の語学辞書」（作者不詳, 2008）による。

⁶⁵ 本論文では、アルファベットの各レターの部をそれぞれ「A 部」・「B 部」などと呼ぶことにする。

⁶⁶ W 部と X 部の収録項目はそれぞれ 2 件しかない。

Azote, m. — Stickstoff, m. — Azote, Nitrogen. —
Stikstof, f.

窒素

B 部 pp. 84-167 (収録項目 : 1, 137 件、訳付き項目 : 996 件)

Babord, m. (mar. et pont.) — Backbord, m. —
Larboard. — Bakboord, n.

トリカヂ
左舷

Buttoir, m. (m.d'a.) — Mitnehmer, m., Knagge, f.,
Führer, Treiber, m. — Catch, Driver, stop. —
Stootijzer, n.

撞角

C 部 pp. 167-318 (収録項目 : 2, 045 件、訳付き項目 : 1, 833 件)

Caban, m. (mar.) — Regenmantel, m. — Dread-
nought-coat with a hood. — Regenkap, m.

具帽雨衣 水夫ノ
用ユル

Czapka, m. — Czapka, m. — Lancer-cap. —
Czapka, f.

槍騎帽 鐵鎧利
兵ノ

D 部 pp. 318-356 (収録項目 : 524 件、訳付き項目 : 461 件)

Dague, f. (a.) — Daggert, Dolch, m. — Dird,
Poniard, Dagger. — Dolk, m.

三鋒短劍 古代騎
士ノ 六十七⁶⁷

⁶⁷ 「六十七」というのは、『附図』の六十七番目の附図のことである。

Dynamometre, m. — Kraftmesser, m. — Dyn-
amometer. — Dynamometer, Krachtmeter, m.

驗刀儀

E 部 pp. 356-425 (収録項目 : 932 件、訳付き項目 : 809 件)

Eau courante ou vive, f. — Fliessende Gewässer,
n. — Running water. — Loopend water, n.

流水

Extrême costière, f. (h.f.) syn. Costière de contre-
vent.

F 部 pp. 425-490 (収録項目 : 888 件、訳付き項目 : 771 件)

Fabrication de la poudre, etc, f. — Bereitung des
schiesspulvers. f. — Manufacture of gun-powder.
— Buskruidvervaardiging, f.

火藥製造

Fuyard, m. — Flüchtling, m. — Fugitive, Runa-
way. — Vlugteling, m.

逃亡人

G 部 pp. 490-530 (収録項目 : 562 件、訳付き項目 : 485 件)

Gabare, f. (mar.) — Gabarre, f. Transportschiff, n.
— Lighter, Transport. — Transportschip, n.

帆走運船

Gypse, m. — Gips, m. — Gypsum. Paris-plaster.
— Gips, n.

硫酸加爾基

H 部 pp. 530-554 (収録項目 : 329 件、訳付き項目 : 294 件)

Habillement, m. — Bekleidung, f. — Clothing, 被服
Dress. — Kleeding, f.

Hypostratège, m. (a.) — Griechischer General- 副將軍 希臘
lieutenant. — Grecian lieutenant-general. —
Grieksch luitenant-generaal.

I 部 pp. 554-563 (収録項目 : 113 件、訳付き項目 : 104 件)

Ichnographie, f. — Zeichnung, f. — Ichnography, 幾何水平圖 城郭
ground-plot. — grondteekening, f.

Itinéraire, m. — Marschtableau, n. — Itinerary, 行程記
Description of a march. — Marschtableau, n.
Itinéraire, m.

J 部 pp. 563-570 (収録項目 : 105 件、訳付き項目 : 84 件)

Jable, m. — Zarge, f. Gergel, m. — Notch, Groo- 底溝 桶ノ底板ヲ
嵌スル溝
ve, Croe, Crome. — Gergel, m.

Juz-bachi, m. — Türkischer Hauptmann. — 大尉 土耳其
Turkish captain. — Turksche kapitein

K 部 pp. 570-572 (収録項目 : 24 件、訳付き項目 : 24 件)

Kabbate, m. (a.) — Kriegskleid der Griechen. —

軍衣 海軍

Military clothing of the Greeks. — Oorlogskleed

Der Griechen.

Kurtka, m. (a.) — Gallarock der Lanzenreiter. —

槍騎衫 海軍

Lancer's dress-jacket. — Kurtka, f. Lanciersrok.

L 部 pp. 572-603 (収録項目 : 425 件、訳付き項目 : 376 件)

Labarum, m. (a.) — Fahne der römischen kaiser.

親征纛 海軍

— Imperial roman standard. — Romeinsche

keizerlijke standaard.

Lutter, v. — Ringen. — To wrestle. — Worstelen.

格闘スル

M 部 pp. 603-666 (収録項目 : 841 件、訳付き項目 : 751 件)

Macas, m. — Reckhammer, Zainhammer, m. —

揲鐵大鎚

Forge-hammer. — Rekhamer, m.

Myriarque, m. (a.) — Befehlshaber von zehn tau-

萬總

send Mann. — Chief of then thousand man. —

Hoofdman over tienduizend.

N 部 pp. 666-677 (収録項目 : 141 件、訳付き項目 : 128 件)

Nable, m. (mar.) — Pfropf, m. — Prop of a boat. 漏水孔栓
— Prop, m.

Nyctalopie, f. (vét.) — Tagblindheit, f. — Dag- 鴉目
blindheid, f.⁶⁸

O 部 pp. 677-695 (収録項目 : 244 件、訳付き項目 : 211 件)

Oasis, f. — Oase, f. — Oasis. — Oase, f. 沃地 沙漠中ノ

Oxygène, m. — Sauerstoff, m. — Oxygen. — 酸素
Zuurstof, f.

P 部 pp. 695-794 (収録項目 : 1,375 件、訳付き項目 : 1,190 件)

Pacha, m. — Pascha, m. Türkischer Gouverneur. 督撫 土耳其
— Pacha, Turkish governor. — Pacha, Turks-
che gouverneur.

Pyrotechnie militaire, f. (artif.) — Ernstfeuerwer- 軍用火工術
kereï, f. — Military pyrotechny. — Ernstvuur-
werkerij, f.

⁶⁸ 収録項目に英語の対訳が抜けている。

Q 部 pp. 795-800 (収録項目 : 80 件、訳付き項目 : 65 件)

Quadrillage, m. (m.d'a.) voy. Chien.

Quoailer, v. (man.) — Mit dem Schweife wedeln.

尾ヲ掉ル

— To switch the tail in mounting. — Met den
staart slaan.

R 部 pp. 801-849 (収録項目 : 667 件、訳付き項目 : 585 件)

Rabaisser, v. (les hanches d'un cheval) (man.) — Ein

低下スル(馬腰ヲ)

Pferd auf die Hanken setzen. — To set down a
horse, throw him upon his haunches. — De heu-
pen van een paard nederbuigen.

Rustine, f. (h.f.) voy. Haut-fourneau.

S 部 pp. 849-894 (収録項目 : 634 件、訳付き項目 : 564 件)

Sable, m. — Sand, m. — Sand. — Zand, m.

砂

Système percutant, m. (art.) — Percussionssystem,

雷管式

n. — Percussion-system. — Percussiestelsel, n.

T 部 pp. 895-944 (収録項目 : 723 件、訳付き項目 : 564 件)

T en fer, (de la prolonge) (art.) syn. Clef.

Typhon, m. (mar.) — Typhon, m. — Typhoon.
— Typhon, m.

大風 漢土大風ノ
轉音ナリ

U 部 pp. 945-946 (収録項目 : 17 件、訳付き項目 : 17 件)

Ulan, m. (cav.) — Uhlane, Lanzenreiter, m. —
Ulan. — Ulaan, m.

鎗騎兵

Utinet, m. — Bodenhammer, m. — Small cooper's
mallet. — Houten hamertje, n.

桶工小槌

V 部 pp. 947-973 (収録項目 : 370 件、訳付き項目 : 315 件)

Vacant, adj. — Vacant. — Vacant. — Vakant,
Open, Onvervuld.

闕員ノ

Vulve, f. (vét) — Scham, f. Wurf, m. — Sheath,
Vagina, — Scheede, f.

陰門

W 部 p. 973 (収録項目 : 2 件、訳付き項目 : 1 件)

Warnesture, f. (a.) syn. Garnison.

Wurst, m. (art.) — Wurst, f. — Ammunition-
waggon. — Wurst, m.

輕便彈藥車

X 部 p. 974 (収録項目 : 2 件、訳付き項目 : 2 件)

Xénagie, f. (a.) — Abtheilung der griechischen
phalanx. — Division of the Grecian phalanx. —

大隊 希臘輕甲歩兵五百十二
人重甲歩兵ノ方團ニ同
シ

Xyèle, f. (a.) — Krümmer Säbel. — Curb-sword.
— Kromme sable.

彎劍

Y 部 pp. 974-975 (収録項目 : 16 件、訳付き項目 : 14 件)

Yacht, m. (mar.) — Jacht, f. — Yacht. — Jagt,
n.

畫舫

Yuz-bachi, m. — Türkischer Hauptmann. —
Turkish captain. — Turksche kapitein.

百總 土耳其
ノ

Z 部 pp. 976-977 (収録項目 : 14 件、訳付き項目 : 13 件)

Zagaie, f. — Zagaye, f. — Sort of javelin. — Soort
van werpspies

鋸齒擲鎗

Zouaves, m. pl. — Zouaven, m. pl. — Zouaves. —
Zouaven, m. pl.

蘇阿貌兵

『五国』の収録項目はフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語の順に記されており、その後ろに日本語訳が附されている。日本語訳は漢字とカタカナで表記されている。「羅馬」・「土耳其」・「蘇阿貌」のような国名・地名に二重下線が施されている。

収録項目の中には、「大尉」、「軍衣」、「火薬製造」、「輕装兵」のような軍事用語ばかりではなく、「鉛」、「被服」、「酸素」、「大風」のような一般用語も収録されている。

また、日本語訳の中に、「轟」⁶⁹、「迯」⁷⁰のような現在日本語ではめったに使わない漢字も見られる。

各アルファベットの部における収録項目の数をみると、1,000項目を超えた部はA部、B部、C部、P部である。それらの中で収録項目の最も多いのはC部であり、2,045項目あり、全体の15.37%を占めている。100項目以下の部はK部・U部・W部・X部・Y部・Z部である。中に収録項目の最も少ないのはW部とX部で、両方とも2項目しかない。

『五国』とほぼ同じ時期に出版された仏和辞書『仏語明要』（村上英俊, 1864）に35,021件の収録項目があるのに対し、『五国』は13,304件にとどまる⁷¹。各アルファベットの部における収録項目の占める割合みると、両者は非常に似ていると言えよう⁷²。対照の結果を下の表3に示す。

表3 『五国』と『仏語明要』の収録項目

部	『五国』		『仏和明要』	
	収録項目数	%	収録項目数	%
A	1,094	8.22%	2,703	7.72%
B	1,137	8.55%	1,873	5.35%
C	2,045	15.37%	4,255	12.15%
D	524	3.94%	2,415	6.90%
E	932	7.01%	2,740	7.82%
F	888	6.67%	1,598	4.56%
G	562	4.22%	1,296	3.70%
H	329	2.47%	812	2.32%
I	113	0.85%	1,406	4.01%

⁶⁹ 『日本国語大辞典』（第二版）によると、「轟」は「とう」という。「旗棹の上端につけるやくの毛ヲたばねて垂れた威儀の飾り。これに旗をつけて轟の旗という」と解釈している。

⁷⁰ 「迯」は「逃」の異体字である。

⁷¹ 『仏語明要』の各部ににおける収録項目の数に関する情報は田中(2012)による。

⁷² 各部の占めている割合をみると、『五国』と『仏語明要』の間に、差異が若干あるが、収録項目数の多い部と、少ない部はほぼ一緒である。

J	105	0.79%	307	0.88%
K	24	0.18%	19	0.05%
L	425	3.19%	950	2.71%
M	841	6.32%	2,038	5.82%
N	141	1.06%	525	1.50%
O	244	1.83%	746	2.13%
P	1,375	10.34%	3,153	9.00%
Q	80	0.60%	223	0.64%
R	667	5.01%	2,558	7.30%
S	634	4.77%	2,438	6.96%
T	723	5.43%	1,774	5.07%
U	17	0.13%	136	0.39%
V	370	2.78%	967	2.76%
W	2	0.02%	11	0.03%
X	2	0.02%	12	0.03%
Y	16	0.12%	12	0.03%
Z	14	0.11%	54	0.15%
合計	13,304	100.00%	35,021	100.00%

6.4 術語注記を通して見た『五国』

『五国』ではその本文に入る前に、3 ページの略語表がある。その略語表の中には、‘adj.’(形詞)、『v.’(動詞)、『m.’(男性形)、『f.’(女性形)のような品詞に関する略語のように通常の辞書に用いられるものが見えるが、そのほかに、『art.’(砲兵科語)、『artif.’(火工)、『c.p.m.’(陸軍刑律語)、『cav.’(騎兵科語)、『com.’(号令語)、『esc.’(剣術語)のような軍事分野の専門術語の略語も記されている。本論文では、これらの専門術語の略語を「術語注記」と名付ける。『五国』に収録されている術語注記は合計 25 種類ある。術語注記は専門術語の見出しのフランス語の後ろに記されている。術語注記の付け方は翻訳底本の「Landolt (本編)」のフランス語編と、「Landolt (補遺)」のフランス語部に示された

内容に従っている。

データベースで術語表記を通して『五国』の収録項目を分類すると、術語注記付きのものと、術語注記の付いていないものに大別することができる。術語注記付きのものをさらに分類すると、‘art.’(砲兵科語)、『artif.』(火工)、『c.p.m.』(陸軍刑律語)のように 25 種類に分けることができる。分類の結果を次のページの表 4 に示す。

表 4 を見れば分かるように、『五国対照兵語字書』の名の通り、軍事に関連する専門術語が 7,375 件あり、全体の半分以上を占めている。術語注記の付いていない収録項目は 5,950 件で、全体の 44.7%を占めている。

術語注記付きの収録項目の中に、最も多いのが海軍語で、全体の 16.3%を占めている。砲兵科語は海軍語に続いて、10.2%で、第 2 位を占める。翻訳底本の書名 *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* を訳せば、「多言語海陸軍術語辞典」となるわけであり、海軍に関連する術語が多く収録されていることは当然のことであろう。また、辞書には「陸軍語」という分類が設けられておらず、「砲兵科語」、「騎兵科語」、「歩兵科語」、「坑兵語」のように、陸軍に関する術語を細分化して表している。

そして、術語注記の付いていないものは 44.7%で、全体の半分弱を占めている。中には、「隠處」、「學校」、「工場」のような、日常で使う一般語、「演習」、「軍服」、「參謀」のような、軍隊でよく使われる言葉で、軍事用語の中核とも言えるものや、「鹽酸」、「酸素」、「謠謨尼亞氣」、「黒檀」、「水松」、「茵蔯蒿」、「生鋼鐵」、「發條鋼」、「炭化鋼鐵」のような、軍事以外の分野に属する専門術語が見られる。

一方、術語注記が付いていないが、軍事分野の専門術語と見なすべきものも見られる。たとえば、『五国』に砲兵科語に属する‘Affût’(砲架)という収録項目がある。‘Affût’(砲架)の後ろに、‘Affût à la Moncrieff’(猛格里弗砲架)、『Affût à bloc ou à flèche』(木身砲架)のような、‘Affût’(砲架)の種類を表す収録項目が 27 件続く。しかし、それらの 27 件のうち、砲兵科語の術語注記付きのものは、‘Affût à la Moncrieff’(猛格里弗砲架)、『Affût à tubes』(風琴砲架)だけである。残りの‘Affût à bloc ou à flèche’(木身砲架)、『Affût à ou de canon』(加納砲架)などの収録項目 25 件には砲兵科語の術語注記が付いていない。

表4 『五国』の各分類の内訳

術語注記		項目数	計	%	計
術語注記付きのもの	art.	砲兵科語	1,353		10.2%
	artif.	火工	193		1.5%
	c.p.m.	陸軍刑律語	58		0.4%
	cav.	騎兵科語	90		0.7%
	com.	号令語	49		0.4%
	esc.	剣術語	31		0.2%
	fond.	鋳工語	99		0.7%
	fort.	築城術語	534		4.0%
	f.à.r.	反射炉語	17		0.1%
	h.f.	鎔鋳炉語	157		1.2%
	inf.	歩兵科語	17		0.1%
	m.d'a	造兵語	946		7.1%
	m.f.	蹄鉄術語	71	7,375	0.5%
	man.	調馬術語	142		1.1%
	mar.	海軍語	2174		16.3%
	mét.	鋳冶術語	32		0.2%
	min.	坑兵語	165		1.2%
	moul.	模型製造語	7		0.1%
	pont.	橋造兵語	148		1.1%
	pond.	火薬製造語	136		1.0%
	salp.	硝石製造語	29		0.2%
	sell.	鞍工語	170		1.3%
	tact.	戦術語	176		1.3%
	top.	地形学語	85		0.6%
	vet.	馬医術語	496		3.7%
術語注記の付いていないもの			5,950		44.7%
合計	重複を含む ⁷³		13,325		100.0%
	重複を除く		13,304		

⁷³ 砲兵科語でありながら、海軍語でもあるもののような、複数の術語注記の付く収録項目が21件ある。

同じ傾向が海軍語の‘Ancre’(錨)の関連する収録項目にも見られる。『五国』に海軍語の‘Ancre’(錨)の種類を表す収録項目が 21 件あるが、海軍語の術語注記付きのものが‘Ancre d'amarrage’、‘Ancre de bossoir’⁷⁴、‘Ancre sans bouée’(無標錨)の 3 件のみで、残りの‘Ancre d'affourche’(副錨)、『Ancre de flot’(満潮錨)などの収録項目 18 件には、術語注記が付いていない。

『五国』における軍事分野の専門術語と見なすべきものをみると、‘Affût’(砲架)、『Ancre’(錨)のようなパターンが多い。術語注記も上位語に付けられることが多く、上位語に対応する下位語には、付けられたり、付けられなかったりして、基準が曖昧である。

『五国』の術語注記の付け方はすべて翻訳底本の Landolt (本編) のフランス語編と、Landolt (補遺) のフランス語部に示された内容に従っている。先に示した砲兵科語の術語注記付きのものである‘Affût à la Moncrieff’(猛格里弗砲架)、『Affût à tubes’(風琴砲架)と、海軍語の術語注記付きのものである‘Ancre d'amarrage’、『Ancre de bossoir’、『Ancre sans bouée’(無標錨)はいずれも Landolt (補遺) のフランス語部に収録されているものである。第三章でも触れたように、『五国』の翻訳底本の Landolt (本編) は 1868 年に完成したもので、Landolt (補遺) は 1871 年に完成したものである。それに、Landolt (補遺) の一部は作者 Heinrich Mathias Friedrich Landolt の逝去で、別人によって編纂されたものである。従って、術語注記の付け方が違う理由はいろいろ考えられるが、翻訳底本の編纂時期や、編者の違いは、術語注記の基準が曖昧になってしまう理由の一つであろうと考えられる。

6.5 まとめ

本節では、『五国』のデータベースを作成し、『五国』の収録項目について総合的に考察を行った。

『五国』の収録項目は合計 13,304 件である。その中で、日本語訳付きの収録項目は 11,654 件であり、日本語訳の付いていない収録項目は 1,650 件である。日本語訳の数は延べ 11,817 件である。軍事分野の用語集の少ない明治初期に、『五国』には十分な語彙を収録していると思われる。

アルファベット順を通して『五国』をみると、A 部・B 部・C 部・P 部の収録項目は 1000

⁷⁴ ‘Ancre d'amarrage’、『Ancre de bossoir’の収録項目は‘Ancre d'amarrage, f. (mar.) syn. Auraie.’と‘Ancre de bossoir, f. (mar.) syn. Ancre de poste.’である。‘syn.’の付く項目であり、見出しのフランス語に対応するドイツ語・英語・オランダ語と日本語訳が記されていない。

件以上を超える。その中で、C 部の収録項目は 2,045 件で、最も多い部である。それに対し、収録項目の最も少ないのは W 部と X 部であり、両方とも 2 項目しかない。『五国』においての各アルファベットの部に占める割合は当時の仏和辞書とほぼ一緒である。収録項目をみると、『五国』には軍事用語はもちろん、軍隊生活を送るための一般的な生活用語も多く収録されている。翻訳する時に、日本語訳を漢字とカタカナで記している。

術語注記を通して『五国』をみると、術語注記の付いていないものと、術語注記の付いているものの二種類で『五国』を大別できる。軍事分野の辞書として、『五国』の収録項目の半分以上に術語注記が付いている。中には、海軍語と砲兵科語が多い。残りは術語注記の付いていない収録項目である。その中で、「演習」、「軍服」、「参謀」のような軍事分野の中核的な言葉、「隠處」、「學校」、「工場」のような一般語や、「鹽酸」、「酸素」、「諳謨尼亞氣」のような、軍事以外の分野に属する専門術語がある一方、術語注記は付いていないが、軍事分野の専門術語と見なすべきものもある。これらについては、さらなる検討が必要であると思われる。

7. 『五国』の翻訳特徴

『五国』の出版された明治期では、外国の先端的な軍事技術・戦略戦術などを日本に導入する際に、如何なる方法を用いて翻訳したか。本章では、『五国』の日本語訳を分析しながら、辞書の翻訳特徴を検討していきたい。

7.1 『五国』の翻訳特徴に関する資料と先行研究

日本初の西洋語からの本格的な翻訳書である『解体新書』（杉田玄白, 1774）の凡例によると、訳語には「翻訳」・「義訳」・「直訳」の3種類があるという。永嶋(1970)の言葉を引用して杉田玄白の3種類の訳語を解釈すると、「原語に対し、それと同じ指示物を指す受け入れ側言語の既存の語を用いるのが「翻訳」であり、受け入れ側言語に既存の言葉がなく、新しく訳語を案出するのが「義訳」であり、「直訳」とは今日でいう「音訳」に当たる。」⁷⁵になる。

また、大野(1984)では、音義面から翻訳を分類する。意味による翻訳の場合、即ち同義ないし類義の場合を「義訳」と呼び、語音による場合、即ち同音ないし類音の場合を「音訳」と呼ぶ。そして、「義訳」について、既存語を用いて翻訳するものを「義訳 A」、新しく訳語を作って翻訳するものを「義訳 B」と分類する。さらに、杉田玄白のいう「翻訳」・「義訳」・「直訳」をそれぞれ「義訳 A」・「義訳 B」・「音訳」に当てる。

それでは、『五国』の編者達は、外国の先端的な軍事技術・戦略戦術の言葉を日本語に翻訳する時に、如何なる方法に従っているか。編者西周によって書かれた序文には、辞書の翻訳について、次のような記述が見られる。

是以翻譯之要。在譯字眼。以精確不可動之語。而若他諸語。則據本語之法。而取意下譯也。

読み下し文： 是ヲ以テ翻譯ノ要ハ字眼ヲ譯スニ在ル、精確ニシテ動カスベカラザル語ヲ以キル。而シテ他ノ諸語ゴトキハ、則チ本語ノ法ニ據リテ、意ヲ

⁷⁵ 永嶋(1970), p. 15

取リテ訳ヲ下ス。

「意ヲ取リテ訳ヲ下ス」ということから、『五国』の編者達が取る翻訳方法は、杉田玄白の言う「翻訳」・「義訳」であり、大野(1984)の言う「義訳」であろう。ここでは、「意訳」とする。

また、編者の一人である室岡峻徳によって書かれた凡例では、辞書の翻訳方法について、次のように説かれている。

今所纂譯、本編及續編、共以佛語為主、故下譯字、亦專據佛國之定例、較獨英蘭之慣用、則或不允當、覽者諒焉、

読み下し文： 今纂譯スル所ノ本編及ビ續編ハ、共ニ佛語ヲ主トス、故ニ下ノ譯字ハ亦專ラ佛國ノ定例ニヨル、獨、英、蘭ノ慣用ニ較ベレバ則チ或ハ允當ナラズ、覽者諒セヨ。

また、室岡峻徳は意味の把握できない項目を翻訳する時に使う方法について、次のように述べている。

原語之義不詳、難下允當譯者、間不依常例而用音譯法、

読み下し文： 原語ノ義ガ不詳、允當ノ譯ヲ下シ難キ者ハ、間常例ニ依ラズ、音譯法ヲ用ヰル。

序や凡例の記述から、フランス語に基づいて翻訳すること、優先的に意識する方法を取ること、意味の把握できないものは音訳することなど、『五国』の翻訳方法の一部が窺える。

また、信岡(2003)では、「鰩那船」⁷⁶・「彌尼銃」⁷⁷などを挙げ、『五国』の音訳語はカタカナ表記ではなく、漢字で宛てて表すことを示す。また、この翻訳特徴について、信岡氏は「英語学者の永嶋大典氏は、洋学者には伝統的に「漢字コンプレックス」があり、特に江戸系(長崎系に対し)の学者にはともすれば無理にしてまでも漢字を用いたがる傾向が

⁷⁶ フランス語 ‘Barque longue’ の訳語で、「輕帆船」の意味である。

⁷⁷ フランス語 ‘Fusil minié’ の訳語である。江戸末期の輸入銃の一つ、「ミニエール銃」とも言う。

見られる」と述べており、この翻訳特徴は当時の「漢語崇拜熱」⁷⁸に関わっていると考えられている。

『五国』の序文・凡例や信岡(2003)の内容によって、『五国』の翻訳特徴が幾つか見えてくる。しかし、『五国』の収録項目を分析してみると、以上に示した翻訳特徴の他にも、幾つかの特徴が見られる。本節では、見出し項目と日本語との対応関係、日本語訳の表記及び、見出しのドイツ語・英語・オランダ語と日本語訳との関係の三つの方面から、『五国』の翻訳特徴について考察していく。

7.2 見出し項目と日本語訳の対応関係

7.2.1 見出し項目と日本語訳の対応関係の全体図

『五国』の本文は 977 ページあり、収録項目は合計 13,304 件ある。データベースを使って、『五国』の収録項目の見出しと日本語訳との対応関係を調べると、次の結果になる(表 5)。なお、日本語訳の付いているものは、その訳語の数により、1 訳から 4 訳まで区分する。

表 5 見出し項目と日本語訳の対応関係の全体図

	日本語訳が 付いていない	日本語訳付き				
		1 訳	2 訳	3 訳	4 訳	合計
項目数	1,650	11,499	148	6	1	13,304
%	12.40%	86.43%	1.11%	0.05%	0.01%	100.00%

表 5 をみれば分かるように、『五国』における見出し項目と日本語訳との対応関係は五つに分類できる。その中で、最も多いものは一つの見出し項目に一つの日本語訳が付くもので、11,499 件あり、全体の 86.43%を占めている。

2 番目に多いのは訳の付いていない項目で、1,650 件あり、全体の 12.40%を占めている。訳の付いていない項目はすべて‘syn.’、もしくは‘voy.’の表記付きの項目である。『五国』には、二つのフランス語を‘syn.’、或は‘voy.’で繋ぎ、同義関係であることを表す収録項目がある。この収録項目には、ドイツ語・英語・オランダ語は添えられず、日本語訳も省略される。『五国』における日本語訳の付いていない収録項目はすべて‘syn.’、もし

⁷⁸ 「漢語崇拜熱」という言い方は山田(1940)に見られる。(山田(1940), pp. 36-37)

くは ‘voy.’で繋ぐものである。

残りは一つの見出し項目に、複数の日本語訳の付くもので、計 155 件あり、全体の 1% ほどしか占めていない。一つの見出し項目に付く日本語訳は最大で 4 件である。

7.2.2 一つの収録項目に付き、一つの日本語訳を附する

表 5 に示した対応関係をみると、一つの見出し項目に、一つの日本語訳の付く収録項目が圧倒的に多く、『五国』の収録項目の 8 割強を占めている。従って、一つの見出し項目に、一つの日本語訳を附することは『五国』の翻訳特徴の一つであると言えよう。この翻訳方法を取った理由はさまざまに考えられるが、次に挙げる 2 点は理由の一部であると思われる。

まず、一つの収録項目に付き一つの日本語訳を附する翻訳方法は『五国』の翻訳底本の構成に関わっていると考えられる。

一つの言葉に必ず一つの意味しか持っていないとは限らない。見出しのフランス語が多義語である場合に、『五国』の編者達は、如何なる方法で複数の意味から一つだけを選択できたか。この理由は『五国』の翻訳底本を見ればわかる。

『五国』の翻訳底本はフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語の四ヶ国語の対訳辞書である。見出しのフランス語が多義語である場合に、複数の収録項目を設けて、それぞれの意味に対応するドイツ語・英語・オランダ語の訳を附して表すことが多い。つまり、底本における一つの収録項目の意味はある程度絞られていたわけである。『五国』の編者達は底本を翻訳する時に、見出しのフランス語が多義語であっても、残りのドイツ語・英語・オランダ語の対訳を参考にしながら、意味を限定して日本語訳を附することができる。たとえば、

Nable, m. (mar.) – Ppropf, m. – Prop of a boat.
– Prop, m.

漏水孔栓

(『五国』 p. 666)

Nable, m.(mar.) – Propfenloch, n. – Scuttle-
hole. – Propgat, n.

漏水孔

(『五国』 p. 667)

見出しのフランス語‘Nable’に、二つの意味がある。一つは「(小型船の底にたまった水を落とす) 水抜き穴、排水口」の意味で、もう一つは「水抜き穴の栓」の意味である⁷⁹。『五国』の翻訳底本 Landolt (本編) に、‘Nable’の収録項目が二つある。「水抜き穴の栓」の意味の‘Nable’を、ドイツ語の‘Propfenloch’、英語の‘Scuttlehole’とオランダ語の‘Propgat’と訳す一方、「排水口」の意味の‘Nable’を、ドイツ語の‘Pfropf’、英語の‘Prop of a boat’とオランダ語の‘Prop’と訳している。見出しのフランス語だけでは意味を判断することは難しいが、対訳のドイツ語、英語、オランダ語の内容を参考にしながら、意味が特定できるようになる。

そこで、一つの収録項目に付き、一つの日本語訳を附する翻訳方法が実現できた理由の一つは、翻訳底本における見出しのフランス語の意味がある程度狭められたからであると考えられる。

次に、一つの収録項目に付き一つの日本語訳を附する翻訳方法は『五国』の編纂のきっかけに関わっていると考えられる。

西周によって書かれた『五国』の序文に、編纂のきっかけについて、次のような記述が見られる。

若夫人各取諸胸臆。而創立譯字。則同語異譯。異語同譯。新舊雜出。讀者不知所適從。
..... (中略)及我陸軍省置參謀局也。夙有觀於此。欲撰定一書。以斷其紛錯。

読み下し文： 若シ夫レ人各々諸ノ胸臆キ取りテ譯字ヲ創立スレバ、則チ同語異譯、
異語同譯、新舊雜出シテ、讀者ハ適從スル所ヲ知ラズ。..... (中略)
我ガ陸軍省參謀局ヲ置クニ及ビ、夙ニ此レヲ觀ル有リ、一書ヲ撰定セン
ト欲シ。(此レヲ) 以テ其ノ紛錯ヲ斷タントス。

序文より、『五国』を編纂するきっかけの一つは軍事用語の紛錯を防ぐためであったことがわかる。惣郷(1986)によると、江戸期の各藩はフランス・イギリス・アメリカ・ドイツの各国兵制、武器をもち、こららの藩兵を受け継いだ明治陸軍には、まず兵語の統一・確立が急がれたという。『五国』の翻訳・編纂はこのような社会背景の中で発足した。一つの見出し項目に複数の訳語を付けると、不統一であった兵語にさらに混乱がまじる。従

⁷⁹ 『小学館ローベル仏和大辞典』(小学館ローベル仏和大辞典編集委員会,1988)による。

って、見出し項目と訳の一对一のような明確な対応関係は、紛錯を防ぎ、兵語を統一するための有効な方法であると考えられる。

7.2.3 一つの収録項目に付き、複数の日本語訳を附する

『五国』の翻訳は基本的に、一つの収録項目に付き一つの日本語訳を附することに従っている。しかし、表 5 に示したように、一つの収録項目に付き、複数の日本語訳を附する項目も 155 件あり、全体の 1% を占めている。たとえば、

Armée, f. – Heer, n. Armee, f. – Army, Host, 陸軍又軍
Troops, Force. – Leger, n. Armee, f.
(『五国』 p. 57)

上記の例では、見出しのフランス語‘Armée’を、「陸軍」と「軍」の二つの言葉で翻訳する。二つの日本語訳を小活字の「又」で繋ぐ。場合によっては、「、」で繋ぐものも見られる。

複数の日本語訳を附する収録項目の中に、‘Appel’を「呼号」・「点呼」と、‘Terre’を「土」・「地」と翻訳したように、同義または類義の日本語訳を附することが多い。これらの収録項目を分析してみると、状況がそれぞれ異なるため、一つの収録項目に付き一つの日本語訳を附するという基準に背き、複数の日本語訳を作る理由は今のところ分からない。但し、次に示す収録項目については、複数の日本語訳を附する理由がある程度理解できる。それぞれ説明する。

Acier brut, d’Allemagne, de tonnage ou naturel, 生鋼鐵、日耳曼鋼鐵、自然鋼
m. – Rohstahl, schmelzstahl, Natürlicher stahl,
Tonnenstahl, – Raw, Natural, German steel. –
Natuurlijk staal.
(『五国』 p. 7)

Aile droite ou gauche, f. (tact.) – Rechte oder 右翼又左翼

linke Flügel, m. – Right or left wing. –

Regter- of linkervleugel, m.

(『五国』 p. 20)

上に示したのは、見出しのフランス語に、並列関係にある複数の修飾成分があるものである。しかも、修飾成分の意味もそれぞれ異なっている。このような収録項目を翻訳する時に、修飾成分をそれぞれ翻訳することが多い。

たとえば、‘Acier brut, d’Allemagne, de tonnage ou naturel’を直訳すれば、「未加工の鋼鉄・ゲルマンの鋼鉄・樽詰めの鋼鉄・自然の鋼鉄」となる。「鋼鉄」を修飾する成分が四つあるため、『五国』では、「生鋼鉄」・「旦耳曼鋼鉄」・「自然鋼」のように、中の三つをそれぞれ翻訳している。

そして、‘Aile droite ou gauche’を直訳すれば、「右翼、左翼」の意味である。‘droite’と‘gauche’のような、異なる修飾成分があるため、『五国』では、「右翼」と「左翼」と翻訳した。

複数の日本語訳の付く収録項目 155 件の中には、以上に示した状況を反映したものが 33 項目ある。

次に、見出しのフランス語が多義語であるが、翻訳底本で、それぞれの意味に対応する収録項目を設けて表していない場合に、『五国』では複数の日本語を附して翻訳することが多い。

Artillerie, f. (art.) – Artillerie, f. Geschütz, n. –

砲兵_又大砲

Artillery, Ordnance. – Artillerie, f. Geschut, n.

(『五国』 p. 66)

フランスの見出し語‘Artillerie’を、「大砲」、「砲兵」、「攻撃手段」、「大口径のピストル」などと解釈できる⁸⁰。『五国』における‘Artillerie’に、砲兵科語の術語注記が付けられているため、その意味に当てはめるのは、「大砲」と「砲兵」であると考えられる。しかし、

⁸⁰ 『小学館ローベル仏和大辞典』(小学館ロベール仏和大辞典編集委員会,1988)による。

翻訳底本には、‘Artillerie’の収録項目は1件しかない。そこで、『五国』では、「大砲」と「砲兵」の二つの言葉で‘Artillerie’を翻訳した。同じような用例はほかには、「野砲／野砲兵」、「山砲／山砲兵」、「守衛／衛兵」、「哨所／哨兵」など、合計16件ある。

また、『五国』には1件しかないが、音訳する時に見出しのフランス語・ドイツ語・英語・オランダ語をすべて音訳して表す収録項目も見られる。次に示す。

Chlorure d’ammonium, m. – Salmiak, m. –

格呂兒諳莫扭母_又撒爾

Salmiac. – Salmoniac, m.

摸尼亞幾_又撒爾密亞機

(『五国』 p. 242)

この項目の意味は塩化アンモニウムである。訳の「格呂兒諳莫扭母」はフランス語の、「撒爾摸尼亞幾」はオランダ語の、「撒爾密亞機」はドイツ語と英語の音訳と見られる。

なお、見出しのフランス語の音訳語「格呂兒諳莫扭母」にある「格呂兒」は、1875年、陸軍文庫によって翻訳・出版された『化学読本』の第七巻に見られる。同書の29ページから34ページにわたって、「格呂兒」について紹介されている。『化学読本』はオランダ人グニングの著作が翻訳されたもので、前編14巻・附図1巻・後編6巻からなっている。序文を書いたのは陸軍少佐木村信卿である。第2章でも述べたように、木村信卿という人物は信岡(2003)によると、『五国』の編纂に関わっているという。

また、『五国』では「諳莫扭母」を‘ammonium’の音訳語として挙げているが、『日本国語大辞典』(第二版)では、‘アンモニウム’の一番古い用例として、1912年の『舶来語便覧』における記述「アンモニウム安母紐謨 Ammonium」が引用されている。1881年の『五国』における記述「諳莫扭母」は、1912年の『舶来語便覧』のより古い。

要するに、『五国』では、一つの収録項目に付き、複数の日本語訳を附することが見られるが、基本的には、一つの収録項目に付き一つの日本語訳を附している。この翻訳方法を取る理由はさまざまに考えられるが、底本の構造や、辞書の編集目的が理由の一部として挙げられる。

7.3 日本語訳の表記

7.3.1 分類

『五国』の収録項目 13,304 件の中で、日本語訳付きのものが 11,654 件ある。その中で、日本語訳が一つ付くものは 11,499 件、二つ付くものは 148 件、三つ付くものは 6 件、四つ付くものは 1 件で、『五国』にある日本語訳は計 11,817 件（延べ件数）である。

『五国』の日本語訳 11,817 件の中に、「軍紀」・「大本営」のような漢字で表すものや、「凹凸多キ」・「格闘スル」のような、漢字と仮名で表すものがある。本論文では、漢字で表すものを「漢字表記語」と呼び、漢字と仮名で表すものを「漢字・仮名まじり表記語」と呼ぶことにする。データベースで統計した結果、『五国』には漢字表記語が 10,325 件あり、漢字・仮名まじり表記語が 1,492 件ある。漢字表記語のほうが圧倒的多く、全体の 87.37%を占めている。

7.3.2 漢字表記語

『五国』の編者室岡峻徳は、その凡例で「原語之義不詳、難下允當譯者、間不依常例而用音譯法、」と述べている。つまり、原語の意味が把握できない場合に、『五国』では音訳で翻訳する方法を取る。『五国』の音訳語「酸化安質謨尼」⁸¹・「格呂兒酸」⁸²・「硫酸麻屈涅失亞」⁸³などをみると、仮名で発音を表すのではなく、漢字を当てて表している。また、「羅馬」・「匈牙利」・「土耳其」などの地名・国名も漢字で表記している。

音訳語を漢字で当てて表す傾向は、第四章において取り扱った池田手稿の訳と、『五国』の訳とを対照すれば、より明らかになると思われる。

池田手稿における日本語訳の中に、音訳した日本語訳は 35 件ある。そのうち、漢字を当てて翻訳したものが多数を占めており、30 件ある。残りの 5 件はカタカナで翻訳している。これらの 5 件の音訳語を『五国』で確認すると、いずれも漢字に直して表記するようになっている。

たとえば、‘Acier brescian fin’という収録項目がある。‘Brescian’はイタリアの都市ブレシアである。池田手稿では、‘Brescian’を「ブレスシャ」と音訳し、‘Acier brescian fin’を

⁸¹ 「酸化アンチモン」のことである。

⁸² 「塩素酸」のことである。

⁸³ 「硫酸マグネシア」のことである。

「ブレスシャ府ノ鋼鐵」と訳した。『五国』になると、「不勒薩鋼鐵」のように、カタカナで記された「ブレスシャ」を漢字表記の「不勒薩」に直した。

もう一例、‘Adarque’を見てみよう。池田手稿では‘Adarque’を「モラルノ劍」と訳した⁸⁴。モラルとはアフリカ北西部に住むイスラム教徒のことである。現在の言い方は「ムーア」である。一方、『五国』の訳をみると、カタカナで記された「モラルノ劍」を、漢字表記の「莫兒劍」で表している。

上に示した音訳語はあまり周知されていない地名であるため、池田手稿では、カタカナで音訳して表記した。『五国』になると、おそらくほかの編者によって修正され、漢字で表記されるようになった。池田手稿の日本語訳は草案の段階にあり、修正されることは珍しいことではない。カタカナ表記を漢字表記に修正したという点からみると、『五国』の翻訳には、漢字で翻訳する傾向があると言ってよからう。

漢字で翻訳する傾向は音訳語だけに見られる特徴ではなく、全体的に『五国』の日本語訳をみると、漢字で表記するものが圧倒的に多い。『五国』に収録されている日本語訳 11,817 件の中に、漢字表記語は 10,325 件あり、全体の 87.37%を占めている。

『五国』の 10,325 件の漢字表記語から、重複するものを除くと、9,295 件が残る。『五国』の異なり漢字表記語を字数別で分類すると、次のページの表 6 になる。

表 6 をみれば分かるように、『五国』における漢字表記語の 8 割以上は 2 字語・3 字語・4 字語の分類に集中している。『五国』と同じ年に出版された『哲学字彙』（井上哲次郎ら, 1881）と比べると、『哲学字彙』にある 9 割以上の語彙は 2 字語・3 字語・4 字語の分類に集中しており、『五国』より多いが、2 字語・3 字語・4 字語は専門用語の辞書に、重要な地位を占めていることが間違いないと言えよう⁸⁵。

2 字語・3 字語・4 字語の次に多いのは 5 字語・6 字語・7 字語・8 字語である。その中には、「諸謨尼亞氣」・「亞留婆尼亞人」・「炭酸麻屈涅失亞」⁸⁶・「格呂兒麻倔涅叟母」⁸⁷などの音訳語が見られる。

残りの 9 字語・10 字語・11 字語はすべて海軍語で、帆船の索具・操帆装置に関する言

⁸⁴ 『小学館仏和大辞典』（1988）と、フランス語の辞書 *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française* (1973) で調べたところ、‘Adarque’に関する収録項目がなかった。『五国』より前に出版された仏和辞書『仏語明要』（村上英俊, 1864）、『官許仏和辞典』（好樹堂, 1871）で調べても、関連する記載が見られない。池田手稿で‘Adarque’を「モラルノ劍」と訳したのは、‘Adarque’のドイツ語・英語・オランダ語の対訳‘Maurischer Säbel’・‘Moorish scimeter’・‘Moorisch zwaard」を参考にした可能性が高いと思われる。また、『五国』では‘Adarque’の英語の対訳を‘Moorish scimeter」と記したが、‘scimeter’は‘scimitar’の誤植であろう。

⁸⁵ 『哲学字彙』の漢字表記語の内訳は朱京偉 (2003) による (以下同)。

⁸⁶ 「炭酸マグネシア」のことである。

⁸⁷ 「炭酸マグネシウム」のことである。

葉である。例えば「前檣最下帆弓索操索」・「前檣最下帆下隅操帆索」・「後檣第二桅桅粹帆操帆索」などである。

しかし、『五国』における 2 字語・3 字語・4 字語の割合はそれぞれ、34.21%・28.32%・27.17%であるのに対して、『哲学字彙』における 2 字語・3 字語・4 字語の割合はそれぞれ、65.74%・15.31%・13.46%である。『五国』における 3 字語・4 字語の割合は『哲学字彙』に比べると高い値である。

表 6 『五国』の漢字表記語の内訳

字数	語彙数	%
1 字	324	3.49%
2 字	3,180	34.21%
3 字	2,632	28.32%
4 字	2,525	27.17%
5 字	442	4.76%
6 字	127	1.37%
7 字	45	0.48%
8 字	13	0.14%
9 字	5	0.05%
10 字	1	0.01%
11 字	1	0.01%
合計	9,295	100.00%

『五国』における 3 字語・4 字語の割合が高い理由の一つとして挙げられるのは、辞書には軍隊に関する武器・組織・官職の名称が多く収録されていることである。これらの名称は「後備兵」・「運送船」・「攻城砲」・「民兵長」のように、複合語の形で記されている。『五国』によく見られる複合語の造語成分及びその語例を次の表 7 にまとめておく。

表 7 『五国』によく使われている複合語の造語成分及びその語例

造語数	造語成分	語例
75	兵	擲槍兵、投石兵、後備兵、騎砲兵、歩砲兵
50～59	馬	曳行馬、不詳馬、喘息馬、良種馬、行李馬
	索	砲頭索、揚落索、横縛索、固定索、滑車索
40～49	船	運送船、爆弾船、護送船、快帆船、斯克那船
	砲	海岸砲、攻城砲、守城砲、予備砲、噶德林砲
	長	民兵長、大隊長、哨兵長、軍医長、火工長
	滑車	二重滑車、鉤錨滑車、開口滑車、附着滑車、半縛滑車
30～39	車	投石車、彈藥車、器具車、行李車、運砲車
	線	十字線、正中線、金属線、整列線、限界線
	火薬	綿火薬、細粒火薬、軍用火薬、地雷火薬、鳥銃火薬
	加納	爆弾加納、急報加納、野戦加納、青銅加納、内撃加納
20～29	隊	火箭隊、野砲隊、輕砲隊、騎兵隊、精選隊
	機	電気機、擲石機、伝信機、安全機、通気機
	室	士官室、地雷室、薬包室、銃身室、火工室
	大	大旗手、大支流、大装具、大將軍、大參謀
	術	造船術、築城術、測高術、攻城術、馬医術
	儀	測気儀、風位儀、觀星儀、舵向儀、晴雨儀
	軍	現役軍、外援軍、聯邦軍、共和軍、侵入軍
	銃	雷管銃、施條銃、直線銃、連発銃、歩兵銃
	照準	照準角、照準手、照準架、照準佐手、照準横木
	攻撃	四面攻撃、中央攻撃、前面攻撃、側面攻撃、正面攻撃

以上の考察から、『五国』の翻訳特徴の一つは、漢字表記語で翻訳することであると言えよう。それでは、漢字表記語で翻訳する傾向が強いのは何故であろうか。理由は様々あると思われるが、主なものを次に並べてみる。

まず、漢字の特徴に関係している。漢字は仮名と違い、表音兼表意の文字である。翻訳

する時に、表音兼表意の漢字は、仮名より広い用途がある。

それから、明治期の社会背景にも関係している。幕末においては、漢字の使用される範囲は広がっている。特に、蘭学者をはじめとする洋学者の翻訳書をみると、『解体新書』（杉田玄白, 1774）、『暦象新書』（志築忠雄, 1798-1802）などはいずれも漢語で書かれている。このような状況は明治期にも続く。当時の対訳辞書をみると、『附音挿図英和字彙』（柴田昌吉・子安峻, 1873）では、「久シク持テ居ル事」を「久持^{ナガモチ}」と、「譬ヘノ事ヲ図ニシタル物」を「譬画^{ハンジモノ}」と訳すような、強引に漢字語に仕立てたと見られるものが少なくない⁸⁸。このように漢字語で翻訳する傾向が強い状況については、山田(1940)・永嶋(1970)において、既に詳述されている。『五国』の編者達が翻訳に漢字表記語を多用することは、時代の特徴を反映しているとも言えよう。

ここまでの調査をまとめると、『五国』の翻訳は漢字表記語で翻訳する傾向が強い。軍事分野の専門辞書として、『五国』には軍隊に関する武器・組織・官職などの名称が大量に収録されているから、2字語のほかに、3字・4字の複合語も大きな割合を占めている。

7.3.3 漢字・仮名まじり表記語

『五国』の翻訳は漢字表記語で翻訳する傾向が強いとは言え、漢字・仮名まじり表記語は1,492件あり、全体の12.63%を占めている。これらの漢字・仮名まじり表記語には、如何なる特徴があるのだろうか。これらの漢字・仮名まじり表記語及び、それに対応する見出しのフランス語を調べた結果、次に示す四つの場合に、漢字・仮名まじり表記語で翻訳することが多いことがわかった。

<1> 見出しのフランス語の後ろに、‘v.’（動詞）が付く場合

Aller au plus près, v. (mar.) – Bei dem Winde
aufstechen. – To haul to the wind. – Bij den
wind opsteken.

風邊ニ転向スル

(『五国』 p. 26)

⁸⁸ 永嶋(1970), p.80

Lutter, v. – Ringen. – To wrestle. – Worstelen.

格闘スル

(『五国』 p. 603)

Numéroter, v. – Numeriren. – To number. –
Nummeren.

點號スル

(『五国』 p. 677)

Quitter le service, v. – Ausscheiden. – To retire
from the service. – De dienst verlaten.

兵役ヲ去ル

(『五国』 p. 800)

Quoailer, v. (man.) – Mit dem Schweife wedeln.
– To switch the tail in mounting. – Met den
staart slaan.

尾ヲ掉ル

(『五国』 p. 800)

<2> 見出しのフランス語の後ろに、‘adj.’ (形詞) が付く場合

Abattu, adj. – Marode. – Tired, Fatigued. –
Afgemat.

疲労シタル

(『五国』 p. 2)

Accidenté, adj. – Uneben, Unegal, Gebrochen. –
Rough, Undulating, Broken, Hilly. – Golvend,
Heuvelachtig.

凹凸多キ^{土地}

(『五国』 p. 5)

Arqué, adj. (mar.) – Mit einem Katzenrücken. – 弓曲ナル
Broken-backed. – Doorgezet.

(『五国』 p. 61)

Hyporictique, adj. – Vom unterirdischen Kriege. 地道戦ノ
– Of the subterranean war. – Van den onder-
aardschen oorlog.

(『五国』 p. 554)

Myope, adj. (vét.) – Kurzsichtig. – Short sighted. 近視眼ノ
– Bijziend.

(『五国』 p. 666)

<3> 見出しのフランス語の後ろに、‘adv.’ (副詞) が付く場合

A fleur d’eau, adv. (mar.) – Zwischen Wind und 水際ニ
Wasser. – Between wind and water. – Tus-
schen wind en water

(『五国』 p. 15)

Battu par la tempête, adv. (mar) – Rhedelos. – 颶ニ打レテ
Weather beaten. – Ontredderd.

(『五国』 p. 120)

En dessus, adv. – Oberschlägig. – Over shot. – 上ニテ
Bovenslags.

(『五国』 p. 386)

Hauteur de, adv. (A la.) (mar.) – Auf der höhe
von. – Lying off. – Op de hoogte van.

某地同緯度ニ

(『五国』 p. 543)

Non-activité de service, adv. (En) – Inactiv. –
Out of service. – Op non-activiteit.

非職ニテ

(『五国』 p. 676)

<4> 見出しのフランス語の後ろに、‘(com.)’ (号令語) が付く場合

Aux-armes! (com.) – In’s Gewehr! Heraus! –
To arms! Guard turn out! – In’t geweer!

執レ＝銃

(『五国』 p. 79)

Avant! (En) (com.) – Vorwärts! – Forward! –
Voorwaarts!

前へ

(『五国』 p. 80)

Écouvillonnez! (com.) – Wischt-aus! – Spunge!
– Wisch! Wisch uit!

掃滌セヨ

(『五国』 p. 368)

Gauche! (A) (com.) – Links-um! – To the left
face! – Links-on!

左へ向ケヨ

(『五国』 p. 502)

Portez vos armes! (com.) – Angefasst! – Shoul-
der-arms! Carry arms! – Schoudert het ge-

肩へ＝銃

weer!

(『五国』 p. 772)

<1>、<2>、<3>は見出しのフランス語の後ろに、品詞を表す‘v.’・‘adj.’・‘adv.’が付く場合である。つまり、見出しのフランス語が動詞・形詞・副詞である場合に、漢字・仮名まじり表記語で翻訳することが多く見られる。

<4>は見出しのフランス語の後ろに‘(com.)’という術語注記が付く場合である。‘com.’はフランス語‘Commandement’の略語で、「号令語」の意味である。号令語とは、文字通り、命令を下す時に使われる言葉のことである。

『五国』における‘(com.)’が付く収録項目 49 件の中で、訳の付いているものは 47 件である。これらの号令語を翻訳する時には、一般的に漢字表記語ではなく、動詞命令形・名詞文・動詞文などで翻訳される。また、上記の「執レ＝銃」、「肩へ＝銃」のような形で訳されることもある。

『五国』より前に出された軍隊の号令に関する書物『英式号令詞』(林百郎, 1869)、『軽歩兵程式・掌中号令詞大隊』(田辺良輔, 1870)、『運用号令抄』(海軍兵学寮, 1873)をみると、「執レ＝銃」、「肩へ＝銃」のように「＝」を使って、号令を表す方法が確認できた。『英式号令詞』の記述から、「＝」は示動令と発動令を繋ぎ、間を取ることを示す符号であると推定できる⁸⁹。

7.4 見出しのドイツ語・英語・オランダ語と日本語訳の関係

室岡峻徳の凡例では、『五国』の翻訳はフランス語を中心に行われたと示されているが、実際に収録項目や対応する訳をみると、見出しのドイツ語・英語・オランダ語が『五国』の日本語訳に関わっていることも少なくない。下記の用例を見てみよう。

Aigrefin, m. (a.) – Infanterie-officier. – Infantry

歩兵士官 古ノ

officer – Officier der infanterie.

(『五国』 p. 18)

⁸⁹ 『英式号令詞』(林百郎, 1869) に、「示動令ノ終ノ部ハ發動令ノ用意ノ知ラセニテ後ノ號令ト間ヲ置テ是ヲ區別ス即チ(後ロ右ニ＝旋レ)(早歩＝進メ)斯ノ如ク示動令ト發動令ノニノ區別アリト知ルヘシ」という説明が見られる。

Algarade, f. (a.) – Fingirter Angriff, m. – Sim-
ulated attack. – Schijnaanval, m.

イツハリセメ
陽 攻

(『五国』 p. 24)

Artifice, m. (artif.) – Kunstfeuer, Feuerwerk, n.
– Firework – Vuurwerk, n.

火 工

(『五国』 p. 65)

‘Aigrefin’は「詐欺師」・「いかさま師」の意味である。『五国』より前に出版された仏和辞書『仏語明要』(村上英俊, 1864)、『官許仏和辞典』(岡田好樹, 1871)では、‘Aigrefin’をそれぞれ「横逆ナル奴」・「狡猾ナル人」と訳されている。いずれの辞書にも「歩兵士官」の意味は収録されていない。一方、『五国』における‘Aigrefin’の収録項目をみると、残りのドイツ語‘Infanterie-officier」・英語‘Infantry officer」・オランダ語‘Officier der infanterie’はいずれも「歩兵士官」を指す。フランス語を中心に翻訳するという方針に従えば、

‘Aigrefin’を「詐欺師」・「いかさま師」と翻訳すべきであるが、『五国』では、‘Aigrefin’を「歩兵士官」と訳した。従って、翻訳の際に、『五国』の編者達は四ヶ国語を総合的に考えたうえで、軍事用語の辞書に相応しい訳語を選んだと考えられる。

次に、‘Algarade’の収録項目を見てみよう。‘Algarade’は一般的に「口論」と翻訳される。『仏語明要』では「悪口、仇敵」と訳され、『官許仏和辞典』では、「嘲弄、悪口」と訳される。『小学館ローベル仏和大辞典』(1988)で調べると、‘Algarade’には、「悪口」のほかに、「(軍隊の) 侵入、急撃」という軍隊に関する意味もある。しかし、「イツワリ」に似たような記述は見られない。その一方で、残りのドイツ語‘Fingirter Angriff」⁹⁰と、英語‘Simulated attack」、オランダ語‘Schijnaanval」をみると、いずれも「偽りの攻撃」の意味である。『五国』では、‘Algarade’を「悪口」・「侵入」ではなく、^{イツハリセメ}「陽 攻」と訳したのは、残りのドイツ語・英語・オランダ語の対訳を参考にした可能性が高いと考えられる。

それから、‘Artifice’の翻訳も同じく、ドイツ語・英語・オランダ語の対訳に影響を受

⁹⁰ 『五国』では‘Fingirter Angriff」と記したが、‘Fingirter’は‘Fingierter’の誤植であろう。

けていると見られる。‘Artifice’は「策略、ごまかし詐術、トリック」、「工夫、技巧、（芸術上の）技法」、「信号弾、閃火信号」などの意味を持っている。『仏語明要』では、「偽計、術、賢サ」と訳し、『官許仏和辞典』では、「巧、手術、偽術」と訳す。「火工」の意味と関連している訳語はない。しかし、『五国』におけるドイツ語・英語・オランダ語の対訳をみると、いずれも「火の仕事」の意味である。『五国』における日本語訳「火工」は‘Artifice’のドイツ語・英語・オランダ語の対訳から影響を受けていると見られる。

以上に示したように、『五国』の凡例では、フランス語を中心に翻訳を行うと示されているが、収録項目をみると、翻訳の時に、対訳のドイツ語・英語・オランダ語を参考にした痕跡が見られる。

そのほか、見出しのフランス語が多義語である場合にも、同じくドイツ語・英語・オランダ語を参考にした痕跡が見られる。

前述のように、『五国』の翻訳底本は四ヶ国語の対訳辞書であるため、見出しのフランス語が多義語である場合には、複数の収録項目を設け、それぞれの意味に対応するドイツ語・英語・オランダ語の訳を附して表す。『五国』の編者達は多義語のフランス語を翻訳する時に、対訳のドイツ語・英語・オランダ語を参考にしながら、複数の意味から相応しいものを選び、訳を附する。

Commandement, m. (fort.) — Ueberhöhung, f. —

臨臺 高地ヲ
言フ

Command. — Kommandement, m.

Commandement, m. (tact.) — Commandwort, n.

令詞

— Word of command. — Kommando, n.

(『五国』 p. 262)

Débouché, m. (fort.) — Ausgang, m. — Debouche,

出路 坑路
等ノ

Outlet, Issue. — Uitgang, m.

Débouché, m. (fort.) — Capacität, f. Fluthraum,

水眼 石橋
ノ

m. — Water-way. — Capaciteit, f.

(『五国』 p. 321)

Fonte, f. (fond.) — Guss, m. — Casting. — 鑄造

Goot, f.

Fonte, f. (sell.) — Pistolenholfter, Holfter, m. — 拳銃革鞘

Holster. — Pistoolhorster, m.

Fonte, f. — Giesseisen, n. — Cast-iron. — Gietij- 鑄鐵

zer, n.

Fonte, f. — Schmelzung, f. — Melting. — Smel- 鎔解

ting, f.

(『五国』 p. 459)

Nable, m. (mar.) — Pfropf, m. — Prop of a boat. 漏水孔栓

— Prop, m.

Nable, m.(mar.) — Propfenloch, n. — Scuttle- 漏水孔

hole. — Propgat, n.

(『五国』 p. 666)

‘Commandement’の収録項目に、見出しのフランス語の後ろにある術語注記が違うため、翻訳する時に、術語注記を経由し「臨臺」・「令詞」と区別した可能性が考えられる。しかし、残りの用例をみると、同じ術語注記の付いているものや、術語注記の付いていないものがある。このような場合に、残りのフランス語・英語・オランダ語の対訳を参考にしないと、意味を区別することが難しいと考えられる。

たとえば、多義語‘Fonte’には「溶けること」・「溶解」・「鑄造」・「鑄鉄」のような似ている複数の意味と、「フォント」・「(拳銃などを収めるための) 鞍の革ポケット」といった意

味が合計 12 件ある。『五国』における‘Fonte’の項目 4 件の中に、2 番目の‘Fonte’に「鞍工語」の専門術語の注記が付けられているので、「(拳銃などを収めるための) 鞍の革ポケット」の意味と判断できる。しかし、「鑄工語」の術語注記の付いている収録項目 1 件と、術語注記の付いていない収録項目 2 件が残っている。フランス語と術語注記だけで意味を判断することは難しい。

そこで、『五国』で「鑄工語」の‘Fonte’を「鑄造」と訳したのは、術語注記と、対訳のドイツ語‘Guss’・英語‘Casting’・オランダ語‘Goot’を総合的に参考にした可能性が高い。そして、術語注記の付いていない 2 件の‘Fonte’をそれぞれ「鑄鐵」・「鎔解」と訳したのも、後らのドイツ語・英語・オランダ語の対訳を経由し、意味を特定した可能性が考えられる。

すなわち、『五国』の編者は多義語のフランス語を翻訳する時に、専門術語の注記で意味を特定できることはあるが、専門術語の注記だけで意味が確認できない場合、同じ術語注記の付いている場合や、術語注記の付いていない場合に、併記されているドイツ語・英語・オランダ語を参考にして翻訳することがあると考えられる。

7.5 まとめ

本章では、『五国』の翻訳特徴について考察を行った。序文・凡例に示されているフランス語に基づいて翻訳すること、優先的に意識する方法を取ること、意味の把握できないものを音訳することなどの翻訳特徴の他には、『五国』は次のような翻訳特徴を持っている。

まず、『五国』の編者は収録項目を翻訳する時に、一つの収録項目に対して一つの日本語訳を附するという基準に従っていると見られる。この翻訳特徴は『五国』の翻訳底本の構造と、『五国』の編集目的に関わっていると考えられる。

次に、『五国』の編者は音訳する時に、カタカナで発音を表すことより、漢字で当てて発音を表す傾向が強いと見られる。『五国』の日本語訳の表記をみると、漢字表記語のほうが 9 割弱を占めている。漢字表記語で翻訳することは『五国』のもう一つの翻訳特徴であると言えよう。

さらに、『五国』の翻訳はフランス語だけではなく、対訳のドイツ語・英語・オランダ語も総合的に参考にしたと見られる。凡例によると、翻訳はフランス語を中心に行ったとするが、これまでの収録項目の分析から分かるように、翻訳する時に、対訳のドイツ語・英語・オランダ語は、意味の特定や補足としての役割を果たしているということが言える。

8. 『五国』の日本語訳「服務」

『五国』の日本語訳 11,817 件の中には、「衛戍」・「軍紀」・「陣地」といった軍隊ではよく使われているが、我々の日常生活ではあまり使われていない用語や、「鞍囊」・「鼻勒」・「石弾」といった時代や技術の進歩によって使われなくなる兵器・馬具の名称もある。それに対して、「死角」・「支柱」・「前衛」といった軍隊で使われているうちに、次第に一般化され、日本語として定着したものもある。

『五国』がその後の日本語に与えた影響について、朴(2010)では、『五国』の後に出版された『改正兵語辞書・独和对訳之部第一』(参謀本部, 1889)・『改正兵語辞書・独和对訳之部第二』(参謀本部, 1890)・『独和兵語辞書』(藤田治一・高田善次郎, 1899)・『独和兵語辞典』(藤井信吉, 1911)の4種の辞書が、『五国』から受けた影響を考察し、『五国』の訳語の一部はこれらの辞書へ影響を与えていることを解明している。

朴(2010)の研究によって、軍事分野における『五国』の位置づけが一部明らかになったと思われる。筆者は『五国』のデータベースを作成する時に、辞書に収録されている日本語訳の中に、現代日本語だけではなく、明治期における日中両国の語彙交流で中国語に流入し、影響をもたらした言葉が多くあることに気付いた。しかし、管見の限りでは、『五国』が現代日本語に如何なる影響をもたらしたかについての研究はまだ少ない。本章では、日中両言語にも影響をもたらしたと見られる『五国』にある日本語訳「服務」を例に、日中語彙交流の視点から、「服務」の日本語における誕生と発展や、中国語における流入と受容などの一連の問題を検討し、日中両言語における『五国』の位置づけを試みる。

8.1 問題提起

「服務」という言葉は中国語では、「為人民服務」・「服務員」・「服務業」・「服務態度」のように様々な形で使われている。しかし、日本語では、「服務規律」・「服務規則」の形で公文書の中に見られるが、日常生活で使われることは少ない。

中国語の「服務」の起源について、『現代漢語外来詞研究』(高名凱・劉正琰, 1958)は、日本語固有語からの借用された言葉⁹¹とする。その後の『漢語外来詞詞典』(高名凱・劉

⁹¹ 「日本語固有語」という言い方は筆者の翻訳である。その意味は欧米の語彙を訳すために造った訳語のことではなく、日本語で元々使用されている語彙のことである。原文に「純粹日語(即日語原有

正埜, 1984)でも、「服務」が日本語起源であると明記している⁹²。つまり、中国では「服務」を日本語から中国語へ流入した言葉と認められている。しかし、日中両言語における「服務」の使用状況は対照的で、日本語ではあまり使われていないのに対し、中国語では HSK の甲級語彙⁹³に収録され、頻繁に使われていることがわかる。日本で造られたとされる「服務」が日中両言語で異なる展開を遂げたのは何故であろうか。この問題を解明するためには、「服務」という言葉の日本語における出現と発展や、中国語における流入と受容を検討する必要がある。本章ではこれらの問題について論じて、『五国』に収録されている語彙が近代日中両言語に与える影響を探ってみる。

8.2 「服務」についての先行研究

高名凱・劉正埜(1958)『現代漢語外来詞研究』にリストアップされている外来詞の数は 1,126 語である。そのうち、日本語借用語は 459 語であり、全体の三分之一を占めている。さらに、これらの日本語借用語を次の 3 種類に分類している。

(イ) 日本語固有語からきたもの

場所、服務、体験、退却、手続、取締、打消… 91 語

(ロ) 古典中国語からきたもの(日本人により新たな意味が付与されている)

文学、分析、演説、博士、封建、法律、経済… 67 語

(ハ) 近代訳語からきたもの

美化、調整、抽象、動員、議会、軍事、法人… 301 語

この分類は訳語であるかどうかで、日本語借用語を分類してから、訳語であるものをその翻訳方法で分けたものとなっている。「服務」は(イ)の日本語固有語からの借用語の類に挙げられている。『現代漢語外来詞研究』は世界各国語から中国語に流入した借用語を網羅的に整理して、分析したものであり、挙げられた言葉について用例を示し、具体的な分析をすることは行われていない。

的而非用漢字翻譯歐美詞彙成員的日語的詞)來源的現代漢語外來詞」としている。

⁹² 『漢語外来詞詞典』(高名凱・劉正埜, 1984), p. 108

⁹³ HSK とは世界で約 20 の国々や地域で実施されている中国語能力認定試験のことである。HSK の甲級語彙は初級中国語を把握するための最も基礎的な語彙である。

そして、『現代漢語外来詞研究』をもとにして、その中に収録されている外来語を補充して編集された中国最初の外来語辞典『漢語外来詞詞典』⁹⁴においても、「服務」を日本語起源であると記している。『漢語外来詞詞典』に収録されている日本語借用語は、一般的に見出し・中国語の発音・意味・語源・日本語の表示・日本語の発音の順番で示されている。日本語借用語が訳語である場合、訳される元の言葉の情報も示されている。たとえば、

经济 jīngjì ①在历史上一定时期的社会关系的总和.②国民经济的泛称. 源日 経済 keizai 〔古代汉语《宋史 王安石传》:‘朱熹尝论安石,以文章节行高一世,而尤以道德经济为己任.’意译英语 economy, economics〕⁹⁵

のように、「経済」が古代漢語に例があることを示し、訳された元の言葉が英語‘economy’、‘economics’であることを示すことによって、詳しい説明を施している。それに対して、「服務」の解釈は次の通りである。

服务 fúwù ①为国家机关,企事业等履行职务.②以各种形式为他人提供某种特殊使用价值的非生产性活动. 源日 服務 fukumu

このように、「服務」は日本語が起源であることが明記されているが、その後ろに、「意译英语」の情報は示されておらず、「服務」を訳語と見なしているかどうかは不明である。

また、日本側についても、近代の漢語を研究対象にしている『近代語の成立(語彙編)』(森岡健二,1969)、明治期の語彙を収録している『明治のことば辞典』(惣郷正明・飛田良文,1986)、明治、大正、昭和の新語を収録している『明治・大正・昭和の新語流行語辞典』(米川明彦,2002)のいずれにも、「服務」についての記述はない。また、『近代漢語研究文献目録』(李漢燮,2010)でも、「服務」に関する研究文献は見当たらない。

近代漢語の研究の中に、「服務」についての研究が見あたらなかったため、『日本国語大辞典』(第二版)で「服務」に関する情報を調べた。その結果、次のような記述が見られた。

服務【ふくむ】(名) 事務、業務に従事すること。

※海軍准士官下士任用進級条例(1896)九条

⁹⁴ 『漢語外来詞詞典』は各国語から中国語に入ってきた外来語を10,000語以上収録している。

⁹⁵ 『漢語外来詞詞典』(高名凱・劉正琰,1884) p.163

「海上勤務とは艦船に乗組み服務するを謂ふ」

※地方自治法（1947）一三八条・九

「分限及び懲戒、服務、研修及び勤務成績の評定」

「服務」の記述は、見出し・漢字表記・品詞・語釈・用例文からなっているが、語誌に関する内容は示されていない。用例の年代からみると、二例とも近代のもので、日本語で元々使用されている語彙についての記述は見当たらない。

また、宮田(1998)では『現代漢語外来詞研究』について、先駆的な業績と評価しているが、個々の語には異論が多い上に、起源の判定に英華・華英字典を利用した痕跡がないとしている。この点を考えると、英華・華英辞書類で「服務」を調べる必要がある。

そこで、「服務」に対応する英語‘Serve’, ‘Service’, ‘Duty’を『華英字典』(Morrison, 1815-1823)、『英華韻府歷階』(Williams, 1844)、『英華字典』(Lobscheid, 1866-1869)で調べた結果、『華英字典』(Morrison, 1815-1823)には、関連する収録がなかった。

一方、『英華韻府歷階』(Williams, 1844)に、‘Serve’と‘Duty’が収録されている。同書では‘Serve’を「事、服事、服侍、捧」と、‘Duty’を「餉銀、税、本分、己任」と訳している。

また、『英華字典』(Lobscheid, 1866-1869)には、‘Serve’, ‘Service’, ‘Duty’がいずれも収録されている。同書では‘Serve’を「事、服事、役、奉事、徭、仕、當、為事仔、為使喚人、當奴、事君」、‘Service’を「作工、事、仕、為官、事君、代勞、事上帝」、‘Duty’を「本分、職分、守本、安分、孝順者、服法者、分内之事、己任、責任、税、家事、家務」と訳している。「服事」、「服侍」のような「服」に関する言葉や、「家務」のような「務」に関する言葉が見られるが、「服務」という表記は収録されていない。

以上の先行研究からみると、中国側では、「服務」を日本語から借用した言葉と認めているが、日中両側では、「服務」の語誌についてはまだ十分に解明されていない。そこで、19世紀から20世紀初頭の資料を中心にして、「服務」の成立及びその変遷について考察を行う。

8.3 日本語における「服務」の誕生

8.3.1 日本の対訳辞書における「服務」

『日本国語大辞典』(第二版)における「服務」の用例は近代のものしか挙げられていないため、「服務」は近代に成立した言葉である可能性が考えられる。本節では、近代の対

訳辞書で「服務」の収録を調査する。

まず、オランダ語の辞書で、「服務」に対応するオランダ語‘dienen’, ‘dienst’を調べた。その調査結果を表 8 にまとめておく。

表 8 和蘭・蘭和辞書における‘dienen’, ‘dienst’の訳語

西暦	書名/編著者	見出し	語釈
1796	波留麻和解/稲村三伯・宇田川玄随・岡田甫説ら	dienen	事ル, 勤メル, 恩恵ヲ顕ス, 加勢スル, 援ケル, 軍ノ勤メ, 仕エル
		dienst	勤メ, 軍ノ勤メ, 神ノ勤メ, 恵ミ, 恵ム
1810	蘭語譯撰/奥平昌高	dienen	勤任
		dienst	(収録無)
1855	和蘭字彙/桂川甫周	dienen	仕ヘル, 用ヲ達シテ遣ル, 扶テ遣ル, 加勢シテ遣ル, 兵士ニナル
		dienst	勤メ又用達チ兵士ノ勤メ

表 8 から明らかなように、1790 年代・1810 年代・1850 年代の和蘭・蘭和辞書では‘dienen’, ‘dienst’を一般的に「勤メ」・「仕ヘル」とに訳す。そして、軍事の場合には、「軍ノ勤メ」と、宗教の場合には、「神ノ勤メ」と訳す。また、これらの辞書では「服務」で訳すことはなかったことが確認できる。

次に、英和・和英辞書における「服務」の収録も調べた。江戸末期から、明治初期までの英語の対訳辞書における‘Service’, ‘Serve’, ‘Duty’の訳語の調査結果を、年代順に並べ、表 9 にまとめる。

表 9 英和・和英辞書における‘Service’,‘Serve’,‘Duty’の訳語

西暦	辞書名	見出し	語釈
1830	英和・和英 語彙/メド ハースト	Service	Tsoo-to-me ツトメ
		Duty	(収録無)
		Duties	Oon z'ya-oo ウン ジヤウ 運税
1856	英和对訳袖 珍辞書/堀 達之助	Service	勤ヲ用立チ勤ムベキコト樹名
		Serve	仕ヘル用立チ助ケル取扱フ勤メル満足サセル 充分ニアル
		Duty	勤ム運上年貢
1867	和英語林集 成 初版/ ヘボン	Service	Tsutome,hōkō,yaku,yakume,yō,nenki.
		Serve	Tsutomeru,hōkō suru,tsukayeru.
		Duty	Tsutome;yakume;hōkō;shokusho;nin;hadz;atarimaye;szbeki- koto;unjyo;zei;zeigin.
1871	浅解英和辞 林/内田晋 斎	Service	ツトメ。ホウコウ。ヤク。ヤクメ。ヨウダチ。
		Serve	ツトメル。ホウコウスル。キウジヲスル。ツカヘル。シ タガフ。モテナス。ヨウニタツ。オガム。ウヤマウ。
		Duty	ツトメ、ヤクメ。ホウクソウ。シヨクシヤウ。ニン。ハ ヅ。アタリマヘ。スベキコト。ウンジヤウ。ゼイ。ゼイ ギン。
1872	英和对訳辞 書/荒井郁 之助	Service	勤メ。用立チ。勤ムベキコト。樹名
		Serve	仕エル。用立ツ。助ケル。取扱ウ
		Duty	勤ム運上年貢
1872	和英語林集 成 再版/ ヘボン	Service	Tsutome,hōkō,yaku,yakume,yō,nenki.
		Serve	Tsutomeru,hōkō suru,tsukayeru.
		Duty	Tsutome,yakume,hōkō,shokubun,subekikoto;unjō. On duty. tō - ban. Off-hi-ban
1873	附音挿図和 訳英字彙 初版/柴田 昌吉・子安 峻	Service	工作。職務。勤仕、事務。行為。辞職。服従。 拝礼。食器。
		Serve	事ル。勤ル。事スル。助ル。従ウ。満足サスル。管理フ。 執行フ。足ル。拝ム。
		Duty	職分。義理。従順。謙遜。恭敬。職掌。軍役。税。税銀。

1879	英華和訳字典/津田仙 [ほか]	Service	作工、事。ツトメ。シゴト。ハタラク。
		Serve	事、服事、役、奉事。ハウショクスル ツカヘル
		Duty	本分、職分。タウゼンノコト
1884	明治英和字典/尺振八 訳	Service	服事、僕役、職務、職任、勤労、教義、拝、礼拝、楽譜ノ名(祈祷用ノ)、軍務、兵役、利益、敬意、献立(食事ノ)、繩索用ノ品物[航]
		Serve	事スル、服事スル、服役スル、仕フル、助クル、代ル、代理スル、給仕スル(食事ノ) 臣僕トナル、服役スル、職ヲ盡ス、用ニ足ル、相應スル
		Duty	水分、義務、責任、職務、軍務、恭敬、敬意、税関、税

英和・和英辞書には、‘Service’、‘Serve’、‘Duty’に対応する訳語の中では、「ツトメル」・「ツカヘル」の訳語が一般的であるが、「服務」で訳されることはなかった。ただし、訳語の中に、「服従」・「服事」・「服役」といった「服」が使用されている訳語と、「事務」・「職務」・「軍務」のような「務」が使用されている訳語が見られる。これらの訳語は「服務」の成立と関係する可能性が考えられる。

8.3.2 軍事関連書における「服務」

『日本国語大辞典』における「服務」の最初の用例が海軍の条例によることからみると、「服務」の成立は軍隊との関連が考えられる。そこで、江戸末期から明治期にかけての軍事関連の論文・著作・辞書などで「服務」の収録を調べた。

軍事関連の論文・著作の調査では、明治前期・学術雑誌に載っていた軍事関連の論文・記事を使用した⁹⁶。そして、明治の軍制と緊密な関係を持っている西周の著作・翻訳作品と、西周が福沢諭吉らと一緒に創刊した『明六雑誌』も調査対象にした。軍事関連の辞書の調査では、『五国』（参謀本部, 1881）・『改正兵語辞書』（参謀本部, 1890）・『独和兵語辞書』（独逸語学雑誌社, 1899）・『和英英和兵語辞典』（英学新報社, 1905）・『英和和英兵語辞典』（英学新報社, 1907）・『英和陸海軍兵語辞典』（明誠館, 1910）といった明治期の軍事用語辞書を使った。調査の結果、現時点では「服務」に関する最初の記載は、『五国』

⁹⁶ 調査対象にしたのは『明治前期学術雑誌論文記事総覧』（渡辺正雄, 1990）の政治・経済の細目の、軍事項目グループに挙げられている軍事関連の論文・記事である。

である。

『五国』において「服務」の記述は合計 13 箇所ある。それぞれを次に示す。

Contrôle de service, m. – Dienstliste, Comman- 服務對照簿
Dirrolle, f. – Roster. – Dienstrooster, m.

(『五国』 p. 275)

Exemption de service, f. – Exemption, f. – Ex- 服務免除
emption. – Vrijstelling, f.

(『五国』 p. 424)

Service dans les places ou des gardes, m. – Garni- 守衛服務
sondienst, Wachtdienst. – Garrison-duty. –
Wachtdienst, Garnizoensdienst.

Service de semaine, m. – Aufsidhtsdienst. – Or- 週番服務
derly duty. – Weekdienst.

Service des avant-postes, m. – Sicherheitsdienst. 前哨服務
– Duty of the out-posts. – Veiligheidsdienst,
Voorpostendienst.

Service des bouches-à-feu, m. (art.) – Bedienung, 大砲服務
f. – Standing-gun drill. – Bediening, f.

Service des écuries, m. – Stalldienst. – Stable- 軍厩服務
Duty. – Staldienst.

Service en champagne, m. – Felddienst. – Field- 野戰服務
duties, Field-service. – Velddienst.

Service intérieur, m. – Innere Dienst. – Inter- 隊内服務

Ior economy. — Inwendige dienst.

Service sanitaire, m. — Gesundheitsdienst. — 衛生服務
Medical service. — Geneeskundige dienst.

Service vétérinaire, m. — Veterinairdienst. — 馬醫服務
Veterinary service. — Veterinaire dienst.

Servir une batterie, v. (art.) — Eine Batterie be- 砲隊ニ服務スル
dienen. — To serve a battery. — Eene batterij
Bedienen.

(『五国』 p. 875)

Tour de service, m. — Dienstreihe, f. — Spell. — 輪番服務
Dienstbeurt, f.

(『五国』 p. 926)

以上のように、『五国』における「服務」の収録は計 13 箇所ある。「砲隊ニ服務スル」を除き、残りは全部「～＋服務」、「服務＋～」の複合語である。「砲隊ニ服務スル」の場合、「服務」は‘Servir’の訳語として用いられているが、残りの複合語「服務對照簿」、「大砲服務」、「野戰服務」にある「服務」はすべて‘Service’の訳語として用いられる。

対訳辞書における‘Service’の訳語の調査によると、‘Service’を「服務」と訳す前例はない。『五国対照兵語字書』の出版された 1880 年代前後の対訳辞書では、‘Service’を「ツトメ」・「シゴト」と訳するのが一般的である。一般的な訳語を取らずに、「服務」と訳すのは『五国対照兵語字書』が最初であろうと思われる。

なお、『五国対照兵語字書』における「服務」の収録をみると、13 件のうち、12 件は複合語の構成要素として、残りの 1 件は句の成分として収録されている。「服務」は見出し語の訳語より、フレーズの訳語のほうによく使用されている。このことからみると、当時「服務」という言葉は独立性がまだ弱く、一過性の訳語として使用されている可能性も考えられる。

8.4 日本語における「服務」の変遷

8.4.1 軍事関連書における「服務」の使用

「服務」は‘Service’の訳語として、はじめて『五国』に収録されて以来、当時の軍事関連書にも使われるようになった。明治期の軍事分野の出版物の中に、書名あるいは目録に「服務」という言葉を使ったものをまとめると、次の表 10 になる⁹⁷。

表 10 明治期出版の軍事関連書における書名あるいは目録での「服務」の使用例⁹⁸

書名	刊行年	使用例
陸軍兵員必携	1882	衛戍服務
独逸参謀服務要領	1885	独逸参謀服務要領
参謀服務実施	1888	参謀服務実施
陸軍軍人服務必携	1890	陸軍軍人服務必携
官民必携兵事要書	1890	大隊区司令部服務規則
陸軍軍人服務必携	1892	陸軍軍人服務必携
軍隊学 兵卒教範	1895	衛戍服務規則
軍隊学 附・村田連発銃分解法	1896	衛戍服務規則
衛兵勤務	1896	衛戍服務一般ノ心得/伝令兵及号砲手服務ノ心得
軍事学教科書	1896	衛戍服務規則
歩兵須知	1897	予備後備兵及帰休兵服務中ノ心得
軍隊学 兵卒教範	1898	衛戍服務規則
和魂之友 古今兵学	1900	衛戍服務規則
陸軍経理学	1901	宣誓及服務紀律
最近軍隊入門	1902	衛戍及風紀衛兵服務の概要
和魂之友 東洋泰斗	1903	衛戍服務規則
参謀要略	1903	参謀服務要旨

⁹⁷ 調査対象は国立国会図書館の近代デジタルライブラリに収録されている軍事関連書(NDC 分類 39 国防・軍事)である。調査は 2011 年 6 月に行った。

⁹⁸ 目次の中で「服務」が 2 回以上使われた場合に、「/」で区切りをつけて表す。

歩兵須知	1903	衛戍及風紀衛兵服務ノ概要
台湾陸軍処務提要	1903	服務
軍人教科書	1905	衛戍服務規則摘要
改正最新式歩兵教範	1905	衛戍服務規則摘要
軍隊服務要覽	1907	衛戍服務ノ規定/風紀衛兵服務/守衛隊服務
歩兵教範	1907	衛戍服務規則摘要
衛兵勤務問答	1908	衛戍服務
下士上等兵学科問答	1908	衛戍服務規則ノ摘要
下士兵卒学科教育応用問答	1908	衛戍服務規則
歩兵教科書	1908	衛戍服務規則ノ摘要
四十一年式歩兵教科書	1908	衛戍及風紀衛兵服務ノ概要
歩兵須知	1908	衛戍及風紀衛兵服務ノ概要
騎兵須知	1908	衛戍服務及風紀衛兵勤務
野砲兵山砲兵須知	1908	衛戍服務及風紀衛兵勤務
兵當生活	1908	衛戍及風紀衛兵服務の概要
陸軍刑法・懲罰令・衛戍服務規則問答	1909	衛戍服務規則問答/衛戍服務/衛兵ノ服務
下士上等兵服務提要	1909	軍隊服務/衛戍服務及衛兵
下士兵卒精神訓戒集	1909	衛兵服務中ノ心得
国民必携通俗軍隊学便覧	1910	兵役服務者の心得
在郷軍人心得	1912	現役服務願/独立守備隊服務願
在郷軍人要覽	1912	独立守備隊服務願
憲兵須知 第1、2巻	1912	憲兵ノ服務及賞罰ニ関スル法規並ニ陸海軍ニ関スル法則ノ大要及雜則/憲兵ノ服務及賞罰ニ関スル法規

表 10 をみると、「服務」は『五国』に現れた翌年から『陸軍兵員必携』に複合語「衛戍服務」の形で使われている。その後、ほかの軍事関連書、特に軍隊の教科書・入門書・必携といった基礎的な軍事関連書に多用されている。よって、「服務」は『五国』に限られる言葉ではなく、軍事関連書にもよく見られる言葉であるといえよう。なお、『服務』の使用例から、単語より複合語の形でよく使用されていることがわかる。

「服務」は『五国』に収録された翌年から、一気に広がるように見えるが、その原因の一つとして、『五国』の出版の背景が挙げられる。『五国』は明治初期に出版された日本最初の軍事用語の対訳辞書である。当時、軍事に関連する書物の出版は民間の事業ではなく、最初に官製版として、日本の軍令を司った機関である参謀本部によって出版されなければならなかった。しかも、『五国』の序文で述べられているように、『五国』は当時の陸軍省が兵語の紛錯を断つために、編纂を発足したものである。即ち、明治初期の軍事分野において、『五国』は見本と言える辞書であり、それなりの影響力を持っている。従って、軍事関連書を出す時に、『五国』の収録語彙が使われやすかったと考えてよかろう。

8.4.2 軍事用語から一般化された「服務」

「服務」が『五国』に収録され、軍事関連の資料で多用されているうちに、軍事以外の分野でも使われるようになった。当時の月刊誌『太陽』(1895-1928)をテキスト化した「太陽コーパス」で、「服務」を検索したところ、用例が 21 件見つかった。1895 年 7 号の『太陽』では、「服務」の使用例が下記のようになる。

用例 1:

業成りて大學の教授を擔任し又醫學に従事して大に爲す所ありしも、如何せん服務僅に三年、天君の爲に壽をかさず...⁹⁹

用例 1 は「故梅錦之丞君の事蹟」の一節に出たものである。この文章は軍事分野との関連がなく、明治期の眼科医梅錦之丞の一生の事蹟を追憶したものである。文章の中の「服務」という言葉は、「職務に服する」という意味で単独に使用されている。

そのほか、当時の女性・子供向け雑誌などを対象とした「近代女性雑誌コーパス」でも「服務」を検索したところ、用例が 2 件見つかった。どちらも軍隊との関連がなく、「職

⁹⁹ 「故梅錦之丞君の事蹟」作者不詳、『太陽』1 巻 7 号(1895)， p. 142 下線部は筆者によるものである。

務に服する」の意味で使用されている。

用例 2:

卒業の後正當の事由なくして服務の義務を盡さざる者亦前項に同じ¹⁰⁰

用例 3:

其代り卒業生服務規則なる、餘計な文部省令が發布になつてゐて、卒業證書受領の日より基算して、全支給は五ケ年、一部は三ケ年、自給は二ケ年間は、育英の業に従事する義務がある。¹⁰¹

参考として、『朝日新聞』の 1881 年から 1926 年まで、記事の見出しに「服務」の使用している用例の調査結果を挙げる。調査の結果、「服務」の使用例は計 64 件あり、その内訳を年代別に示すと、1880 年代 28 例、1890 年代 6 例、1900 年代 12 例、1910 年代 14 例、1920 年代 4 例であった。1880 年代、すなわち「服務」が『五国』に収録された頃の使用例が最も多い。1880 年代における「服務」の具体的な使用例をまとめてみると、次のページの表 11 のようになる。

表 11 の中に、「服務」がいずれも「服務紀律」や、「服務規則」などの複合語の形で使われている。中に、最も多いのが「服務紀律」という言葉である。その頻度が高い理由は、1880 年代に、「官吏服務紀律」に関する記事が多く掲載されているからである。「官吏服務紀律」は明治期の官吏の服務上の義務を規定していた法律であり、1887 年發布されて以来、官吏の守るべき掟として、新聞に盛んに報道され、世間に知られた。1910 年に、森鷗外の書いた小説『あそび』の中にも、「官吏服務規律」と類似する「官吏服務規則」が使われている。

用例 4:

見た。風俗を壊乱する芸術と官吏服務規則とは調和の出来ようがないと云うのだらう¹⁰²

¹⁰⁰ 「学校」作者不詳、『女性雑誌』41 号(1894), p. 17

¹⁰¹ 「御茶の水評判記」作者不詳、『女学世界』3 号(1909), p. 44

¹⁰² 『森鷗外全集』第一巻(筑摩書房, 1965)

表 11 1880 年代『朝日新聞』の記事タイトルにおける「服務」の使用例

西暦	「服務」の使用例
1882	服務規律の趣旨徹底を促す(8/5) 行政官吏服務紀律の説明(8/8) 行政官吏服務紀律の説明(8/11) 行政官吏服務紀律の説明(8/18)
1884	徴兵令の予備・後備服務期間の欧州との比較(1/26)
1885	陸軍各部戦時服務規則要領(3/17) 陸軍各部戦時服務規則要領(3/22) 陸軍各部戦時服務規則要領(3/24) 陸軍各部戦時服務規則要領(3/26) 陸軍各部戦時服務規則要領(3/27) 町村役場用掛服務心得(5/12) 司法官吏服務規律(10/17)
1886	兵役服務期限減縮議案(6/27)
1887	改正官吏服務紀律(7/31) 官吏服務紀律(8/3) 官吏服務紀律(8/4) 官吏服務紀律(8/5) 官吏服務紀律(8/6) 官吏服務紀律(8/7) 服務紀律の貼示(8/31) 海軍省訓令第百三拾四号海軍軍医官服務通則改正(12/28)
1888	官吏服務規律(8/5) 知事の服務紀律(11/6) 陸軍軍医服務通則(11/17) 皇宮警察官服務規程(12/16) 服務通則(12/26)
1889	司獄官服務規則(11/14)
1890	看守服務練習の訓令(11/7)

以上より、「服務」が『五国対照兵語字書』に現れてから、軍隊の世界で広く使用されているうちに、軍隊以外の役所(官公庁)でも使われるようになり、さらに、雑誌・新聞・小説での使用を経て、世間に知られ、日本語に定着したという展開が考えられる。ただし、このことをきちんと証明するには軍隊以外の役所で「服務」に相当する別の言葉があったか否かを検討しておくことが必要であるので、ここでは見通しとして述べるにとどめる。

8.4.3 明治以降の国語辞書における「服務」

「服務」という言葉がはじめて国語辞書に見られるのは、1898 年出版の国語辞書『こ

とばの泉』(落合直文, 1898)である。『ことばの泉』では、「服務」について、次のように解釈している。

ふくむ 名 服務。職務に服役すること。

意味記述をみると、「軍務」ではなく、「職務」という言葉を使っているが、「服役する」という言葉をみると、軍隊との関わりが少し残っているように見える。本辞書の編者落合直文は 1884 年(明治 17 年)大学を中退し、軍隊で 3 年間勤めたことがある。辞書における「服務」の収録は編者の経歴と関係する可能性が考えられよう。

「服務」は『ことばの泉』での収録をはじめ、『辞林』(金沢庄三郎, 1907)、『大日本国語辞典』(上田万年, 1915)、『辞苑』(新村出, 1935)、『言林』(新村出, 1949)、『辞海』(金田一京助, 1952)などの国語辞書にも収録され、次第に定着するようになる。各国語辞書における「服務」の解釈をみると、元の「軍務に服すること」という意味は徐々に「職務に服すること」という意味に変わっていったことがわかる。ただし、各国語辞書の解釈や用例をみると、「服務」はやはり軍事や法律の公文書に使われている専門用語であると思われる。

8.5 中国語における「服務」の流入

8.5.1 『漢語大詞典』における「服務」の記述

『現代漢語外来詞研究』(高名凱・劉正琰, 1958)と、『漢語外来詞詞典』(高名凱・劉正琰, 1984)は両方とも「服務」を日本語からの借用語としているが、いつ、どのように中国語に流入したかについての詳しい情報は記されていない。中国語における「服務」の流入を明らかにするため、時代順で言葉の源流を反映している『漢語大詞典』(羅竹風ら, 1986-1994)で、「服務」を調べる。

『漢語大詞典』は最も権威のある漢語・漢文の大型辞書で、12 冊の本文と、1 冊の索引からなっている。収録項目はおよそ 370,000 件である。編輯委員会と編纂管理处は厳格な編集手順を設け、特に、例文の引用について、詳細な規定を設けた。一般的には、一つの語釈に例文を年代順に三つ並べる。例文を選別する際に、最初の例文として、できるだけ最も古いものを採用する¹⁰³。『漢語大詞典』では、「服務」について、次のように記され

¹⁰³ 『漢語大詞典』的例句運用」王安全、『辞書研究』6月号(1986), pp. 48-50

ている。

【服務】

- ① 为社会或他人利益办事。孙中山《民权主义》第三讲：“人人應該以服務為目的，不當以奪取為目的。”沙丁《还乡记》九：“随时都想给人一种印象：他是为人民服务的！”

- ② 犹任职。朱自清《回来杂记》：“回到北平来，回到原来服务的学校里，好些老工友见了面用地道的北平话道：‘您回来啦！’”邹韬奋《患难余生记》第二章：“后来他在上海《商报》，我也在上海《时事新报》服务，算是报界同人。”¹⁰⁴

日本語訳¹⁰⁵：

【服務】

- ① 社会や他人の利益の為に働く。孫中山『民権主義』第三講「人々は奪い取るのではなく、奉仕することを目的にすべきである。」沙丁『還郷記』九「常に他人に「あの人は人民の為に奉仕している」という印象を持たせたがっている。」
- ② 在職する。朱自清『回来雑記』「北平に戻り、かつて在職していた学校に戻り、「お帰りなさい」と、昔の用務員達に生粋の北平語で声をかけられた。」邹韬奋『患難余生記』第二章「その後、彼は上海の『商報』に在職し、私も上海の『時事新報』で働いていた。同じ新聞界の同僚だと言ってもいい。」

『漢語大詞典』における「服務」の解釈や例文を読むと、最も古い用例は孫中山(孫文)の『民権主義』での使用である。『民権主義』は孫文の代表作『三民主義』の一部で、1924年に完成したものである。孫文は19世紀の末から20世紀の始めにかけて日本に2度在留している¹⁰⁶。ちょうど軍事関連書物や新聞に「服務」が頻繁に使用されていた時期である。孫文は日本に在留している間に、書物や新聞で「服務」を目にしたであろうと思われる。前述のように、『漢語大詞典』の記述基準はできるだけ、最も古いものから年代順に用例を並べることから考えると、孫文の『民権主義』における「服務」の使用例は『漢語大詞

¹⁰⁴ 『漢語大詞典』第六卷， p. 1202 下線部は原文のままである。

¹⁰⁵ 本章における中国語資料及び中国語用例の日本語訳はすべて筆者によるものである。

¹⁰⁶ 孫文は2回留学に日本へ行った。1回目は1897年から1911年にかけての5年間、2回目は1913年から1916年にかけての4年間、日本に在留していた。

典』の編纂された時に、認められた最も古い用例である。ただし、筆者が清末民初の書物や辞書などを中心に、調査を行った結果、孫文の『民権主義』における使用例より、古いものが見つかった。

8.5.2 軍事関連書の訳本と「服務」の流入

「服務」の流入に関する詳しい情報を得るために、清末民初の書物や辞書などを中心に、調査を行った。書物の調査では、主に白話小説や、中国国家図書館で所蔵している民国時期の定期刊行物、図書、公文書などを調査対象にした。辞書の調査では、『新爾雅』（汪榮宝・葉瀾, 1903）、『漢訳新法律詞典』（徐用錫, 1904）、『中華大字典』（徐元誥, 1915）、『学生字典』（陸爾奎, 1915）、『国文成語辞典』（莊適, 1916）、『国音普通字典』（編者不詳, 1921）といった対訳辞書・国語辞書を調査対象にした。

管見の限りでは、中国で最初に「服務」という言葉を使用したのは、1914 年出版の日本書物の訳本『見習軍官脩養』（徐夢成・周繩武, 1914）である。『見習軍官脩養』は日本の軍事関連書『見習士官之修養』（帰帆子, 1908）を底本にして、徐夢成・周繩武によって翻訳されたものである。底本となる『見習士官之修養』は作者帰帆子が陸軍士官学校を卒業した後に、学校での所見を摘記したものであり、1908 年に東京厚生堂によって出版した。徐夢成・周繩武の翻訳した『見習軍官脩養』の第一編第二章のタイトルのところに、「服務上之注意」と記されている。翻訳底本の『見習士官之修養』と対照してみると、「服務上之注意」は翻訳底本の「服務上ノ注意」の直訳であることが分かる。ここの「服務」は「服役する」という意味で使用されている。本書における「服務」の用例は、今回調査した清末民初の文献の中で、「服務」という言葉が現れた最初の用例になっている。

日本の軍事関連書『見習士官之修養』はいかように中国に流入し、訳者徐夢成らが入手したかについては不明であるが、清末に日本に派遣された留学生によって、日本から持ち込んだ可能性が高いと思われる。当時、清政府は 19 世紀の末から日本の士官学校に留学生を派遣していた。この派遣は民国までも続けられ、合計 29 期、1600 人あまりの中国人留学生が日本に赴いて、士官学校で勉強した。帰帆子の『見習士官之修養』は士官学校で勉強している中国人留学生によって、日本から中国に持ち込まれたという過程が推測できよう。

なお、訳者徐夢成、周繩武は共に中国福建省の出身で、日本の軍事関連書を中心に、翻訳の仕事に携わっている。『見習士官之修養』のほかに、徐夢成は『改正野戦砲兵操典詳解』（日本軍事研究会, 1910）、『新兵馬術教育必携』（斉藤久輔, 1908）などの日本の軍事関

連書を翻訳し、周繩武は『軍隊服務要覧』（渥美勸八, 1907）を翻訳した。

8.6 中国語における「服務」の受容

8.6.1 民国時期における「服務」の使用

前述のように、「服務」は中国の HSK の甲級語彙に収録されるほど、日常に欠かすことのできない常用語である。軍事関連書で始めて中国語に登場する「服務」は如何なる発展を遂げて、中国語の常用語になったか。本節では、この問題を解明する。

まず、民国時期における「服務」の使用状況を見てみよう。中国国家図書館所蔵の民国出版物を中心に、書名や目次などに「服務」を使うものを検索したところ、432 件見つかった。その中の年代不明なもの 27 件を除き、各年代における「服務」の使用状況を **図 14** にまとめておく。

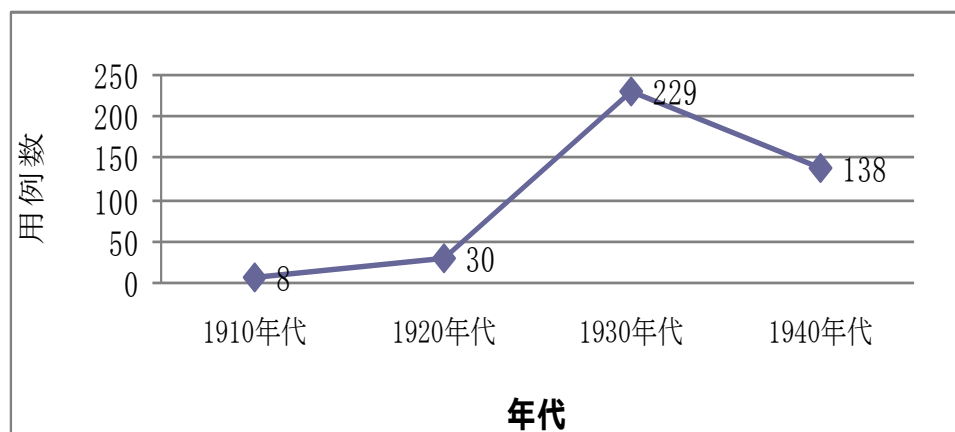


図 14 民国出版物における「服務」の使用

図 14 より、「服務」が中国語に流入した 19 世紀始めの頃には、用例が少なかったが、1930 年代になると、用例が急増し、229 件に上っている。1940 年代には、使用例の数が減ったが、当時、中国は戦乱状態で、出版物の数も激減した。当時の社会背景を考えると、138 件の用例は少なくないと言えよう。1930 年代、「服務」という言葉の使用が以前より、急増した理由を探てみると、出版物の数など様々な理由が考えられるが、前節に触れた孫文の使用も理由の一つとして挙げられる。

1916 年、日本から上海に戻ってきた中国の革命家孫文は、帝政復活を宣言し、皇帝に即位した袁世凱を討伐するため、1916 年 5 月 9 日の『民国日報』に「討袁宣言」という

文章を発表した。文章の中に、孫は野望を抱いている袁世凱を批判し、討伐の意志を表した。その文章の後半に「服務」が用いられている。

用例 5:

民國元首只有服務負責之可言而非有安富尊榮之可慕國民當共喻斯義¹⁰⁷

日本語訳:

民国の元首は奉仕し、責任を持つべき者であり、生活の裕福・名誉と地位を羨むべきものではない。国民はこれを知るべきである。

用例 5 における「服務」は元の日本語の意味「服役する、仕事に従事する」より、「奉仕する」という意味のほうがふさわしい。先に触れたとおり、孫文は 19 世紀の末から 20 世紀の始めにかけて、2 回日本に在留した。そして、それはちょうど軍事書物や新聞に「服務」を頻繁に使用していた時期であった。日本に在留した孫文は当然「服務」という言葉を目にしたであろうと思われる。その後、孫文の著作にも、「服務」の使用が見られる。

用例 6:

會長之義務 會長為全體之公僕，非為一部分或一人而服務，是故彼雖為一會之長，而非一會之主人翁也¹⁰⁸。

日本語訳:

会長の義務 会長は全会員の公僕であり、特定の一人または一部の人の為に奉仕するものではない。

用例 7: 人人應該以服務為目的不當以奪取為目的¹⁰⁹

日本語訳:

人々は奪い取るのではなく、奉仕することを目的にすべきである。

¹⁰⁷ 「討袁宣言」『孫中山全集』第二卷(2006), p. 283

¹⁰⁸ 「建国方略之三 民権初步(社会建設)」『孫中山全集』第六卷(2006), p. 425

¹⁰⁹ 「三民主義・民権主義」『孫中山全集』第九卷(2006), p. 299

用例 6 は孫文が 1917 年から 1919 年の間に書いた「建国方略之三 民権初步(社会建設)」によるものである。「服務」は「奉仕する」の意味で使われている。「建国方略之三 民権初步(社会建設)」には、「服務」の用例が幾つかあり、いずれも「奉仕する」の意味で使われている。

また、用例 7 は孫文が 1924 年に書いた「三民主義・民権主義」に出たものである。「三民主義」は、孫文が主張した中国革命の基本理論である。当時、孫文は「三民主義」を周知させるために、7 ヶ月間 16 回にわたって中国の各地で講演を行った。「服務」の一般化は当時頻繁に行われた孫文の講演と大きく関わっているのであろう。

「服務」は孫文の文章だけに見られる言葉ではなく、孫文が使ったことで、「服務」は一般化され、論文・小説・随筆、様々な分野にも見られるようになり、次第に中国語に定着するようになっていく。その意味も軍隊と

用例 8:

軍隊退伍後一律改為工人，同時修築全國道路，工竣後再分別服務於鐵路水利兩工程¹¹⁰

日本語訳：

部隊から退役した後に、すべて労働者とし、鉄道の建設に従事させる。竣工した後に、鉄道または水利の仕事に従事させる。

用例 9:

是則華僑機師回國服務意義之重大，吾人豈可不三熏三沐以歡迎之耶！¹¹¹

日本語訳：

華僑のパイロットが帰国して働くことには重大な意義があり、われわれは歓迎するべきではないでしょうか。

8.6.2 1949 年以降における「服務」の使用

民国時代に、「服務」は、革命指導者の孫文が用いたことで一般化され、様々な分野で使われるようになり、中国語に定着した。「服務」の使用例をみると、「社会や他人のため

¹¹⁰ 『兵工問題』(陸世益, 1925), p. 49

¹¹¹ 『若定廬随筆』(陳孝威, 1938), p. 195

に働く、奉仕する」という意味で使われることが多いが、現在、中国語に使われている「サービス」という意味はまだ見られない。それでは、「サービス」という意味はいつ、どのように生みだされたのか。この問題を解明するために、1949 年以降における「服務」の使用を調査した。

調査資料は 1949 年から 2000 年までの『人民日報』のデータである。刊行されている記事の中に、タイトルに「服務」の使っている用例を検索したところ、「服務」は非常に高い頻度で、新聞に載られていることがわかる。その使用状況を図 15 にまとめてみる。「服務」の使用状況と比較するために、同じ軍事分野の日本語借用語「動員」・「命令」の使用状況も一緒に示すことにする。

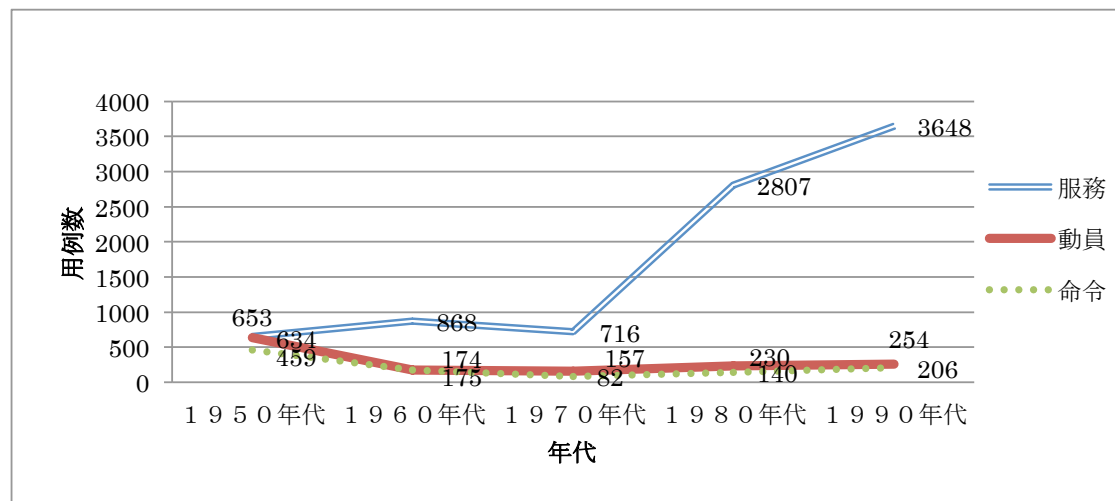


図 15 1949 年以降における「服務」・「動員」・「命令」の使用状況¹¹²

1949 年から 2000 年にかけての 50 年間に、「服務」の使用例は合計 8,692 例ある。図 15 から分かるように、使用例数は全体的に上昇する傾向にある。各年代の使用状況をみると、1950 年代から、1970 年代までの 30 年間にあまり変動がないが、1980 年代になると、使用例数が急増し、前年代の 4 倍近くになった。この傾向は 1990 年代まで続く。

同じ軍事分野の日本語借用語「動員」・「命令」と比べると、「服務」の用例数は「動員」・「命令」を大きく上回っている。「動員」・「命令」より、「服務」のほうが、使用頻度が高いと言えよう。また、1949 年から 2000 年にかけての 50 年間ににおける「服務」

¹¹² 1950 年代のデータに、1949 年のデータも含める。

・「動員」・「命令」の変動幅をみると、「動員」・「命令」はあまり変動せず安定しているのに対して、「服務」は1980年代から急増したことが見られる。

それでは、各年代における「服務」の用例を分析しながら、中国語における「服務」の受容状況をみることにする。まず、1970年代までの用例を見てみよう。

用例 10: 今天是到了同學們用實際行動去爲人民服務的時候了。¹¹³

日本語訳：

今日は諸君が実際の行動で人民のために奉仕する時になる。

用例 11: 工商業者要堅決靠攏黨，努力自我改造，一心一意爲社會主義服務。¹¹⁴

日本語訳：

商工業者は断固として党に歩み寄り、自己の改造に努力し、一意専心に社会主義のために奉仕すべきである。

用例 12: 福建省商業部門認真爲農業生產服務，做好供應工作，支援春耕生產。¹¹⁵

日本語訳：

福建省商業部門は農業生産の為に真剣に奉仕し、供給に取り組み、春耕を支援する。

用例 10・11・12 における「服務」はいずれも「為～服務」の形で使われている。1950年代から1970年代までの30年間における「服務」の用例の中に、「為～服務」の形がよく見られる。このような言い回しの多用は当時の指導者毛沢東の存在と大きく関わっていると思われる。

1944年9月8日に、毛沢東は警備員張思徳の追悼式で、「為人民服務」の題の講演をした。講演の中に、「因爲我們是爲人民服務的，所以，我們如果有缺點，就不怕別人批評指出。¹¹⁶」のように、「服務」を「社会や他人のために働く、奉仕する」の意味で使った。

¹¹³ 『人民日報』(1949/6/25)

¹¹⁴ 『人民日報』(1960/4/15)

¹¹⁵ 『人民日報』(1973/2/12)

¹¹⁶ 「為人民服務」『毛沢東集』第九卷(1970～1972)，p.111

日本語訳：我々は人民の為に奉仕する者であるため、欠点があれば、他人から批判されるのを恐れ

その後、毛沢東はほかの著書にも「服務」を頻繁に使った。

用例 13:

全心全意地爲人民服務，一刻也不脫離群衆；一切從人民的利益出發，而不是從個人或小集團的利益出發；嚮人民負責和嚮黨的領導機關負責的一至性；這些就是我們的出發點。¹¹⁷

日本語訳：

民衆との関係を一刻も断たずに、人民の為に誠心誠意に奉仕すること、個人または一部のグループの利益ではなく、すべてのことを人民の利益から出発すること、人民と党の組織に責任を持つこと、これが我々の着眼点である。

用例 14:

我們應該謙虛、謹慎、戒驕、戒躁、全心全意地爲人民服務。¹¹⁸

日本語訳：

我々は謙虚で慎み深く、驕らず焦らず、人民の為に誠心誠意に奉仕すべきである。

用例 13・14 は毛沢東によってかかれた文章に見られるものである。用例 13 は 1945 年の「論聯合政府」、用例 14 は同じく 1945 年の「兩個中国之命運」の一節である。毛沢東は自身の文章に「為人民服務」を頻繁に使った。毛沢東が多用したことで、「服務」は 1945 年に「中國共產黨人必須俱有全新全意为中國人民服務的精神」のような形で、中国共産党の規約に収録され、現在においても、中国共産党党内に徹底的に実行されている。特に、1949 年に、中華人民共和国が建国して以来、「為人民服務」はスローガンになったり、マスコミに報道されたりしていた。さらに、毛沢東の書いた文章「為人民服務」は小学校の教科書に収録されるようになった。この一連の経緯によって、「服務」は知らない人のいないほど中国全土に広がり、中国語に根を下ろした。

次に、1980 年代から 1990 年代までの 20 年間における「服務」の使用状況を見てみよ

ない。

¹¹⁷ 「論聯合政府」『毛沢東集』第九卷(1970～1972)， p. 183

¹¹⁸ 「兩個中國之命運」『毛沢東集』第九卷(1970～1972)， p. 213

う。1979 年、中国の指導者鄧小平は「対内改革、対外開放」、略して「改革開放」という政策を提言した。中国で 1949 年から実行していた計画経済を、市場経済に変え、第一次産業と第二次産業を発展させると同時に、小売業・サービス業などの第三次産業も発展させようとしていた。マスコミはこの政策に応え、力を入れて宣伝を行った。当時、新聞に次のような「服務」を使った用例が見られる。

用例 15:

陝西省政協常務委員、畫家方濟衆對我店服務態度和服務質量提出的批評意見是正確的，我們誠懇接受。¹¹⁹

日本語訳：

陝西省政治協會會議常務委員で、画家の方濟衆が本店のサービス態度とサービスクオリティに発した批評と意見は正しい。我々は心から受け入れる。

用例 16:

美菱集團把 1 9 9 5 年定爲企業管理年，舉行這次活動旨在強化售後服務，進一步提高企業管理水平。¹²⁰

日本語訳：

美菱グループは 1995 年を企業管理年に決めた。今回のイベントはアフターサービスのクオリティを高め、企業のマネジメントレベルを上げることを目的とする。

用例 15・16 における「服務」は「社会や他人のために働く、奉仕する」の意味ではなく、「第三次産業の働きぶり、サービス」の意味で使われている。

また、1980 年代から 1990 年代までの用例の中に、上記の用例に出ている「服務態度」・「服務質量」・「售後服務」のような、「服務＋～」、あるいは「～＋服務」の形式の複合語も数多く見られる。特に、「～＋服務」の形式の複合語は 1970 年代末に現れてから非常に高い頻度で使用されるようになり、1980 年代における「服務」の使用例の急増させた原因の一つとも考えられる。このパターンの「服務」は、「電話服務」（コールサービス）・「咨詢服務」（案内サービス）・「售後服務」（アフタサービス）・「一條龍服務」（タイア

¹¹⁹ 『人民日報』（1982/1/20）

¹²⁰ 『人民日報』（1995/3/27）

ップサービス)などのように、殆ど「サービス」の意味で、名詞・動詞・連語の後ろに付き、サービスの具体的な内容を表す。

1979 年の「改革開放」の政策により、計画経済を市場経済に転換し、第三次産業、特にサービス業は急速に発展し、新興の事業も次々と現れた。新しい事物には、それに対応する名称が求められているため、「サービス」の意味を持つ「服務」は、新興のサービス業の命名に重要な役割を果たしている。現在、「服務」は HSK の甲級語彙に収録されていることからわかるように、日常生活に欠かすことのできない常用語になっている。

8.7 まとめ

「服務」という言葉についての考察によると、「服務」は確かに日本語から中国語に流入した言葉である。日本側をみると、本格的な国語大辞典『日本国語大辞典』（第二版）における「服務」の初出例は、「海軍准士官下士任用進級条例」（1896）によるものであるが、結果的には、日本最初の軍事用語の対訳辞書『五国』における「服務」の収録のほうが早い。従って、『日本国語大辞典』（第二版）における「服務」の記述には、修正が必要であると思われる。『五国』では、「服務」は‘Service’の訳語として成立し、最初に軍事関連書に使われているが、徐々に一般化され、法律のような非軍事分野にも使われるようになる。但し、軍事用語として「服務」は、その軍事・法律の専門用語としての性質に制限され、使用頻度はあまり高くない。

一方、中国側をみると、「服務」は「軍務に服する」の意味で、日本の軍事関連書『見習士官之修養』（帰帆子, 1908）の翻訳書『見習軍官脩養』（徐夢成・周繩武, 1914）にはじめて見られるが、流入した当初はあまり使われていなかった。1920 年代になると、孫文が用いたことで、「服務」は「社会や他人のために働く、奉仕する」という意味で世間に知られる。その後、毛沢東は自身の文章において「服務」を「為人民服務」の言い回しで、さかんに使った。毛沢東が多用したことによって、「服務」は二度目の発展を迎え、「為人民服務」の形で中国全土に広がり、知らない人のいないほど、中国語に根を下ろした。さらに、1970 年代の末頃、当時の指導者鄧小平の「改革開放」の政策によって、発展した第三次産業とともに、第三次産業の働きぶり、いわゆる「サービス」の意味を持っている「服務」は、新聞に載らない日がないほど頻繁に使用され、三度目の発展を遂げた。現在、「服務」は HSK の甲級語彙に収録されるなど日常生活に欠かせない常用語になっている。

ここまで、「服務」の成立と変遷に関する事情を調査してきた。この調査において、「服務」の造語法と語構造などに関する考察はまだ不十分であるが、この問題をこれからより

深く考察する必要がある。しかし、「服務」は『五国』に収録されている言葉であること、軍隊で使われているうちに日本語に定着したこと、明治期における日中両国の語彙交流で中国語に流入し、影響を与えたこと、現在の中国語に欠かせない常用語になったことについては問題ないであろう。

9. 『五国』の2字漢語

— 『日本国語大辞典』における初出例との比較 —

前章における「服務」の調査では、『日本国語大辞典』（第二版）における記述に、「服務」に関する最も古い用例として、「海軍准士官下士任用進級条例」（1896）の例が挙げられているが、結果的には、1881年に出版された『五国』において、「服務」は既に‘Service’の訳語として挙げられている。従って、『日本国語大辞典』（第二版）における「服務」の初出例より、『五国』における「服務」の記述のほうが早いと言える。

『日本国語大辞典』は日本で最大規模の国語大辞典であり、日本語の研究に欠かせない最も基礎的な参考資料である。『日本国語大辞典』における用例は上代から現代まで、通時的に記されている。特に、2000年に出版された『日本国語大辞典』（第二版）（以下『日国』）では、平安時代から明治期までの日本漢文・漢語資料、奈良時代から江戸時代までの歴史資料、中世から近世にかけての口語を伝える資料、近世初期の俳諧、明治期の新聞・雑誌・翻訳語の資料などから用例を採集した。しかも、『日国』に収録されている用例に、殆ど成立年あるいは刊行年を入れたため、言葉の歩みが一目瞭然である¹²¹。従って、言葉の歴史を考察する時に、莫大な資料を後ろ盾にした『日国』は最も権威のある参考資料であろう。しかし、『日国』の编者たちが、一つの言葉に関する用例を収集する際に使った参考資料の数には、限りがあると思われる。そこで、「服務」のような、『五国』における記述は『日国』における初出例より早いという状況が現れる。

本章では、『日国』における『五国』の2字漢語の記述を調査する。特に、『五国』における記述が『日国』における初出例より早いものをまとめる。この調査によって、現在日本語に使われている『五国』の日本語訳はどの程度あるか、現在日本語における『五国』の役割は如何なるものであるかといった問題を解明することが可能になる。また、この調査で得られた結果は、今後『日国』における用例の追加・修正に関する材料ともなると考えられる。

¹²¹ 日国.NET 「日本国語大辞典第2版のご紹介」に基づく。
<http://www.nikkoku.net/introduction/tokusyoku.html> (2013/10/16)

9.1 調査方法

第5章に示したように、『五国』にある漢字表記語の異なり語数は9,295語である。字数別で『五国』の漢字表記語を分類した結果、2字漢字表記語が最も多く、全体の34.21%を占めており、3,180語ある。本節では、『五国』に多く見られる2字漢語を中心に、調査を行う。

本調査では、総合オンライン辞書・辞典サイト「JapanKnowledge」に公開されたオンライン版の『日国』を使い、本論文で用いる『五国』のデータと対照する¹²²。調査は、『日国』における収録項目と、『五国』における日本語訳が同語であるかどうかを検討することによって行う。『五国』の日本語訳11,817件の中に、ルビ付きのものは138件、全体の1%しか占めていない。そのため、ルビだけで、『五国』の日本語訳をすべて判断することは難しい。本調査では、ルビ付きのものに対して、ルビで示された発音が同じである上に、語形¹²³と語義と共に同じであるものを同語と判断する¹²⁴。ルビの付いていないものに対して、語形が同じである上に、語義も同じであるものを同語と判断する¹²⁵。

たとえば、「縄心」という言葉がある。『日国』における語義の記述は「江戸時代、検地の際に手心を加えること。実際より多少内輪に測量して、実面積と帳簿面積の間にそれだけの余裕を設けること。余歩（あまりぶ）。」であるが、『五国』では、‘Ame, f. (de cordages) – Kern, m. Herz, n. – Middle strand. – Hart, n.’の訳語として挙げられており、日本語訳「縄心」の上にルビが付いていない。フランス語を訳すと、「心線(ロープ)」になる。そこで、『日国』と『五国』における「縄心」は語形が同じであるが、語義が異なるため、別語と見なす。

¹²² JapanKnowledge 『日本国語大辞典』
<http://japanknowledge.com> (2013/10/16～2013/11/16)

¹²³ 語形の調査では、「鉄」と「鐵」、「齒」と「齒」、「対」と「對」のような新旧字体の差異は対象外である。

¹²⁴ 例えば、『五国』に「吃水」の収録項目がある。

Calaison, f. (mar.) – Tiefe, f. – Line of floating. フナアシ
吃水
– Diepgang, m.

フランス語の意味は「喫水」の意味である。

一方、『日国』に「吃水」の項目があり、「キッスイ」の発音で、「船舶が水上にあるとき、船体が沈む深さ、すなわち船体の最下部から水面までの垂直距離をいう。船首喫水、中央喫水、船尾喫水などがあり、わかりやすいように船首や船尾にメートル法またはフート法で高さを標示する。船脚（ふなあし）。入足（いりあし）。」の意味である。

語形と意味の面からみると、『五国』の「吃水」と、『日国』の「吃水」とは同語関係にある。しかし、『五国』の「吃水」に振られたルビは「フナアシ」で、『日国』の「吃水」に対応する発音は「キッスイ」である。発音が異なっているため、同語ではないと判断する。

¹²⁵ 語義の調査では、『日国』における言葉の記述に、複数の語義があり、その中の一つの意味が『五国』に記述された意味と同じである場合にも、同義であると見なす。

また、「野砲」という言葉をみると、『日国』では、「野戦砲の一種。師団の編制内で歩兵支援用に用いられる口径七五ないし一〇五ミリメートルの榴弾砲。砲兵の標準主力火砲。」と解釈している。一方、『五国』では、

Artillerie de campagne, f. (art.) – Feldartillerie,
Feldgeschütz. – Field artillery. – Veldartil-
lerie, Veldgeschut.

野砲_又野砲兵

(『五国』 p. 67)

のように、「野砲」をフランス語‘Artillerie de campagne’の訳語として挙げている。見出しのフランス語の後ろに、砲兵科語の術語注記‘(art.)’が付いているため、この項目は砲兵科に関わっていることが窺える。そして、フランス語‘campagne’には、「野戦」の意味を持っているため、‘Artillerie de campagne’を「野戦砲」と解釈できる。しかも、残りのドイツ語・英語・オランダ語はいずれも「野戦砲」の意味である。『日国』と『五国』における「野砲」の意味をみると、『日国』のほうが「野砲」をより詳しく説明しているが、両者はともに「野戦砲」の意味を指しているため、同語であることが確認できた。

同語であることが確認できた後に、初出例についての調査に入る。同じく「野砲」を例にすると、『日国』における初出例の情報は次のように示す。

風俗画報 - 五四号〔1893〕陸軍特別大演習之記

「南軍機を見て野砲（ヤホウ）山砲に命じ透間もあらせずつるべ放てば」

『日国』における「野砲」の初出例は 1893 年に出版された雑誌『風俗画報』から引用されたものであるが、実はそれより早い 1881 年の『五国』に、既に「野砲」の記述が確認できる。従って、日本側の出典という立場から言うと、『日国』における「野砲」の初出例より、『五国』における「野砲」の記述のほうが 12 年も早い。

また、調査の時に、複数の発音もしくは、複数の意味の持っている言葉も見られる。このような言葉を調査する時に、それぞれの発音と意味を『五国』での意味と対照し、同語であるか否かを判断したうえ、初出例の年代を比較する。

「工場」という言葉を例にすると、『日国』における「工場」の収録項目が「工場(コウジョウ)」と「工場(コウバ)」の 2 件ある。

「工場(コウジョウ)」は「一定の機械を設備、使用して、多数の人が継続的に商品の製

造や加工に従事する所。こうば。工業場。」の意味である。これに対して「工場(コウバ)」は「機械設備によって、物品の製造、加工をするところ。現在では、普通、「工場(コウジョウ)」より規模の小さなものをさす。」の意味である。「工場(コウバ)」の語釈にも示されているように、「工場(コウジョウ)」と「工場(コウバ)」の違いはその規模にある。より大きなものは「工場(コウジョウ)」といい、小さなものは「工場(コウバ)」と言う。一方、『五国』における「工場」の記述も2箇所ある。次に示す。

Atelier, m. - Werkstätte, f. - Workshop, Manu- 工場
factory. - Werkplaats, f.
(『五国』 p. 72)

Usine, f. - Hüttenwerk, n. - Forge, Workshop, 工場
- Werkplaats, f.
(『五国』 p. 946)

フランス語の‘Atelier’は「職人の仕事部屋、アトリエ、工房」、「作業場、作業部門、小工場」の意味である。残りのドイツ語‘Werkstätte’、英語‘Workshop, Manufactory’とオランダ語‘Werkplaats’においても「ワークショップ」、もしくは「工場」の意味が確認できる。

そして、フランス語の‘Usine’も「工場」の意味である。残りのドイツ語‘Hüttenwerk’は「(金属・ガラス・陶磁器の)工場」の意味であり、英語‘Forge’は「(鉄などを)鍛えて(金属製品に)する」の意味であり、もう一つの英語‘Workshop’とオランダ語‘Werkplaats’は「ワークショップ」の意味である。四ヶ国語の意味を比べると、若干の差異は見受けられるが、いずれにも「工場」の意味が見られる。

『小学館ローベル仏和大辞典』(1988)によると、‘Atelier’は工場の各部門や、職人・芸術家の仕事場を指すことが多い。つまり、‘Atelier’は日本語の「工場(コウバ)」の意味に近いと思われる。一方、‘Usine’は最も一般的な工場を指すことが多い。日本語の「工場(コウジョウ)」の意味に近いと思われる。

次に、『日国』における「工場(コウジョウ)」と「工場(コウバ)」の初出例を調べると、次の通りである。

改正増補和英語林集成〔1886〕「Kōjō コウヂャウ 工場」
にぎりえ〔1895〕〈樋口一葉〉三

「下坐敷へは何処やらの工場（コウバ）の一連れ」

「工場(コウジョウ)」の初出例は『改正増補和英語林集成』(ヘボン, 1886)から引用されたものであり、「工場(コウバ)」の初出例は『にぎりえ』(樋口一葉, 1895)から引用されたものであるが、実はそれらの用例より前に出版された『五国』に、既に「工場」の記述が見られる。従って、日本側の出典という立場から言うと、『日国』における「工場(コウジョウ)」の記述に、『五国』での記述「Usine (略) 工場」を追加すべきであり、「工場(コウバ)」の記述に、『五国』での記述「Atelier (略) 工場」を追加すべきであると思われる。

また、同語であることが確認できた例の中に、『日国』において初出例に関する情報が記されていない場合もある。

「臂章」という言葉を例にすると、『日国』では「もと、陸海軍下士官兵が軍服、外套の左肩と臂(ひじ)との間に付けた標識。官職、善行、特技などを区別した。」の意味である。一方、『五国』では‘Chevron’の訳語として挙げられている。フランス語を翻訳すると「軍人の年功を表す布章」の意味になる。語形や語義の面から、同語であることが確認できる。しかし、『日国』における「臂章」の記述をみると、語義についての解釈が記されているが、初出例に関する情報は記述されていない。このような場合に、『五国』における記述を、「臂章」の初出例の候補として挙げられると考えられる。

9.2 調査結果

以上に示した調査手順で、『日国』を使い、『五国』の2字漢語 3,180 語を調査した。調査の結果、『五国』の2字漢語が『日国』に収録項目として存在するものは1,398 語であり、2字漢語の全体の43.96%を占めていることが分かった。中には、「鋼鉄」・「政治」・「合格」などのような現在でも日常的によく使われる言葉も見られる。残りの1,782 語は『日国』に収録されていないものであり、2字漢語の全体の56.03%を占めている。中には、「参将」・「生鋼」・「煙弾」のような、やや専門的な言葉や、「鼻勒」・「石弾」・「弩砲」などのような、時代や技術の進歩によって使われなくなる兵器・馬具に関する言葉が見られる。

そして、『日国』に収録項目として存在する『五国』の2字漢語 1,398 語の中に、『五国』が初出例として用いられたものが253 語ある。253 語の中に、ルビの付いているものがないため、これらの2字漢語の発音は『日国』に示された発音に従うことにする。253 語を50 音順に並べると、次の通りである。字体は『五国』の記述に従う。下線付きの言葉は

複数の意味を持っているもので、計 94 語ある。

隘路(アイロ)	鞍橋(アンキョウ)	鞍囊(アンノウ)	圍牆(イシヨウ)
帷幕(イバク)	隕鐵(インテツ)	運動(ウンドウ)	衛舎(エイシャ)
衛戍(エイジュ)	衛所(エイショ)	閱兵(エッペイ)	曳行(エンコウ)
曳索(エンサク)	鉛滓(エンシ)	曳船(エイセン)	凹角(オウカク)
奥室(オクシツ)	恩給(オンキョウ)	外縁(ガイエン)	河域(カイキ)
外線(ガイセン)	解隊(カイタイ)	外壁(ガイヘキ)	樂長(ガクチョウ)
火工(カコウ)	火口(カコウ)	火石(カセキ)	下端(カタン)
架柱(カチュウ)	火夫(カフ)	下面(カメン)	瞰射(カンシャ)
騎袴 ¹²⁶ (キコ)	起動(キドウ)	休暇(キュウカ)	牛眼 ¹²⁷ (ギョウガン)
急撃(キュウゲキ)	駐止(チュウシ)	弓弩(キュウド)	仰角(ギョウカク)
教官(キョウカン)	急撃(キュウゲキ)	共犯(キョウハン)	强募(キョウボ)
教練(キョウレン)	鋸屑(キョセツ)	口分(クチワケ)	軍紀(グンキ)
軍橋(グンキョウ)	軍装(グンソウ)	軍路(グンロ)	輕鎧(ケイガイ)
輕艇(ケイテイ)	鷄頭 ¹²⁸ (ケイトウ)	減員(ゲンイン)	權外(ケンガイ)
拳銃(ケンジュウ)	肩章(ケンショウ)	肩牆(ケンシヨウ)	劍身(ケンシン)
元帥(ゲンスイ)	肩帶(ケンタイ)	鋼管(コウカン)	後脚(コウキヤク)
合金(ゴウキン)	後車(コウシャ)	後檣(コウシヨウ)	行進(コウシン)
鋼線(コウセン)	光彈(コウダン)	高地(コウチ)	工長(コウチョウ)
壕底(ゴウテイ)	鋼鐵(コウテツ)	紅熱(コウネツ)	行囊(コウノウ)
甲鈸(コウハン)	絞盤(コウバン)	後壁(コウヘキ)	後列(コウレツ)
後衛(コウエイ)	黒鉛(コクエン)	獄丁(ゴクテイ)	載量(サイリョウ)
作戰(サクセン)	沙洲(サス)	雜役(ザツエキ)	鑽石 ¹²⁹ (サンセキ)
山戰(サンセン)	霰彈(サンダン)	山地(サンチ)	山砲(サンポウ)
死角(シカク)	死静(シセイ)	支柱(シチュウ)	次長(ジチョウ)
實員(ジツイン)	支道(シドウ)	舍營(シャエイ)	射角(シャカク)
車工(シャコウ)	斜射(シャシャ)	就役(シュウエキ)	銃架(ジュウカ)
銃火(ジュウカ)	銃床(ジュウシヨウ)	縱陣(ジュウジン)	囚虜(シュウリョ)

¹²⁶ 「乗馬用のはかま。」の意味である。

¹²⁷ 「幼児の緑内障。眼内圧のために眼球が大きくなるもの。」の意味である。

¹²⁸ 「銃で、弾丸が発射できない状態。銃に安全装置をかけた状態。」の意味である。

¹²⁹ 「ダイヤモンドのこと。」の意味である。

宿營(シュクエイ)	主線(シュセン)	出路(シュツロ)	手簿(シュボ)
純銅(ジュンドウ)	訓練(ジュンレン)	杖刑(ジョウケイ)	小圈(ショウケン)
照尺(ショウシャク)	照準(ショウジュン)	哨所(ショウショ)	照星(ショウセイ)
哨兵(ショウヘイ)	常歩(ジョウホ)	照門(ショウモン)	上欄(ジョウラン)
檣樓(ショウロウ)	助手(ジョシュ)	初速(ショソク)	白樅(シロモミ)
信管(シンカン)	韌強 ¹³⁰ (ジンキョウ)	寢具(シング)	身甲(シンコウ)
信号(シンゴウ)	陣勢(ジンセイ)	陣地(ジンチ)	水柵(スイサク)
水準(スイジュン)	隧道(スイドウ)	水雷(スイライ)	船暈(センウン)
前衛(ゼンエイ)	前脚(ゼンキヤク)	前甲(ゼンコウ)	船骨(センコツ)
前肢(ゼンシ)	占守(センシュ)	前哨(ゼンショウ)	前檣(ゼンショウ)
戦線(センセン)	船燈(セントウ)	戦馬(センバ)	前壁(ゼンペキ)
尖帽(センボウ)	旋毛(センモウ)	戦利(センリ)	前列(ゼンレツ)
船樓(センロウ)	増給(ゾウキユウ)	艙口(ソウコウ)	總長(ソウチャウ)
属具(ゾクグ)	測鎖(ソクサ)	測索(ソクサク)	側射(ソクシャ)
側壁(ソクヘキ)	側門(ソクモン)	礎材(ソザイ)	袖章(ソデショウ)
体刑(タイケイ)	堆土(タイド)	舵手(ダシュ)	舵輪(ダリン)
坦道(タンドウ)	中帶(チュウタイ)	長圍(チョウイ)	追給(ツイキユウ)
突鑿(ツキノミ)	艇長(テイチョウ)	蹄鐵(テイテツ)	鐵尺(テツジャク)
展開(テンカイ)	點呼(テンコ)	転置(テンチ)	冬營(トウエイ)
刀身(トウシン)	逃亡(トウボウ)	凸角(トッカク)	突角(トッカク)
内縁(ナイエン)	内角(ナйкаク)	内線(ナイセン)	軟鐵(ナンテツ)
日誌(ニッシ)	廢兵(ハイヘイ)	爆彈(バクダン)	白熱(ハクネツ)
爆發(バクハツ)	白兵(ハクヘイ)	馬種(バシュ)	馬尾(バビ)
反跳(ハンチョウ)	皮履(ヒソウ)	錨鎖(ビョウサ)	冰山(ヒョウザン)
病舎(ビョウシャ)	錨地(ビョウチ)	標的(ヒョウテキ)	風位(フウイ)
俯角(フカク)	服馬(フクバ)	分屯(ブントン)	兵舎(ヘイシャ)
砲架(ホウカ)	房監(ボウカン)	砲床(ホウショウ)	帽章(ボウショウ)
砲列(ホウレツ)	望樓(ボウロウ)	歩度(ホド)	松材(マツザイ)
木軸(モクジク)	野營(ヤエイ)	藥室(ヤクシツ)	藥包(ヤクホウ)
遊標(ユウヒョウ)	陽攻(ヨウコウ)	要港(ヨウコウ)	要塞(ヨウサイ)

¹³⁰ 「しなやかでつよいこと。」の意味である。

羊頭 ¹³¹ (ヨウトウ)	陽動(ヨウドウ)	腰部(ヨウブ)	洋面(ヨウメン)
容量(ヨウリョウ)	熔炉(ヨウロ)	沃地(ヨクチ)	翼面(ヨウメン)
横揺(ヨコユレ)	預備(ヨビ)	雷汞(ライコウ)	絡車(ラクシャ)
落角(タツカク)	騾馬(ラバ)	陸風(リクフウ)	略帽(リャクボウ)
流線(リュウセン)	輪齒(リンシ)	連桿(レンカン)	狼奔(ロウセイ)
老兵(ロウヘイ)	滷汁(ロジュウ)	露礁(ロショウ)	鹿角 ¹³² (ロッカク)
路標(ロヒョウ)			

以上に示した言葉の中に、「閲兵」・「軍装」・「鶏頭」のように軍隊で使われる言葉もあれば、「死角」・「助手」・「信号」のように現在、日本語でも広く使われている言葉もある。

前掲の 253 語の中に、一つの意味しか持っていないものは 159 語あり、複数の意味を持っているものは 94 語ある。複数の意味を持っている 94 語をさらに分類すると、次に示す三つの種類に分けることができる。

一つは、『五国』より前に使われているが、古い意味から発展した新義の記述に、『五国』が初出例として用いられるものである。たとえば、『日国』における「鶏頭」の記述には、①の「ヒユ科の一年草。熱帯アジア原産で、古くから観賞用に庭園などで栽培されている。」、②の「ヒユ科ケイトウ属植物の総称。世界の熱帯に約四〇種がある。学名は *Celosieae*」と、③の「銃で、弾丸が発射できない状態。銃に安全装置をかけた状態。」の三つの意味がある。最も古くから使われているのは①の意味であり、初出例として挙げられているのは『私聚百因縁集』(愚勧住信, 1257)である。『五国』は③の意味の記述において初出例として用いられる。

もう一つは、『五国』が初出例として用いられる意味から新たな意味が発展されるものである。たとえば、『五国』に「前衛」という言葉がある。『日国』における「前衛」という言葉の項目には、①の「軍隊で、一縦隊の前進を防護し、かつ前方を搜索する部隊。」、②の「テニス、サッカーなどの球技で、自陣の前方におり、主として攻撃の任にあたるもの。フォワード。」、③の「ぜんえいげいじゅつ(前衛芸術)の略。」と、④の「階級闘争で、先進的、指導的な集団・部隊。」の四つの意味が記述されている。『五国』における意味は①であり、「前衛」の最も古い意味である。残り三つの意味は新たに発展した意味であると考えられる。

三つ目のものは、複数の意味の中に、用例を挙げていない意味があるため、現在の段階

¹³¹ 「やじりのふたまたになったもの。」の意味である。

¹³² 「ろっかくさい(鹿角砦)の略。」の意味である。

では、『五国』より前に使われている意味であるか否かを判断することが難しいと考えられるものである。

但し、上に挙げた『五国』の記述が初出例として用いられる 253 語は、『日国』における記述と比べた結果に基づき得られたものにすぎない。漢籍や軍事分野の書籍などで確認しない限りでは、これらの言葉を『五国』から生まれた漢語であると断言できかねるが、『五国』に由来する可能性のある言葉として、さらに検討していく必要がある。

以上に示した 253 語の他に、『日国』における初出例より『五国』のほうが早いものが 22 語ある。そして、『日国』において収録項目として挙げられているが、初出例に関する情報が記されていないものが 11 語ある。合計で 33 語ある。これらの言葉を 50 音順に並べると、次の通りになる。『日国』において初出例に関する情報が記されていない 11 語には二重下線を引く。

<u>軍祭</u> (イクサマツリ)	内側(ウチガワ)	<u>臂章</u> (ウデショウ)	<u>帯板</u> (オビイタ)
小笛(オブエ)	火兵(カヘイ)	代役(ダイヤク)	<u>弓把</u> (キウハ)
工場(^{コウジョ} _{ウ/コウバ})	硬性(コウセイ)	硬直(コウチョク)	<u>木鑿</u> (キタガネ)
<u>索梯</u> (サクテイ)	疾駆(シツク)	<u>舟橋</u> (シュウキョウ)	<u>砂湯</u> (スナユ)
<u>生銅</u> (セイドウ)	草地(クサチ)	<u>側風</u> (ソバカゼ)	大赦(タイシャ)
縦揺(タテユレ)	薙射(チシャ)	徴集(チョウシュウ)	橋面(ハシツラ)
半俸(ハンポウ)	<u>反流</u> (ハンリュウ)	微分(ビブン)	邊緣(ヘンエン)
偏差(ヘンサ)	偏流(ヘンリュウ)	本軍(ホングン)	野砲(ヤホウ)
亂闘(ラントウ)			

9.3 『日国』における初出例より『五国』のほうが早いもの

2 字漢語についての調査では、『日国』における初出例より、『五国』における記述のほうが早いものが 22 件得られた。具体例を下に示す。

[1] 内側(ウチガワ)

語釈 ①あるものの中、またはある区切りの中のほう。物の、内と意識される側。内面。内壁。⇔ 外側。

『日国』における初出例：

倫敦塔〔1905〕〈夏目漱石〉

「窓の内側は厚き戸帳が垂れて昼もほの暗い」

『五国』における記述：

Plat intérieur, m. – Innere seite od. Fläche,

内側

f. – Brass-side. – Binnenplat, n.

(『五国』 p. 310)

[2] 小笛(オブエ)

語釈 小型の笛。

『日国』における初出例：

暮笛集〔1899〕〈薄田泣菫〉兄と妹

「春の日小野の 逍遙に、裂けし小笛(ヲブエ)の 片(きれ)拾ひ」

『五国』における記述：

Sifflet, m. (du contre-maitre) (mar.) – Bootsmanns –

小笛(水夫亞長ノ)

pfeife, f. – Bootswain's pipe. – Bootsmansflu-

itje, f.

(『五国』 p. 877)

(『五国』 p. 484)

[3] 火兵(カヘイ)

語釈 (「兵」は武器の意) 小銃、機関銃、大砲など、火薬の力で、弾丸を遠くへ発射する装置の兵器。火器。

『日国』における初出例：

陸軍戸山学校条例(明治四一年)〔1908〕一条

「陸軍戸山学校は〈略〉常に諸學術の調査研究を為し、且携帯火兵及機関銃の研究試験を行ひ」

『五国』における記述：

Arme à feu, f. – Feierwaffe, f. Feurohr, n. –
Fire-arm. – Vuurwapen.

火兵

(『五国』 p. 55)

[4] 代役(ダイヤク)

語釈 ③一般に、ある人の代わりをつとめること。また、その役。

『日国』における初出例：

自由と規律 [1949] 〈池田潔〉その生活・三

「ハウスマスター〈略〉寮生活の中心にあり、時として家庭を離れている四十人の少年達の、父母の代役も務めなければならない」

『五国』における記述：

Remplacement, m. – Stellvertretung, f. – Sub-
stitution. – Plaatsvervanging, f.

代役

(『五国』 p. 823)

[5] 工場(コウジョウ/コウバ)

コウジョウ

語釈 一定の機械を設備、使用して、多数の人が継続的に商品の製造や加工に従事する所。こうば。工業場。

『日国』における初出例：

改正増補和英語林集成 [1886] 「Kōjō コウヂャウ 工場」

コウバ

語釈 機械設備によって、物品の製造、加工をするところ。現在では、普通、「工場(こうじょう)」より規模の小さなものをさす。

『日国』における初出例：

にぎりえ〔1895〕〈樋口一葉〉三

「下坐敷へは何処やらの工場（コウバ）の一連れ」

『五国』における記述：

Atelier, m. – Werkstätte, f. – Workshop, Manu-
factory. – Werkplaats, f.

工場

（『五国』 p. 72）

Usine, f. – Hüttenwerk, n. – Forge, Workshop,
– Werkplaats, f.

工場

（『五国』 p. 946）

[6] 硬性（コウセイ）

語釈 物の性質の硬いもの。また、人の言うことをなかなか聞き入れない、がんこな性質。硬い性質。⇔ 軟性。

『日国』における初出例：

如是放語〔1898〕〈内田魯庵〉

「硬性（カウセイ）の者は墜落して險詐となり暴戾となり薄志の者は喪魂して厭世となり淫蕩となり」

『五国』における記述：

Duteté, f. (mét.) – Harte, f. – Hardness. –
Hardheid, f.

硬性

（『五国』 p. 356）

[7] 硬直（コウチョク）

語釈 ①かたくてまっすぐなこと。また、そのさま。

『日国』における初出例：

土〔1910〕〈長塚節〉六

「雑木林の間には又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ」

『五国』における記述：

Roideur des cordages, f. – Steifheit, Unbiegsam-
keit, f. – Stiffness. – Stijfheid, f. 硬直(網具ノ)

(『五国』 p. 840)

[8] 疾驅(シッケ)

語釈 ①車や馬などをはやく走らせること。また、車や馬がはやく走ること。

『日国』における初出例：

経国美談〔1883～84〕〈矢野龍溪〉後・一七

「斉軍の右翼は之を見るより疾驅し」

『五国』における記述：

Galop, m. (man.) – Galopp, m. – Gallop, Canter.
– Galop, m. 疾驅

(『五国』 p. 496)

[9] 草地(クサチ)

語釈 草の生えている土地。

『日国』における初出例：

家〔1910～11〕〈島崎藤村〉下・四

「雑木林の間を通り抜けたところに、草地がある」

『五国』における記述：

Prairie, f. (top.) – Wiese, Weide, f. Anger, m.
– Meadow. – Weide, f. 草地

(『五国』 p. 783)

[10] 大赦(タイシャ)

語釈 ②恩赦の一つ。政令で罪の種類を定めてその刑罰の赦免を行なうこと。有罪の

言渡しを受けた者については言渡しは効力を失い、言渡しを受けない者については公訴権が消滅する。

『日国』における初出例：

仏和法律字彙〔1886〕〈藤林忠良・加太邦憲〉「AMNISTIE. Taisha 大赦」

『五国』における記述：

Amnestie, f. – Generalpardon, m. – Generral –
pardpm. Amnesty. – Generaalpardon, n.

大赦^{乱後ナドニ行フ}

(『五国』 p. 32)

[11] 縦揺(タテユレ)

語釈 ①船、飛行機などが縦にゆれること。ピッチング。

『日国』における初出例：

春の城〔1952〕〈阿川弘之〉一・一一

「興安丸は暗がりの中で、鈍い大きなたて縦揺れを繰返していた」

『五国』における記述：

Tangage, m. (pont.) – Wanken, n. – Undulating
motion of a boat-bridge. – Schommelen, n.

縦揺^{船橋}

(『五国』 p. 900)

[12] 薙射(チシャ)

語釈 機関銃の射法の一つ。高低の照準を一定に保ち、銃口を左右に移動させながら射撃すること。また、その射法。点射に対する語。

『日国』における初出例：

銃後〔1913〕〈桜井忠温〉一一

「其の多くのものは、前後左右より機関銃の薙射(チシャ)を受けて、壕底に埋没してしまったのである」

『五国』における記述：

Feu rasant, m. – Bestreich-od. rasirendes F. –
Grazing F. – Bestrijkendvuur.

薙射

(『五国』 p. 447)

[13] 徴集(チョウシュウ)

語釈 ②旧兵役で、徴兵検査に出頭を命じ、検査を受け、現役または補充兵役編入を決定し、これを本人に通告する行為。

『日国』における初出例：

陸軍省達甲第四二号 - 明治一八年〔1885〕九月二六日（法令全書）

「正当の故なく徴集に応ぜず若くは徴集に洩れ、年齢三十二歳を超過し発覚の者は」

『五国』における記述：

Convocation, f. – Aufgebot, n. – Call, Summons. – Oproeping, f.

徴集

(『五国』 p. 276)

[14] 橋面(ハシツラ)

語釈 橋の上部構造で、人や車の通行する面。橋の通路を形成する部分。

『日国』における初出例：

東京年中行事〔1911〕〈若月紫蘭〉附録・日本橋

「橋面（ハシツラ）の坪数は四百五坪、高さは橋の底から三十二尺五寸」

『五国』における記述

Aire de pont, f. – Oberfläche, Breite, Deckung, f.
– Breadth, Surface. – Oppervlakte, f.

橋面

(『五国』 p. 21)

[15] 半俸(ハンポウ)

語釈 俸給の半分。また、半分に減じた俸給。

『日国』における初出例：

田舎教師〔1909〕〈田山花袋〉五八

「六十日の病気欠席は全俸（願書診断書附）その以後二ヶ月半俸としてあることを報じて来た」

『五国』における記述：

Demi-solde, f. – Halbsold, m. – Half-pay. –

半俸 一時非職トナリタル
軍人ニ給スル俸ナリ

Halve soldij, f.

(『五国』 p. 333)

[16] 微分(ビブン)

語釈 「びぶんがく（微分学）」の略。

『日国』における初出例：

筆まかせ〔1884～92〕〈正岡子規〉二・悟り

「余は一驚を喫したり。何となれば氏の話は数学上の最高等なる部分、微分積分に移りたればなり」

『五国』における記述：

Calcul différentiel, m. – Differentialrechnung, f.

微分 数学
ノ語

– Differential calculus. – Differentiaalrekening, f.

(『五国』 p. 174)

[17] 邊緣(ヘンエン)

語釈 他との境の部分。周辺部。へり。ふち。

『日国』における初出例：

雨の庭〔1971〕〈加賀乙彦〉

「そこは繁華街から北上して来たビル群の辺縁にあたる」

『五国』における記述：

Bordure, f. – Rand, m. – Rand – Rand, m.

邊縁

(『五国』 p. 140)

[18] 偏差(ヘンサ)

語釈 標準となる数値、平均値、位置、方向などからのかたより。ふれ。偏倚(へんい)。

『日国』における初出例：

日本風景論〔1894〕〈志賀重昂〉四

「山麓より絶頂に至るまで気候の偏差多様に」

『五国』における記述：

Déviati^on latéral, f. (art.) – Seiten-A – Late-
ral deviation. – Zijdelingsche A.

偏差

(『五国』 p. 342)

[19] 偏流(ヘンリュウ)

語釈 風向により着弾点がそれること。また、その程度。

『日国』における初出例：

歩兵操典〔1928〕第五四七

「次に右手にて横尺転輪を操作して射距離に応ずる偏流を装し」

『五国』における記述：

Dérivati^on, f. (art.) – Derivation, Ablenkung, f.
– Derivati^on. – Derivatie, f.

偏流

(『五国』 p. 336)

[20] 本軍(ホンゲン)

語釈 軍隊の本隊。

『日国』における初出例：

経国美談〔1883～84〕〈矢野龍溪〉後・三

「本軍に追附かんと馬の足搔きを早めけり」

『五国』における記述：

Gros de l'armée, m. – Hauptcorps, n. – Main

本軍

body. – Hoofdkorps, n.

(『五国』 p. 524)

[21] 野砲(ヤハウ)

語釈 野戦砲の一種。師団の編制内で歩兵支援用に用いられる口径七五ないし一〇五ミリメートルの榴弾砲。砲兵の標準主力火砲。

『日国』における初出例：

風俗画報 - 五四号〔1893〕陸軍特別大演習之記

「南軍機を見て野砲(ヤハウ) 山砲に命じ透間もあらせずつるべ放てば」

『五国』における記述：

Artillerie de campagne, f. (art.) – Feldartillerie,

野砲又野砲兵

Feldgeschütz. – Field artillery. – Veldartil-

lerie, Veldgeschut.

(『五国』 p. 67)

[22] 亂闘(ラントウ)

語釈 入り乱れてたたかうこと。乱れて争闘すること。

『日国』における初出例：

経国美談〔1883～84〕〈矢野龍溪〉前・一九

「互に奮戦乱闘して三道の戦共に何時果つべしとも見えざりける」

『五国』における記述：

Melée, f. – Handgemenge, n. – Conflict, Fight,

亂闘

Melée. – Hevig gevecht, Treffen, n.

(『五国』 p. 634)

以上、『日国』における初出例より、『五国』における記述のほうが早い言葉について、具体的な情報を示した。以上に示した 22 語は前節に示した『五国』が初出例として挙げられる言葉と同じく、『日国』における記述と比べた結果に基づき得られたものにすぎない。漢籍などで確認しない限りでは、これらの言葉を『五国』から生まれた漢語であると断言できかねる。しかし、これらの言葉の由来を考察する時に、『五国』を参考資料として挙げるべきであると思われる。

『日国』における初出例と比べると、「疾駆」・「本軍」・「亂闘」のように『五国』での記述が 2、3 年ほど早いものもあれば、「邊緣」のような『五国』での記述が 90 年早いものも見られる。

繰り上げられる年数によって、この 22 語を分類すると、10 年以下のものは「疾駆」(2 年)・「本軍」(2 年)・「乱闘」(2 年)・「微分」(3 年)・「徴集」(4 年)・「工場(コウジョウ)」(5 年)・「大赦」(5 年)の 7 語である。11 年から 20 年のものは「野砲」(12 年)・「偏差」(13 年)・「工場(コウバ)」(14 年)・「硬性」(17 年)・「小笛」(18 年)の 5 語である。21 年から 30 年のものは「内側」(24 年)・「火兵」(27 年)・「半俸」(28 年)・「硬直」(29 年)・「草地」(29 年)の 5 語である。31 年から 40 年のものは「橋面」(30 年)・「薙射」(32 年)の 2 語である。41 年から 50 年のものは「偏流」(47 年)の 1 語である。そして 60 年以上のものは「代役」(68 年)・「縦揺」(71 年)・「辺縁」(90 年)の 3 語である。

また、22 語の中、「本軍」・「野砲」・「火兵」・「薙射」のような、軍隊との関連が見られるものがあるが、残りの「工場」・「草地」・「橋面」などの言葉については、軍隊との関連が連想しにくいと思われる。従って、これらの言葉の初出例を調査する時に、軍隊と関連する資料で調査することが疎かにしがちであり、『五国』における記述も見逃しがちであると考えられる。

9.4 『日国』において初出例が挙げられていないもの

2 字漢語についての調査では、『日国』における初出例の情報が記されていないものが

11 件ある。『五国』におけるこの 11 語の記述を、初出例の候補として挙げられると思われる。詳しい情報を下に示す。

[23] 軍祭(イクサマツリ)

語釈 軍神（いくさがみ）の祭。

『五国』における記述：

Armilustre, m. (a.) – Fest der Waffenreinigung
bei den Römern. – Armilustry. – Jaarlijksch
feest der wapenschouwing bij de Romeinen.

軍祭^{軍馬}

(『五国』 p. 60)

[24] 臂章(ウデショウ)

語釈 もと、陸海軍下士官兵が軍服、外套の左肩と臂（ひじ）との間に付けた標識。
官職、善行、特技などを区別した。

『五国』における記述：

Chevron, m. – Zeichen des Dienstalters, n.
– Stripe on a soldier's arm. – Chevron, m.

臂章^{軍人ノ服役年限ヲ表スル為ノ}

(『五国』 p. 240)

[25] 帯板(オビイタ)

語釈 ①帯状の板。

『五国』における記述：

Préceinte, f. (mar.) – Barkholz, Bergholz, n. –
Wale. – Berghout, n.

帯板

(『五国』 p. 783)

[26] 弓把(キュウハ)

語釈 ゆづか。弓の、手で握る部分。

『五国』における記述：

Archet, m. – Drehbogen, m. – Drillbow.
– Drilboog, m.

弓把^{率環}

(『五国』 p. 53)

[27] 木鑿(キタガネ)

語釈 かたい材質の木で作られたたがねのようなもの。彫金で、薄い金属板を打って凹凸（おうとつ）を作るのに用いる。

『五国』における記述：

Chassoir, m. – Treiber, m. – Driver. – Drijver,
m.

木鑿<sup>権フ桶ニカケルト
キ桶工ノ用フル</sup>

(『五国』 p. 223)

[28] 索梯(サクテイ)

語釈 ①縄梯子（なわばしご）。

『五国』における記述：

Haubans, m. pl. (mar.) – Want, f. – Shrouds.
– Want, n. Hoofdtouwen, n. pl.

索梯

(『五国』 p. 537)

[29] 舟橋(シュウキョウ)

語釈 多くの舟を浮かべ、桁（けた）を渡して板を張ってつくった橋。ふなばし。

『五国』における記述：

Pont de bateaux, m. (pont.) – Schiffbrücke. –
Boat-bridge. – Schipbrug

舟橋

(『五国』 p.763)

[30] 砂湯(スナユ)

語釈 砂を利用した療法の一つ。海浜の温泉熱を利用した発汗療法で、また、砂の機

械的刺激などの療法も兼ねる。ふつう、砂を掘り、首から上だけを残して全身を熱砂で埋めて行なう。慢性リウマチ、肩こりなどによいとされ、九州の別府や指宿（いぶすき）は有名。砂浴（さよく）。砂風呂。

『五国』における記述：

Bain de sable, m. – Sandbad, n. – Sandbath. –
Zandbad, n.

砂湯

（『五国』 p. 89）

[31] 生銅（セイドウ）

語釈 ①精錬していない銅

『五国』における記述：

Cuivre brut, cru ou noir, m. – Schwarzkupfer,
Rohkupfer. – Coarse copper. – Zwart of
raauw K.

生銅

（『五国』 p. 313）

[32] 側風（ソバカゼ）

語釈 側面から吹きつける風。横風。

『五国』における記述：

Vent de côté, m. – Seiten-od. Nebenwind. –
Seading- or side-wind. – Bezeilde wind, Zijwind.

側風

（『五国』 p. 953）

[33] 反流（ハンリュウ）

語釈 地形の影響や海流の変動などで生ずる主流と逆向きの流れ。

『五国』における記述：

Renversement du courant, m. (mar.) – Kenter-
ing, f. – Slackening of the tide. – Kentering

反流^潮

van het tij. f.

(『五国』 p. 826)

上に示した 11 語の『日国』における記述に、初出例に関する情報は記述されていないが、1881 年に出版された『五国』にはすでに収録されている。『五国』における記述はこれらの言葉の初出例の候補になると思われる。

9.5 まとめ

本節は『五国』に収録されている 2 字漢語を中心に、『日国』における記述について調査した。調査は同語であることを前提として行われた。調査結果をまとめると次のようになる。

まず、調査対象 3,180 語の中に、『日国』に収録項目として存在するものが 1,398 語あり、2 字漢語全体の半分弱を占めている。軍事分野の専門的な言葉や、時代や技術の進歩によって使わなくなった言葉などは『日国』にはあまり見られない。

次に、調査対象 3,180 語の中に、『五国』が初出例として『日国』に用いられたものが 253 語ある。今の段階で、これらの 253 語をすべて『五国』から生まれた漢語と見なすことはできないが、『五国』に由来する可能性のある言葉として、さらに検討していく価値があると思われる。そして、これらの言葉の中に、当初翻訳された意味で、現在の日本語で使われているものもあるのに対し、「死角」・「信号」・「前衛」・「白熱」などのような、新たな意味が生み出されたものもある。これらの言葉の意味変遷についても考察する必要がある。

また、調査対象 3,180 語の中に、『日国』における初出例より、『五国』での記述のほうが早いものが 22 語ある。これらの言葉を考察する時に、『五国』における記述を参考資料として考える必要があると思われる。

最後に、調査対象 3,180 語の中に、『日国』では、初出例に関する情報が記述されていないものが 11 語である。今後、これらの 11 語の初出例を追加する時に、『五国』を候補の一つとして参考できるとと思われる。

本節における調査によって、現在我々の使っている日本語の中に、『五国』に由来する可能性のあるものが得られた。これらの言葉から『五国』の役割が一部窺える。近代日本語を研究する時に、『五国』を重要な参考資料として調査する必要があると考える。

おわりに

本論文は、1881 年(明治 14 年)に出版された日本最初の軍事分野の対訳辞書『五国』を対象として、その編纂成立について書誌学的・文献学的の研究を行い、さらに掲載された訳語について、特に語彙論の観点から分析と考察を行ったものである。以下、順を追って各章の考察内容及び各章で明らかにしたことを総括して本論文の結語としたい。

第 1 章では、『五国』の構成について説明した。『五国』は扉・序文・凡例・中扉・略語表・本文・正誤・毛色解及毛色類別の八つの部分からなっている。『五国』の収録項目は 2 種類ある。一つは、フランス語・ドイツ語・英語・オランダ語・日本語の五ヶ国語対訳の収録項目であり、一般的に見出しのフランス語・見出しに対応するドイツ語訳・英語訳・オランダ語訳・日本語訳からなっている。一部の収録項目に、フランス語の括弧付き附注・術語注記・日本語の括弧付き附注・説明文・ルビが見られる。もう一つは、フランス語だけの収録項目である。『五国』には、二つのフランス語を‘syn.’、或は‘voy.’で繋ぎ、同義関係であることを表す。これらの収録項目には、ドイツ語・英語・オランダ語の訳が添えられず、日本語訳も省略される。

第 2 章では、『五国』の編者の略歴について調査を行った。編者西周・室岡峻徳・菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎はいずれも西洋語に堪能な人物である。特に、菊野七郎・若藤宗則・矢島玄四郎の 3 人はフランス語の著書を翻訳・出版できるほどフランス語に精通している。『五国』の編集が終了したあとに、彼らは編集で積んだ経験をほかの翻訳の仕事に生かし、訳書を出したことも確認できた。

第 3 章では、明治初期の史料「陸軍省大日記」に基づき、『五国』の編纂事情について考察を行った。防衛研究所史料研究センター所蔵の「陸軍省大日記」に、『五国』の編纂に関する記述を見出した。整理すると、次の 3 点にまとめることができる。

一つ目は、室岡峻徳・松岡邦道・柳田昶・菊野七郎・若藤宗則・高橋琢也の 6 人が兵語辞書編輯掛兼務に任命されたという内容である。

二つ目は、『五国』を編纂するための人員募集に関する内容である。新聞で人員募集を公告し、参謀局第三課において試験で選抜するというものである。

三つ目は、兵語辞書編集掛を 17 名採用したという内容である。

第 3 章の最後に、三つの史料の内容を、『五国』の序文・凡例の内容及び先行研究の内容と合わせて、時間軸に沿って『五国』の編纂事情をまとめた。翻訳命令を二度も下した

こと、新聞に募集をかけたこと、大人数を集めて翻訳に従事させたことなどから、当時『五国』の編纂は重用視されていることが推察できる。

第4章では、『五国』の翻訳底本と底本の著者に関する問題について考察した。『五国』はオランダの陸軍大尉 Heinrich Mathias Friedrich Landolt の著書 *Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine* (1865-1868) のフランス語編と、*Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine Supplément* (1871) のフランス語部を翻訳底本にして翻訳・編纂されたものである。辞書の編集は翻訳底本を忠実に反映したうえに、翻訳底本の誤った配列順を直したり、不適切な表記を直したりするなど、一部修正を加えたところも見られる。

第5章では、和歌山の洋学者池田良輔の手稿「兵学辞書 A ノ部：仏独英蘭日五ヶ国対訳」を『五国』の A 部と対照し、池田手稿は『五国』の準備期の稿本であることが判明した。両資料の訳語を対照した結果、『五国』の日本語訳は池田手稿から影響を受けていることが明らかになった。

第6章では、『五国』における収録項目の数、各アルファベットの部における収録項目の数及び、術語注記の付いている収録項目の数などを調査した。『五国』には収録項目が 13,304 件ある。その中で、日本語訳付きの収録項目は 11,654 件あり、日本語訳の付いていない収録項目は 1,650 件ある。アルファベット順を通して『五国』をみると、A 部、B 部、C 部、P 部の収録項目は 1,000 件を超える。中には、C 部の収録項目は 2,045 件で、最も多い。収録項目の最も少ないのは W 部と X 部で、両方とも 2 項目のみである。『五国』における各部の占める割合は当時の仏和辞書とほぼ一緒である。収録項目をみると、『五国』には軍事用語はもちろん、軍隊生活を送るための一般的な生活用語も多く収録されている。術語注記を通して『五国』をみると、術語注記の付いていないものと、術語注記の付いているものの二種類とに『五国』を大別できる。軍事分野の辞書として、『五国』の半分以上の収録項目に術語注記が付いており、海軍と砲兵科に関する術語が最も多いことも判明した。

第7章では、見出し項目と日本語訳の対応関係、日本語訳の表記と、見出しのドイツ語・英語・オランダ語と日本語訳の関係の三つの方面から、『五国』の翻訳特徴について考察した。『五国』の序文・凡例に示したフランス語に基づき翻訳すること、優先的に意識する方法を取ること、意味の把握できないものを音訳することなどの翻訳特徴の他には、一つの見出し項目に一つの訳語で翻訳すること、漢字表記語で翻訳すること、フランス語だけではなく、対訳のドイツ語・英語・オランダ語も総合的に参考にして翻訳するといった翻訳特徴が見られる。

第8章では、『五国』の日本語訳「服務」という言葉を例に、日中語彙交流の視点から、日本語における「服務」の生成と発展や、中国語における流入と受容について検討した。その結果、『日国』における「服務」の初出例より、『五国』における「服務」の記述のほうが早いことが判明した。『五国』における「服務」はフランス語‘Service’の訳語として成立し、最初に軍事関連書に使われているが、徐々に一般化され、法律のような非軍事分野にも使われるようになる。一方、中国側では、「服務」は「軍務に服する」の意味で、日本の軍事関連書『見習士官之修養』（帰帆子, 1908）の翻訳書『見習軍官脩養』（徐夢成・周繩武, 1914）にはじめて見られる。その後、孫文・毛沢東の使用によって、「奉仕する」という意味で中国語に定着した。さらに、鄧小平の「改革開放」の政策によって、「サービス」の意味で、日常生活に欠かせない常用語になった。

第9章では、『日国』を使って、「服務」のような、『日国』に収録されている初出例より、「五国」における記述のほうがより早い『五国』の2字語について調査した。調査対象3,180語の中に、『日国』に収録項目として存在するものは1,398語ある。それらの1,398語の中に、『五国』が初出として『日国』に用いられたものが253語あり、『日国』の初出例より『五国』での記述のほうがより早いものが22語、『日国』に初出例が記されておらず、『五国』における記述を候補として挙げるべきものが11語ある。この調査結果から、『五国』が近代日本語にもたらした影響を一部窺える。今後、これらの言葉から、『五国』の語彙、ひいては近代の軍事分野の語彙の研究に着手すればよいと思われる。この考察によって得られた情報も、『日国』における用例の追加・修正に役に立つことが期待される。

本論文が対象とした『五国』は、日本最初の軍事用語対訳辞書であり、語彙研究資料としても注意されており、50万項目を収録する『日本国語大辞典』（第二版）には約650項目に、その用例が収録されている。従来の研究においての『五国』についての情報は殆ど『五国』の序文や凡例に関する内容であったが、本論文では、信岡(2003)を初めとする先行研究を踏まえて、いままであまり検討されていなかった編者の問題・編纂過程の問題・翻訳底本の問題・翻訳手稿の問題・翻訳特徴の問題及び、位置づけの問題などを解明した。これらの問題を検討する時に、巨視的な視点から考察したことが多いが、細かく検討しなければならないところも多く残っている。たとえば、第7章の『五国』の翻訳特徴を検討する時に、基本的に意識されるということについて述べたが、翻訳の時に、既存語を用いて置き換える翻訳手法を使ったか、もしくは、新たに訳語を作る翻訳手法を使ったかについて触れることはできなかった。また、辞書にある音訳語についても言及したが、発音を

表す漢字の使い方は如何なる特徴を持っているか、中国の文献や資料から影響を受けているかどうかなどについて詳しく考察できなかった。さらに、第 9 章の『五国』の日本語訳について検討する時に、『五国』に由来する可能性のある 2 字漢語をまとめておいたが、個々の 2 字漢語の語誌について具体的に検討できなかった。これらの問題を今後の課題にしたい。

最後に、本論文の意義として、日本最初の軍事分野の対訳辞書『五国』の編者、編纂過程、翻訳底本及び翻訳手稿などの書誌的な問題を検討した初めての研究であること、『五国』の収録項目と日本語訳の数及び、辞書の翻訳特徴を明らかにしたこと、『五国』に由来する言葉の日中両言語に与えた影響を検討したこと、『五国』に由来する可能性のある 2 字漢語をまとめておいたことを述べて論文を終える。

資料編

資料 1 『五国』のデータベース

資料 2 日本国内にある『五国』（2冊）とその蔵書印

資料 3 日本国内にある Landolt（本編）と Landolt（補遺）

資料１ 『五国』のデータベース

2013年度の北海道大学大学院文学研究科研究プロジェクト「人文学と社会」リサーチ・アシスタント(RA)の研究助成を受け、筆者は『五国』のデータベースを作成した。このデータベースを使って、日本語訳の検索が可能になる。検索で得たデータ番号を見れば、『五国』に収録されている場所が分かる。また、「海軍語」・「砲兵科語」などのような各分類の術語の内訳を確認することもできる。

『五国』のデータベースは NO. (データ番号)、術語注記、日本語訳(1)、日本語訳(2)、日本語訳(3)、日本語訳(4)、フランス語括弧付き附注、日本語括弧付き附注、説明文とルビから構成される。

NO. (データ番号) をみれば、アルファベットは各部を、アルファベットに続く 3 桁の数字はページ数を、最後の 2 桁の数字は項目目を指すものである。たとえば、‘A00102’ の ‘A’ は A 部を、‘001’ は 1 頁を、‘02’ は 2 項目目を指す。

No.	術語注記	フランス語見出し	日本語訳(1)	日本語訳(2)	日本語訳(3)	日本語訳(4)	フランス語括弧注	日本語括弧付附注	説明文	ルビ
A00101	鉛治	Aabam	鉛						古名	
A00102	海軍	Abab	水夫						土耳其	
A00103	海軍	Abaissement	斜落				de l'horizon	水平ノ	海ノ観者ノ見下ス 斜メナル線ヲ真ノ 水平線ニテ切タル 處ヨリ猶伸ビタル 視線ヲ云フ	
A00104	砲兵科	Abaissement	砲計心低度				du centre des tourillons au-des-sous de l'axe de l'ame	銃心ヨリノ		
A00105	×	Abanicrado	大旗手						西班牙	
A00106	×	Abandon	委兵罪				d'armes			
A00107	剣術	Abandon	放下				de l'épée	剣ノ		
A00108	×	Abandonner	去ル				le camp de bataille	戦場ヲ		
A00201	×	Abandonner	付スル				une ville au pillage	城邑ヲ敵ノ抄掠ニ		
A00202	築城	Abatis	鹿角						即逆茂木	
A00203	造兵	Abattage	落打					離頭ノ		
A00204	×	Abattoir	×							
A00205	蹄鉄	Abattre	削ル				la muraille	爪甲ヲ		
A00206	×	Abattre	伐リ倒ス				des arbres	樹木ヲ		
A00207	海軍	Abattre	傾ル				la carène	船底ヲ	修繕ノ為ニ	
A00208	×	Abattre	馬ヲ倒ス				un cheval.		蹄鉄ヲ打テ若クハ 手術ヲ行フ為ニ	
A00209	×	Abattu	疲労シタル							
A00210	×	Abat-vent	風							ヒサシ
A00211	地形学	Abime	深淵							
A00212	古語	Ablectes	戦時観衛兵					驪馬	驪馬驛政官ノ	

また、第一章第 1 節に、親見出しと子見出しの項目について述べた (p. 13)。『五国』のデータベースでは、これらの親見出しと子見出しの関係にある項目を青字で表す。そして、親見出しの NO. (データ番号) の後ろに、「－数字」を加える。数字は子見出しの項目の数である。たとえば、「A03410－12」をみれば、この収録項目は親見出しで、下に並べ

る子見出しの項目数が 12 件あるということがわかる。

No.	術語注記	フランス語見出し	日本語訳 (1)	日本語訳 (2)	日本語訳 (3)	日本語訳 (4)	フランス語括弧注	附注	説明文	ルビ
A03408	×	Ancienneté	停車場							
A03409	海軍	Ancre	碇泊場							
A03410-12	海軍	Ancre	錨							
A03411	海軍	Aile, Patte, Oreille,	錨爪							
A03412	海軍	Aisselle	錨臂内角							
A03413	海軍	Bee	錨臂							
A03501	海軍	Bras	錨臂							
A03502	海軍	Cercles du jas	錨柱鐵箍							
A03503	海軍	Collet, Fort	錨頭						錨身ニ錨臂ノ接スル處	
A03504	海軍	Croisée	十字線						錨頭ニ同シ	
A03505	海軍	Jas, Jouet	錨柱							
A03506	海軍	Organeau, Arganeau	錨環							
A03507	海軍	Tenon, Tourillon	扛林						横杠ヲ嵌駐スル上下ノ凸處	
A03508	海軍	Trou, Oeillet	錨眼						錨貫	
A03509	海軍	Verge	錨身							
A03510	×	Ancre à demeure	碇泊錨							
A03511	×	Ancre à jas	嵌柱錨							
A03512	×	Ancre à jet	向前小錨							

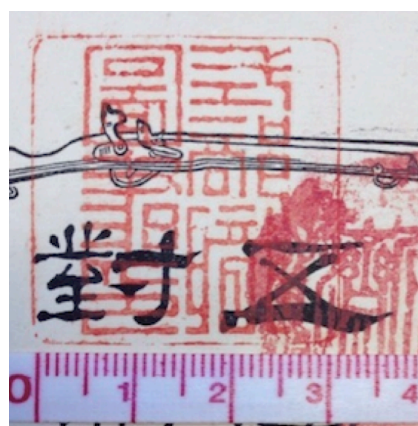
『五国』の凡例に、辞書がフランス語を中心に翻訳されたとあることから、当データベースは見出しのフランス語と、日本語訳を中心に作成された。残りのドイツ語・英語・オランダ語のデータ化は今後の課題にしたい。

資料 2 日本国内にある『五国』(2冊)とその蔵書印

資料 2 は日本国内にある『五国』(2冊)について調査した結果をまとめたものである。主に大学図書館に保管されているものを対象にする。いずれの調査対象に、書き込みが見られないが、扉、中扉などに、下に示すような蔵書印を押印しているものが多い。これらの蔵書印から、『五国』の所蔵先がわかる。その上で、『五国』は如何なる分野で使用されていたことも推察できると思われる。



「参謀」の円印



「式部職圖書印」の角印



防衛研究所史料研究センターに所蔵する『附図』の扉

・日本国内にある『五国』とその蔵書印

所蔵	縦×横×厚 さ(mm)	表紙			背	蔵書印	
		色	紙 質	厚さ (mm)		数	内容
北海道大学 文学研究 科・文学部図 書室	230×165× 42	茶 色	堅 紙	3	五国対照兵語字書	2	・「参謀」の円印 ・「国立大学法人北海道大学附属 図書館図書之印」の円印
国立国会図 書館 東京本館	230×165× 42	黒	堅 紙	3	五国対照兵語字書 参謀本部 完 帝国図書館	2	・「参謀」の円印 ・「東京図書館蔵」の角印
東京大学総 合図書館	230×165× 42	黒	堅 紙	3	DICTIONNAIRE/ POLYGLOTTE/ MILITAIRE/ ET NAVAL/ FRANCAIS, ALLEMAND, / ANGLAIS, NEERLANDAIS	5	・「参謀」の円印 ・「法学部研究室圖書」の角印 ・「東京帝国大学圖書印」の角印 ・「民法編纂局書籍之印」の角印 (2箇所)
国際日本文 化研究セン ター	230×156× 43	茶 色	堅 紙	3	DICTIONNAIRE/ POLYGLOTTE/ MILITAIRE/ ET NAVAL/ FRANCAIS, ALLEMAND/ ANGLAIS, NEERLANDAIS/五国対照/兵語字書	4	・「参謀」の円印 ・「式部職圖書印」の角印 ・「惣郷文庫」の長方形印 ・「惣郷圖書」の角印

東北大学附属図書館	230×156×42	茶色	堅紙	3	DICTIONNAIRE/ POLYGLOTTE/ MILITAIRE/ ET NAVAL/ FRANCAIS, ALLEMAND/ ANGLAIS, NEERLANDAIS/五国対照/兵語字書	1	・「参謀」の円印
同志社大学 今出川図書館	230×156×42	茶色	堅紙	3	破損のため、識別不能	3	・「参謀」の円印 ・「荒川文庫」の長方形印(2箇所)

・日本国内にある『附図』とその蔵書印

所蔵	縦×横×厚さ (mm)	表紙			背	蔵書印	
		色	紙質	厚さ (mm)		数	内容
北海道大学文学研究 科・文学部図書室	23×165×10	茶	堅紙	3	五国対照兵語字書附圖	1	・「国立大学法人北海道大学附属 図書館図書之印」の円印
国立国会図書館 東京本館	23×165×10	黒	堅紙	3	—	1	・「東京図書館」の角印
東北大学附属図書館	23×165×10	茶	堅紙	3	五国対照兵語字書附図	0	
同志社大学今出川図 書館	23×165×10	茶	堅紙	3	破損のため、識別不能	3	・「澤井」の楕円印(2箇所) ・扉の左中央部に、「荒本文庫」 の長方形印
横浜国立大学学術情 報センター	23×165×10	茶	堅紙	3	五国対照兵語字書附図参謀本部	1	・扉の左上に、「三枝博章文庫」 の長方形印

防衛研究所史料研究センター	23×165×10	紺	堅紙	3	五国対照兵語字書附図	10	①「陸軍自衛隊幹部学校蔵書」の角印(2箇所) 「消印」を押印したもの ③「陸軍自衛■■■■校蔵書」の角印 ④「陸軍文庫」の角印 ⑤「陸上幹部学校受第987号」の円印(2箇所) ⑥「幹部学校1107」の長方形印 ⑦「陸上幹部学校蔵書(和)NO.4182」の長方形印(2箇所) ⑧「幹部学校受32.1.21第392号」の円印 ⑨遊紙の下部の真ん中に、「陸上幹部学校蔵書(和)NO.」の長方形印
---------------	-----------	---	----	---	------------	----	---

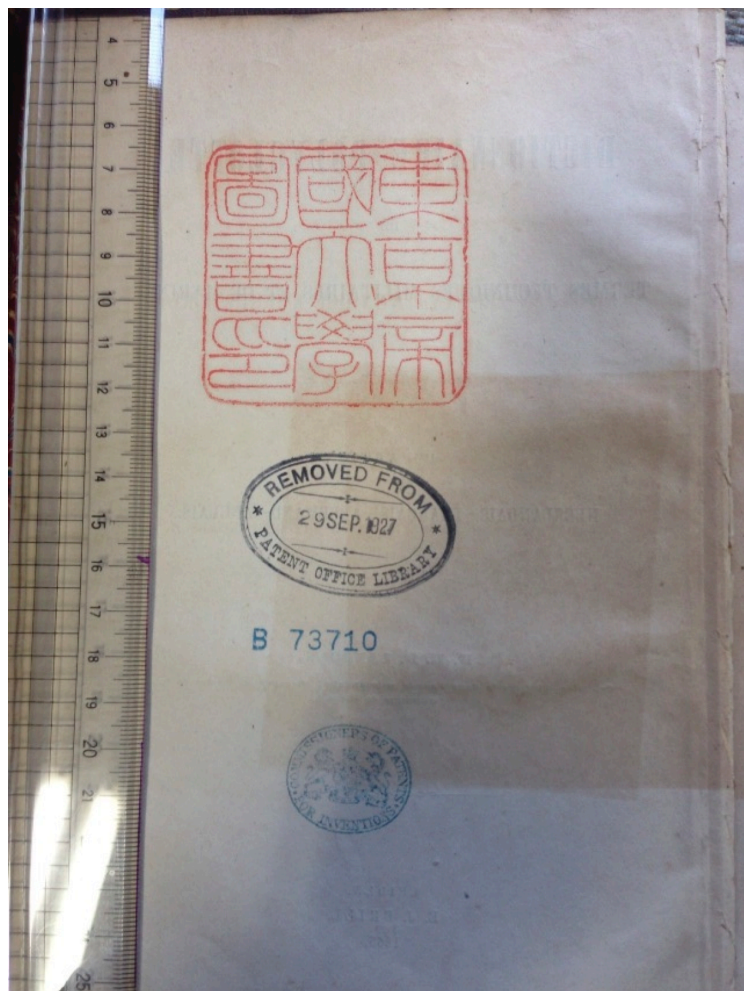
資料 3 日本国内にある Landolt（本編）と Landolt（補遺）

日本国内における Landolt(本編)・Landolt(補遺)の所蔵を調べると、東京大学総合図書館と、長崎大学附属図書館に所蔵がある。筆者が実物を調査する時に撮った写真を下にまとめておく。



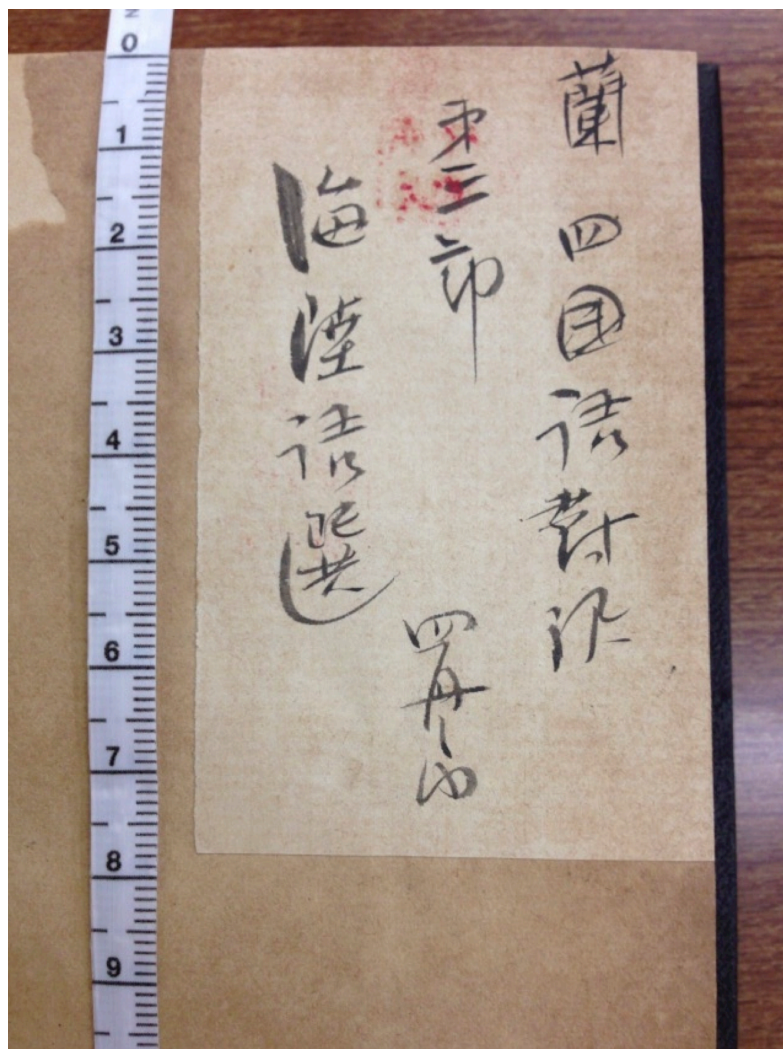
東大に所蔵する Landolt(本編)の見返し紙に貼られた紙

上の図は東京大学総合図書館に所蔵する Landolt(本編)の表紙の見返し紙み貼られた紙である。内容は 'gift of the Patent Office. for the reconstruction of the library destroyed on Sept. 1, 1923 大正十二年本館焼失ノ後復興ノ為メヨリノ寄贈' である。同じ紙は東京大学総合図書館に所蔵する Landolt(補遺)にも見られる。



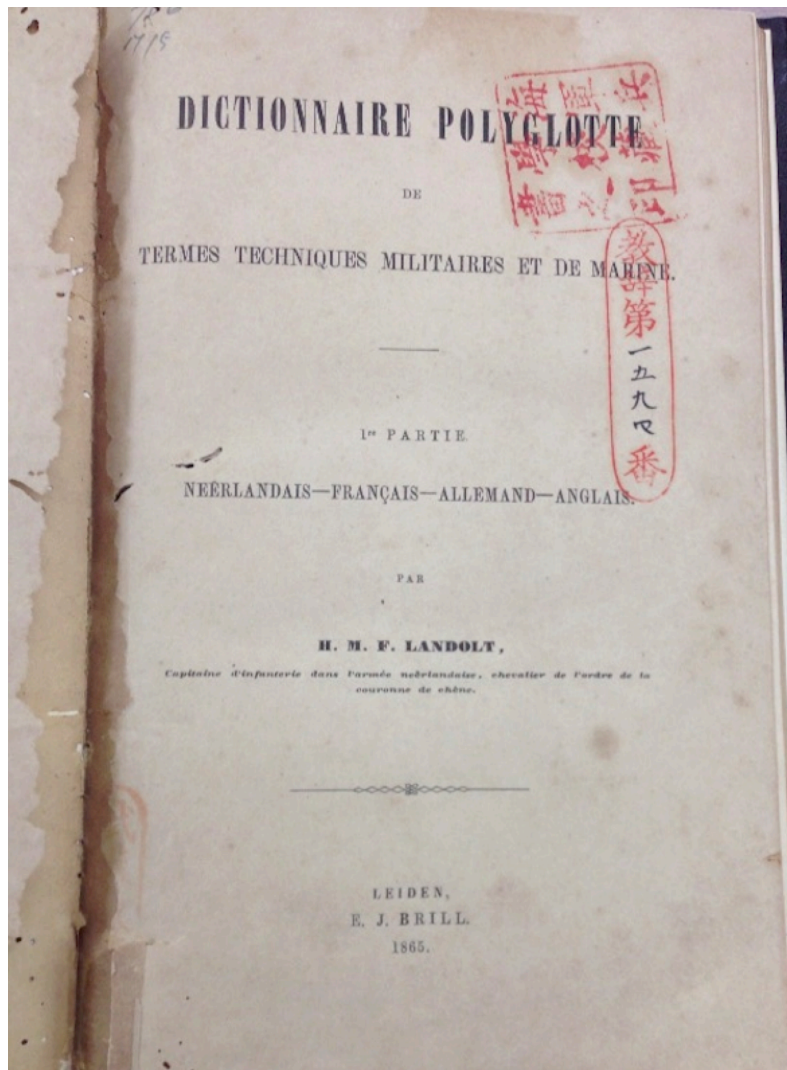
東大に所蔵する Landolt(本編)の遊紙に押された印

上の図は東京大学総合図書館に所蔵する Landolt(本編)の遊紙に押された印である。一番上は「東京帝国大学図書館」の角印である。真ん中は‘REMOVED FROM PATENT OFFICE LIBRARY 29SEP.1927’の楕円形の印である。一番下は‘PATENT OFFICE LIBRARY’の丸印である。これら印は Landolt(補遺)にも見られる。



長崎大に所蔵する Landolt(本編)のオランダ語編の遊紙に貼られた紙

上の図は長崎大学附属図書館に所蔵する Landolt(本編)のオランダ語編の遊紙に貼られた紙である。「蘭四國對訳/第一部四冊一同/海陸語選」の内容である。このような紙は残りのフランス語編とドイツ語編に貼られている。



長崎大に所蔵する Landolt(本編)のオランダ語編の扉に押された印

上の図は長崎大学附属図書館の Landolt(本編)のオランダ語編の扉である。扉の右上に「海軍兵学校蔵書之印」の角印と、「教辞第一五九四番」の長方形の印が押されている。左下に「武藤文庫」の長方形の印が押されている。これらの印は長崎大学附属図書館に所蔵する Landolt(本編)と Landolt(補遺)にも押されている。

参考文献

- 朝倉 治彦(1988) 『近代史史料陸軍省日誌』 東京堂出版
- 荒川 清秀(1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に』 白帝社
- 荒川 清秀(2007) 「「電」のつくことば—「電話」を中心に」 『19世紀中国語の諸相—周縁資料(欧米・日本・琉球・朝鮮)からのアプローチ』 雄松堂 pp. 263-282
- 李 漢燮(2010) 『近代漢語研究文献目録』 東京堂
- 王 安全(1986) 「『漢語大詞典』の例句運用」 『辞書研究』 1986年6月号 pp. 48-50
- 大植 四郎(1971) 『明治過去帳:物故人名辞典』 東京美術
- 大江 志乃夫(1985) 『日本の参謀本部』 東京中央公論社
- 大野 透(1984) 「「翻訳」考」 『国語学』第139号 pp. 121-132
- 片岡 徹也(2009) 『軍事の事典』 東京堂出版
- 片岡 徹也・福川 秀樹(2003) 『戦略論大系<別巻>戦略・戦術用語事典』 芙蓉書房出版
- 金沢大学創立50周年記念展示実行委員会(1999) 『蔵書展:金沢大学の源流』 金沢大学附属図書館
- 貴志 康親(1957) 『池田良輔先生小伝』 正住寺
- 作者不詳 (2008) 「辞書を片手に世界へ—近代デジタルライブラリーにみる明治の語学辞書—」 国立国会図書館
- 朱 京偉(2003) 『近代日中新語の創出と交流:人文科学と自然科学の専門語を中心に』 白帝社
- 朱 京偉(2007) 「明治期における社会主義用語の形成」 『19世紀中国語の諸相—周縁資料(欧米・日本・琉球・朝鮮)からのアプローチ』 雄松堂 pp. 193-215
- 朱 鳳(2009) 『モリソンの「華英・英華字典」と東西文化交流』 白帝社
- 沈 国威(1996a) 『『新爾雅』とその語彙』 白帝社
- 沈 国威(1996b) 「近代における漢字学術用語の生成と交流 医学用語編(1)」 『文林』第30号 pp. 59-94
- 沈 国威(1999) 「訳語「化学」の誕生—『六合叢談』にみえる近代日中語彙交流—」 『『六合叢談』(1857-58)の学際的研究』 白帝社
- 沈 国威(2000) 『植物啓原と植物学の語彙—近代日中植物学用語の形成と交流』 関西大学出版部

- 沈 国威(2008) 『近代日中語彙交流史』 笠間書院
- 鈴木 修次(1983) 「嚴復の訳語と日本の「新漢語」」 『国語学』 第132号 pp. 40-50
- 惣郷 正明(1986) 「和蘭通詞・堀達之助と幕府留学生・西周一最初の英和辞書と兵語辞書」
『ぶっくれっと』 三省堂
- 惣郷 正明・朝倉 治彦(1977) 『辞書解題辞典』 東京堂出版
- 惣郷 正明・飛田 良文(1986) 『明治のことば辞典』 東京堂
- 蘇 小楠(2006) 「近代日中学術用語の生成及び変遷」 語彙研究会叢書6 語彙研究会
- 高 名凱・劉 正埏(1958) 『現代漢語外来詞研究』 文字改革出版社
- 高 名凱・劉 正埏(1984) 『現代漢語外来詞詞典』 上海辞書出版社
- 高野 繁男(1985) 「『医学類聚』の語基と語構成」 『明治期専門術語集I』 有精堂
- 高野 繁男(2004) 『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法』 明治書院
- 田中 貞夫(2012) 『幕末明治期フランス語辞書の研究』 国書刊行会
- 陳 力衛(2001) 『和製漢語の形成とその展開』 汲古書院
- 寺田 近雄(1992) 『日本軍隊用語集』 立風書房
- 豊田 實(1963) 『日本英学史の研究』 千城書房
- 永嶋 大典(1970) 『蘭和・英和辞書発達史』 講談社
- 中山 泰昌(1958) 『新聞集成明治編年史』 東京本邦書籍
- 西堀 昭(1973) 「明治時代の兵語辞典の考察—仏和・和仏を中心として」 軍事史学
第9号 pp. 62-69
- 信岡 資生(2003) 「明治期の兵語辞書について(一): ドイツ語を中心に」 成城大學經濟
研究 第162号 pp. 119-156
- 朴 均轍(2010) 「日本における軍隊用語の成立に関する研究—『五国対照兵語字書』及び
独和軍隊用語辞典を中心に」 『日本語文学』 第44輯 pp. 142-153
- 箱岩 英一(2008) 「『劔岳 点の記』をよりよく理解するための解説 日本の参謀本部とその
役割」 『測量』 第58号 pp. 54-56
- 早川 勇(2006) 『日本の英語辞書と編纂者』 春風社 港の人
- 飛田 良文(2002) 『明治生まれの日本語』 淡交社
- 飛田 良文・琴屋 清香(2005) 『改訂増補哲学字彙訳語総索引』 港の人
- 藤田 東一郎(1940) 「西周の五國對照兵語字書と池田良輔」 『書物展望』 第10巻第9号,
pp. 178-184
- 藤田 東一郎(1941) 「池田良輔の法朗西文典草稿」 『書物展望』 第11巻第6号, pp. 17-26
- 馬 西尼(1997) 『現代漢語詞彙的形成—十九世紀漢語外来詞研究』 漢語大詞典出版社

- 宮田 和子(1998) 『『現代漢語外来詞研究』再考(1)十九世紀の英華・華英辞典を中心に』 『英
学史研究』 第31号 pp.167-188
- 宮田 和子(2010) 『英華辞典の総合的研究:19世紀を中心として』 白帝社
- 明治ニュース事典編纂委員会(1985) 『明治ニュース事典』 東京毎日コミュニケーションズ
- 森岡 健二(1969) 『近代語の成立(語彙編)』 明治書院
- 八耳 俊文(1992) 「漢訳西学書『博物通書』と「電気」の定着」 『青山学院女子短期大学
紀要』 第46号 pp.109-132
- 山田 孝雄(1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』 宝文館
- 湯浅 茂雄(1982) 「蘭学資料の語彙—『舍密開宗』の用語を中心として」 『近世の語彙』
講座日本語の語彙5 明治書院
- 米川 明彦(2002) 『明治・大正・昭和の新語流行語辞典』 三省堂
- 李 運博(2006) 『中日近代詞彙的交流:梁啓超的作用与影響』 南開大学出版社
- 渡辺 正雄(1990) 『明治前期学術雑誌論文記事総覧』 ゆまに書房

調査資料

日本側

- 『海軍兵学校出身者(生徒)名簿』 海軍兵学校出身者(生徒)名簿作成委員会 1987.
- 『近代史史料 陸軍省日誌』 東京堂 1988.
- 『近代史史料解説・総目次・索引』 岩波書店 1992.
- 『言林』 全国書房 1949.
- 『広辞苑』 岩波書店 1998.
- 『五国対照兵語字書』 参謀本部 1881.
- 『参謀本部歴史草案』 ゆまに書房 2001.
- 『辞苑』 博文館 1935.
- 『辞海』 三省堂 1952.
- 『ジーニアス和英辞典』 大修館書店 2003.
- 『新聞集成 明治編年史』 財政経済学会 1934.
- 『新和英大辞典』(第五版) 研究社 2008.
- 『大漢和辞典』 大修館書店 1984-1986.
- 『大日本国語辞典』 富山房 1915.
- 『帝国陸軍編制総覧』 芙蓉書房 1987.
- 『西周伝』(『鷗外全集第3巻』) 岩波書店 1971.
- 『日本国語大辞典』(第二版) 小学館 2000-2002.
- 『日本語語感の辞典』 岩波書店 2010.
- 『日本人名情報総覧』 日本図書センター 2002.
- 『日本陸海軍人名辞典』 芙蓉書房 1999.
- 『明治過去帳:物故人名辞典』 東京美術 1971.
- 『明治新聞雑誌文庫所蔵新聞目録』 東京大学出版会 1977.
- 『明治ニュース字典』 毎日コミュニケーションズ 1983-1986.
- 『和英語林集成・初版・再版・三版対照総索引』 港の人 2000.

複製本

- 『あけほの』 柏書房 2004.
- 『語厄利亜語林大成』 雄松堂書店 1976.
- 『英華和訳字典』 大空社 1998.
- 『英和对訳袖珍辞書』 秀山社 1973.
- 『英和・和英語彙』 (W. H. Medhurst, *An English and Japanese , and Japanese and English vocabulary*)
キリスト教資料刊行会 1970.
- 『解体新書』 講談社 1973.
- 『ことばの泉』 大空社 2003.
- 『辞林』 三省堂 1923.
- 『波留麻和解』 ゆまに書房 1997.
- 『東京曙新聞』 柏書房 2004-2007.
- 『附音挿図和訳英字彙・初版』 ゆまに書房 1995.
- 『仏語明要』 カルチャー出版社 1975.
- 『明治英和字典』 ゆまに書房 1995.
- 『明六雑誌』 大空社 1998.
- 『洋々社談』 ゆまに書房 2007.
- 『蘭語譯撰』 臨川書店 1968.
- 『和英語林集成・初版』 北辰 1966.
- 『和英語林集成・三版』 講談社 1974.
- 『和訳字彙』 ゆまに書房 1995.
- 『和蘭字彙』 早稲田大学出版会 1974.

デジタル・マイクロ資料

- 『雲南紀行』 陸軍文庫 1883. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー
- 『英和对訳辞書』 小林新兵衛 1872. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー
- 『英和陸海軍兵語辞典』 明誠館 1910. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー
- 『英和和英兵語辞典』 丸善 1907. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー
- 『改正兵語辞書・独和对訳之部第一』 内外兵事新聞局 1889. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー
- 『改正兵語辞書・独和对訳之部第二』 内外兵事新聞局 1890. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『改正兵語辞書・仏和対訳之部』 内外兵事新聞局 1890. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『改正野戦砲兵操典詳解』 兵事雑誌社 1910. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『官許仏和辞典』 好樹堂 1871. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『軍隊服務要覧』 兵事雑誌社 1907. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『将略論』 陸軍文庫 1883. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『新兵馬術教育必携』 川流堂 1908. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『浅解英和辞林』 出版社不明 1871. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『多節六足蟲新誌』 出版社不明 1900. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『致知啓蒙』 瑞穂屋卯三郎 1874. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『哲学字彙』 東京大学三学部 1881. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『独和兵語辞書』 独逸語学雑誌社 1899. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『拿破崙全伝』 加納久宣 1879. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『百一新論』 山本覚馬 1874. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『兵学辞書 A ノ部：仏独英蘭日五ヶ国対訳』 出版社不明 書写年不明 早稲田大学図書館古典籍総合データベース

『見習士官之修養』 厚生堂 1908. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『訳鍵』 出版社不明 1810. 北海道大学附属図書館マイクロ資料室

『和英英和兵語辞典』 英学新報社 1905. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『和英語林集成・再版』 出版社不明 1872. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『英和和英兵語辞典』 英学新報社 1907. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『和訳英辞林』 文学社 1885. 国立国会図書館近代デジタルライブラリー

中国側

- 『学生字典』 商務印書館 1915.
- 『漢語外来詞詞典』 上海辞書出版社 1984.
- 『漢語大詞典』 上海辞書出版社 1986-1994.
- 『漢訳新法律詞典(点校本)』 商務印書館 2007.
- 『近現代漢語新詞詞源詞典』 漢語大詞典出版社 2001.
- 『現代漢語詞典』 商務印書館出版 2005.
- 『現代漢語大詞典』 漢語大詞典出版社 2000.
- 『国音普通字典』 中華書局 1921.
- 『国文成語辞典』 中国国書公司 1916.
- 『辞海』 中華書局 1936.
- 『辞海』 上海辞書出版社 1979.
- 『辞海』 上海辞書出版社 1999.
- 『辞源』 商務印書館 1979.
- 『孫中山全集』 中華書局 1981.
- 『中華大字典』 中華書局 1915.
- 『毛沢東集』 蒼蒼社 1983.

複製本

- 『華英辞典』(*R. Morrison, A Dictionary of the Chinese Language* 1815-1823) ゆまに書房 1996.
- 『英華字典』(*W. Lobschied, English and Chinese Dictionary* 1866-1869) 千和勢出版部 1996.
- 『英華韻府歷階』(*S. Wells Williams, An English and Chinese Vocabulary in Court Dialect* 1844)
ゆまに書房 1995.
- 『新爾雅』 文海出版社 1977.
- 『新增英華字典』(*F. Kingsell, A Dictionary of the English and Chinese languages* 1899) 大空社
1999.

デジタル・マイクロ資料

- 『若定廬隨筆』 天文台半周評論社 1938. 中国国家図書館マイクロ資料
- 『見習軍官脩養』 出版社不明 1914. 中国国家図書館マイクロ資料
- 『父子英雄伝』 出版社不明 1935. 中国国家図書館マイクロ資料
- 『兵工問題』 商務印書館 1925. 中国国家図書館マイクロ資料

その他

Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine E.J.Brill. 1866-1868.

Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine Supplément E.J.Brill. 1871.

Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek A. W. Sijthoff 1997.

使用コーパス・データベース

聞蔵Ⅱ ビジュアル for Libraries (朝日新聞)

<http://database.asahi.com/library2/> 2011/06/01 アクセス

近代女性雑誌コーパス 国立国語研究所近代語のコーパス

神戸大学附属図書館デジタル版新聞記事文庫

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/index.html> 2011/06/06 アクセス

国立公文書館アジア歴史史料センター

<http://www.jacar.go.jp> 2012/09/06 アクセス

JapanKnowledge 『日本国語大辞典』

<http://japanknowledge.com> 2013/10/16～2013/11/16 アクセス

人民日報 (CD-ROM 版) 人民日報出版社

太陽コーパス 国立国語研究所近代語のコーパス

日国.NET 「日本国語大辞典第2版のご紹介」

<http://www.nikkoku.net/introduction/tokusyoku.html> 2013/10/16 アクセス

毎索(毎日新聞)

https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html 2012/10/12 アクセス

ヨミダス歴史館(読売新聞)

<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/> 2012/10/12 アクセス

謝 辞

2010 年、わたくしは北海道大学大学院文学研究科博士後期課程に進学しました。明治期に創出された語彙を研究対象にしたものの、具体的な研究対象と方法をなかなか決めることができず、悩み続けていました。指導教官である池田証壽先生のご指導のもと、これまでの語彙研究でほとんど取り上げられなかった資料である『五国対照兵語字書』と出会い、この辞書を書誌学的・文献学的・語彙論的などの視点から分析・考察することにしました。

研究にあたり、試行錯誤を繰り返していましたが、池田証壽先生のご指導と激励のおかげで、無事に乗り越えることができました。心から深く感謝申し上げます。また、執筆にあたり、ご指導を賜った小野芳彦先生・加藤重広先生・佐藤知己先生・李連珠准先生・松江崇先生・唐煒先生に感謝致します。そして、留学生である私の日本語の校正に根気よく取り込んで下さった先輩・学友たちにも感謝の意を表したいと思います。

調査に際しては、東京大学総合図書館・同志社大学今出川図書館・東北大学附属図書館・長崎大学附属図書館・防衛研究所資料研究センター・北海道大学文学研究科言語情報学講座・横浜市立大学学術情報センター・早稲田大学図書館の多くの係員に、多大なる恩恵を受けました。記して感謝申し上げます。

最後に、今まで私を温かく見守り、そして辛抱強く支援してくれた家族の皆に、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。